88-4 NO.50

勤労青少年の余暇活動と地域社会

―ボランティア活動をめぐって―

（昭和52年度研究報告）

埼玉県人少年課
13・8・11

勤労青少年余暇活動研究会

53.3

ま　え　が　き

勤労青少年余暇活動研究会は、労働省婦人少年局と雇用促進事業団の協力により昭和４７年度に設置されて以来、毎年テーマを定めて研究を重ねてきたが、昭和５２年度は過去５年の研究成果の上に立ち「勤労青少年の余暇活動と地域社会」―ボランティア活動をめぐって―をテーマとして研究討議を実施した。

研究討議は、近年生活の中に占める余暇時間の割合が増大し、勤労青少年の多様な余暇志向がみられるなかで、活発化しつつあるといわれる勤労青少年のボランティア活動について、その実態を明らかにするとともに、勤労青少年の余暇活動にとってどのような意義をもつかという問題意識のもとに行われた。

本報告書は、研究討議の結果に基づき各委員が分担して執筆した。

本報告書が、今後における勤労青少年行政を進めるうえに、いささかでも役立つとともに、広く関係の方々の御参考となれば幸いである。

昭和５３年３月３１日

勤労青少年余暇活動研究会

座長　江下　孝

埼玉婦人少年室
才　号

勤労青少年余暇活動研究委員会
（昭和５２年度）

江　下　　孝	元雇用促進事業団副理事長
江　橋　慎四郎	東京大学教育学部教授
加　藤　文　郎	全国中小企業団体中央会調査部長
鈴　木　春　男	千葉大学人文学部助教授
高　瀬　正　二	東京芝浦電気㈱常務取締役
牧　内　節　男	毎日新聞社取締役編集総務
松　下　倶　子	㈳ガール・スカウト日本連盟副総主事
吉　沢　英　子	関東学院大学文学部教授

目　　次

はしがき

第1章　勤労青少年の現況……3

1. 勤労青少年の就業状況……3
2. 勤労青少年の職業生活……3
3. 勤労青少年の余暇生活と意識……4

第2章　勤労青少年のボランティア活動の実態と意識

―― アンケート調査結果の概要 ――

1. アンケート調査の実施と概要……6
2. サンプルの特性……7
   (1) 性・年令別構成……7
   (2) 学歴別構成……8
   (3) 居住形態別構成……8
   (4) 事業所規模別構成……9
   (5) 事業所の産業別構成……10
   (6) 仕事の内容別構成……11
   (7) 在学中のクラブ活動経験……12
3. 調　査　結　果……12
   (1) 余暇をめぐる実態……12
   (2) ボランティア活動をめぐる実態……17
   (3) ボランティア活動参へのきっかけと問題点……25
   (4) 属性別に見たボランティア活動参加への阻害要因と参加の意志……31
   (5) 奉仕をめぐる意識……41
   (6) ボランティア活動のあり方についての認識……45

第3章　勤労青少年ホームにおけるグループのボランティア活動の実態と地域社会……49

―― アンケート調査の概要 ――

1. ホームにおけるグループまたはクラブ数……49
2. ボランティアグループの有無とグループ数……49
3. ボランティアグループの活動年数……50
4. ボランティア活動の内容……51
5. ボランティア活動へのきっかけ……51
6. 地域におけるボランティア活動の積極的な動き……52
7. ボランティア活動に対する勤労青少年ホーム側の立場……53

第4章　勤労青少年のボランティア活動事例……54

1. 勤労青少年福祉推進者選任事業所の活動事例……54

T電気㈱におけるボランティア活動…… 54
2. 勤労青少年福祉員の指導による活動事例…… 57
(1) 特技を活かしたボランティア活動の事例…… 57
イ 精薄児施設に対するボランティア活動…… 57
ロ 寝たきり老人に対するボランティア活動…… 58
(2) ボランティア友の会によるコミュニティづくりの事例…… 59
3. S県I市勤労青少年ホームにおける活動…… 61
4. 青少年団体（ガールスカウト）における活動…… 64
第5章 諸外国における勤労青少年のボランティア活動…… 67
1. 世界的動向…… 67
2. 諸国の勤労青少年ボランティア組織の状況…… 71
第6章 ボランティア活動に対する国の助成…… 74
第7章 勤労青少年のボランティア活動の意義…… 77
1. 「共に生きる愛の市民運動」と呼ぼう…… 77
2. 共に生きる連帯感…… 80
第8章 問題点と今後の方向…… 83
1. 問題点…… 83
2. 今後の方向…… 87
参考 （調査票・集計票）

参考図表目次

Ⅱ－1表　対象サンプルの性・年令別構成……7
Ⅱ－1図　学歴構成……8
Ⅱ－2図　居住形態別構成……9
Ⅱ－3図　事業所規模別構成……9
Ⅱ－4図　事業所産業別構成……10
Ⅱ－5図　現在の仕事別構成……11
Ⅱ－2表　在学中のクラブ活動経験の有無……12
Ⅱ－6図　平日自由時間量……13
Ⅱ－7図　勤労形態……14
Ⅱ－8図　余暇活動（平日）……14
Ⅱ－9図　休日自由時間量……15
Ⅱ－10図　余暇活動（休日）……16
Ⅱ－12図　1ケ月休日数……17
Ⅱ－12図　ボランティア活動に対する認知……17
Ⅱ－13図　参加の有無……18
Ⅱ－3表　ボランティア活動の種類……19
Ⅱ－14図　福祉施設などでの活動……20
Ⅱ－4表　福祉施設での活動に対する参加率……20
Ⅱ－15図　個人・グループに対して行う活動……21
Ⅱ－5表　個人・グループに対して行う活動に対する参加率……22
Ⅱ－16図　環境改善や社会制度に対する活動……23
Ⅱ－6表　環境改善や社会制度に対する活動への参加率……23
Ⅱ－17図　活動年数……24
Ⅱ－18図　活動日数……25
Ⅱ－19図　活動をはじめたきっかけ……26
Ⅱ－20図　「ボランティア活動をする上での問題があるか」の属性別検討……28
Ⅱ－21図　活動上の問題の内訳……30
Ⅱ－7表　問題の内訳に対する属性別検討……31
Ⅱ－8表　性別・ボランティア活動参加経験の有無……32
Ⅱ－9表　性別・現在不参加の理由……32
Ⅱ－10表　性別・参加意志……33
Ⅱ－11表　年令別・ボランティア活動参加経験の有無……33
Ⅱ－12表　年令別・現在不参加の理由……34

Ⅱ－１３表　年令別・参加意志……35
Ⅱ－１４表　学歴別・ボランティア活動経験の有無……35
Ⅱ－１５表　学歴別・現在不参加の理由……36
Ⅱ－１６表　学歴別・参加意志……36
Ⅱ－１７表　平日の自由時間別・ボランティア活動参加経験の有無……37
Ⅱ－１８表　平日の自由時間・現在不参加の理由……38
Ⅱ－１９表　平日の自由時間別・参加意志……38
Ⅱ－２０表　在学中のクラブ活動の経験有無別・ボランティア活動参加経験の有無……39
Ⅱ－２１表　事業所の規模別・ボランティア活動参加経験の有無……39
Ⅱ－２２表　事業所の規模別・現在不参加の理由……40
Ⅱ－２３表　事業所の規模別・参加意志……41
Ⅱ－２２図　老人や体の不自由な人、子供などが困っている時……42
Ⅱ－２４表　老人や体の不自由な人が困っているときの態度（年令・学歴別）……43
Ⅱ－２５表　老人や体の不自由な人が困っているときの態度（規模・クラブ活動経験別）……44
Ⅱ－２３図　ボランティア活動のあり方について……46
Ⅱ－２６表　ボランティア活動についてどのように考えているか……47
Ⅲ－　１表　ホームにおけるグループまたはクラブ数……49
Ⅲ－　２表　ボランティアグループの有無とグループ数……50
Ⅲ－　３表　ボランティアグループの員数別グループ数……50
Ⅲ－　４表　ボランティアグループの活動年数……50
Ⅲ－　５表　ボランティア活動の内容……51
Ⅲ－　６表　ボランティア活動の動機……51
Ⅲ－　７表　地域におけるボランティア活動の積極的な動きとホームにおけるボランティア・グループの有無との関係……52
Ⅲ－　８表　ボランティア活動に対するホーム側の立場……53

はじめに

本研究会は、本年度の研究テーマを、勤労青少年と地域社会 ― ボランティア活動をめぐって ― ということに焦点をあてて調査研究を進めることになった。しかし、わが国の場合には、ボランティア活動についての歴史も浅く、また、ボランティアという言葉の含む内容の多様性から、必ずしも十分な共通の理解があるわけでもなく、その実態を把握することは容易なことではない。

例えば、ボランティア・リーダーという言葉の訳語としては奉仕的指導者とか篤志的指導者といわれることもあり、したがって、ボランティア活動といった場合には、何か、奉仕的、福祉的活動をする意味にとられる場合も多い。しかし、ボランティアとは、本来、「自ら進んで事業に参加する人」、「自ら進んでする」という自発性が第一義的に重要であり、したがって、自発的に参加することがボランティア活動であると広義に解することもできる。したがって、「青少年自身が、自発的意志で、すすんで役割を遂行することによって、その集団や社会を自分たちのものと認識するようになる過程こそが参加である」といわれるように、このような青少年たちの自発的な参加をもボランティア活動ととらえることもできる。

しかし、やや狭義に解するならば、「自発的にある特定のサービス、特に危険を伴いあるいは骨の折れる努力を必要とすることを報酬を得ることを目的としないで実行する人」ととらえられ、ボランティア活動の三つの特色として、(1)自発性、(2)無給性、(3)福祉性をあげ、「ボランティア活動は、広い意味での社会の福祉の向上 ― 社会の人々の幸福に向けられたものである」として、やゝ限定してとらえる考え方もある。

以上のように、青少年の自発的な参加という広義にとらえる考え方と、福祉や社会への奉仕という面にやゝ強調点をおく狭義の考え方があるのであるが、本委員会では、あまり、ボランティア活動について、はじめに論議して、その定義をするということはさけて ― もちろん、その必要性は十分認めつつも ― 一応、いろいろな見解についてレビュウするにとゞめ、むしろ、今日の勤労青少年が、実際に、ボランティア活動と考え、実施している現実をまず把握してみるということに重点をおいた。

したがって、今日の勤労青少年がボランティア活動として、

1) どんなことを行なっているか（活動内容）
2) 誰が（活動主体、個人か団体かなど）
3) 誰に対して（活動対象）
4) どんな風に（活動形態 ― 規模、頻度、自発的参加の程度など）
5) 何処で（活動場所）
6) 参加の動機

などの実態をとらえることに重点をおき、また、未だ、ボランティア活動は発展途上にあると考え、それらをはばんでいる点はどのような点にあるかということなどもあわせ明らかにすることができればと考え、直接、勤労青少年に質問紙を配布するとともに、全国にある勤労青少年ホーム（以下「ホーム」という。）を通じても、その実態をまずとらえてみるということに重点をおいて

調査を実施した。

本報告書は、まず、はじめに、今日のわが国の勤労青少年の現状について述べ、ついで、本年度実施した、勤労青少年のボランティア活動の実態についての調査結果を、個人を通じての調査結果、ホームを通じての調査果の二つにわけてまとめ、ついで、ボランティア活動の具体例について述べ、さらに、諸外国における青少年のボランティア活動の実際、勤労青少年のボランティア活動意義、についてもふれ、最後に、問題点と今後の方向を指摘して本報告書をまとめることとした。

もちろん、限られた期間、人員、経費のなかでの調査研究であり、今日のわが国の勤労青少年のボランティア活動のすべてについて調査し得たわけではない。しかし、この種の資料は、未だ数少なく、いろいろな意味で青少年のボランティア活動の重要性はますことが予想されるのであり、本報告書が、今後の勤労青少年のボランティア活動の促進に役立ちそれを通じて、一人一人の勤労青少年が社会とともに成長をとげ、充実した日々を送り得ることに少しでも寄与することができればと考えまとめた次第である。

終に、本調査に種々協力して下さった関係者の方々にも厚く謝意を表する次第である。

第１章　勤労青少年の現況

1.　勤労青少年の就業状況

昭和５２年における１５才から２４才までの青少年就業者数は、総理府「労働力調査」によると、７０８万人で、同年令人口の４３.６％を占めている。青少年が多く就業している産業は、製造業１８１万人（２５.６％）、卸売業・小売業１８５万人（２６.４％）、サービス業148万人（２０.９％）で、この３産業に青少年就業者の７２.９％が就労している。

青少年就業者は年々減少しており、昭和４８年には958万人であったので、昭和５２年までの５年間に２５０万人、約３０％近い減少をみている。このように全体的に就業者が減少するなかで、第３次産業就業者の占める割合は漸増しつつあり、昭和４８年にはその割合が５５.２％であったが昭和５２年には６３％となっている。

青少年就業者を年令階級別にみると１５～１９才は１４４万人、２０～２４才は５６４万人で、青少年就業者の約８割は２０～２４才層である。青少年就業者のうち、雇用者は６４２万人（就業者中９０.７％）で、年令階級別にみた場合１５～１９才は１３１万人（２０.４％）、２０～２４才５１１万人（７９.６％）となっている。

青少年雇用者の事業所規模別構成比についてみると３０人未満が１９３万人（３０.０％）で最も多く、ついで1,000人以上１６３万人（２５.３％）、１００～４９９人　１００万人（１５.６％）、３０～９９人　８８万人（１３.７％）、５００～９９９人　３３万人（５.１％）となっており、１００人未満の規模の事業所に４３.７％が雇用されている。また、青少年雇用者の男女別構成比（非農林）は、男子３２３万人（５０.２％）、女子３２０万人（４９.７％）となっている。

次に、文部省「学校基本調査」により新規学卒者の就職状況についてみると、昭和５２年３月の中学卒業者１５８万人のうち就職者は７万６千人（４.８％）で、第１次産業就職者は２万７千人（３.６％）、第２次産業４万８千人（６２.６％）、第３次産業２万５千人（３２.３％）となっている。高校卒業者は１４０万３千人で、うち就職者は５９万６千人（４２.５％）であり、第１次産業就職者は１万５千人（２.５％）、第２次産業２０万６千人（３４.６％）、第３次産業３３万６千人（５６.３％）となっている。高校卒業就職者を業種別にみると、製造業（２９.９％）への就職者が最も多く次いで、卸売業・小売業（２８.０％）、サービス業（１２.８％）の順になっている。

また新規学卒者の県外職状況についてみると、中学卒業者の２７.０％、高校卒業者の２８.５％は県外就職している。

さらに、非農林業の青少年雇用者のうち親元を離れて、寮、寄宿舎、下宿に居住している者は総理府「働労力調査」によると２７.２％であり、ほぼ４人に１人は親元を離れて就業している。

2.　勤労青少年の職業生活

長びく不況を背景に、青少年に対する求人数も年々大巾に減少してきているが、昭和５２年３月新規中卒者に対する求人倍率は３.９倍、高校卒業者については、２.０倍となっており、需要はなお超過している。

一方雇用情勢のきびしさを反映して、青少年の職場離れの傾向には変化がみられる。労働省

「新規学卒就職者の就職離職状況調査」によると、昭和４５年３月中学卒業者の離職率は、１年後１９.５％、２年後３５.６％、３年後４８.１％で、高卒者についてはそれぞれ１９.４％、３３.９％４６.７％であったが、昭和４８年３月中学卒業者については、１年後１９.４％、２年後３３.４％、３年後４５.３％、高卒者については、それぞれ１７.０％、３０.０％、４１.１％となっており、石油危機を契機として離職率の低下傾向がうかがえる。

次に勤労青少年をとりまく労働条件についてみると、賃金については一般的な賃金上昇率の鈍化を反映して、各学歴とも上昇率は鈍化している。労働省「賃金構造基本統計調査」（昭和５２年）によると、５２年３月新規学卒者の初任給は、中卒では男子が７０,４００円（対前年上昇率８.８％）、女子が６３,８００円（同８.５％）、高卒では男子が８１,９００円（同６.５％）、女子が７８,４００円（同６.８％）、短大卒では男子が８７,９００円（同６.９％）、女子が８６,６００円（同６.９％）、大卒では、男子事務系が１０,１００円（同７.２％）技術系が１００,９００円（同７.０％）、女子が９５,３００円（同８.８％）となっている。労働時間については、労働省「労働時間制度調査」（５１年）によると週所定労働時間は１企業平均４４時間４０分（５０年４４時間４８分）であり、週休二日制を採用している企業の割合は４３.４％（うち完全４.８％、月３回２.７％、隔週９.２％、月２回１３.０％、月１回１３.７％）となっている。また、労働者１人平均週所定労働時間は４２時間００分（５０年４２時間０８分）で、週休二日制の適用を受ける労働者数の割合は７１.３％（完全２３.６％、月３回６.４％、隔週１２.５％、月２回１５.８％、月１回１３.０％）となっている。

また、文部省「学校基本調査」（昭和５２年）によると、５２年の定時制高校生は１９万６千人、通信制高校生は１４万１千人であるが、定時制通信制高校通学者は卒業までにかなりの者が脱落していることが指摘されている。

3. 勤労青少年の余暇生活と意識

余暇時間が着実に増加し、勤労青少年の余暇志向が多様化しているなかで、勤労青少年はどのように余暇を過し、余暇についてどのような意識をもっているかについて概観する。

(1) 余暇生活の実態

労働省「勤労青少年の職業と余暇に関する調査」（５１年）によってみると、平日においては、「ラジオ、テレビ、新聞」（７９.８％）や「週刊誌、マンガ、雑誌」（２９.１％）等で過す者が多く、ついで「友人と雑談」（２６.９％）、「レコードをきく」（２３.２％）、「休養」（２２.７％）の順となっている。男女とも「ラジオ、テレビ、新聞」や「週刊誌、マンガ、雑誌」で過す者の割合は高いが、男子は「娯楽（映画、パチンコ等）」（３０.５％）や「飲酒」（１７.１％）等で過す者が多く、女子は「友人と雑談」（３２.３％）、「家族団らん」（１５.６％）で過す者が多い。

休日においては、平日と同様「ラジオ、テレビ、新聞」で過す者が多く（３９.６％）、ついで「娯楽」（３７.６％）の順になっているが、平日にくらべ、「ショッピング」「旅行、ドライブ、つり等」や「デート」等で過ごす者がふえている。

また、性別にみると、男子は「娯楽」（５１.０％）、女子は、「ショッピング」（５４.８％）で過ごす者の割合が高くなっている。

また、総理府「世界青少年意識調査」（４７年）により、欧米主要国青少年（アメリカ、イギリス、西ドイツ、フランス）の休日の余暇の過ごし方についてみると、「隣人、知人と」、「スポーツ、映画、演劇をみる」、「読書、音楽」などで過ごす者が多く、「テレビ、雑誌」などで過ごす者は、イギリスを除き、順位が低くなっている。わが国に比較して、欧米主要国の青少年は積極的でバラエティに富んだ余暇活動を行っているといえよう。

(2) 余暇生活に対する意識等

勤労青少年は余暇生活についてどのような希望をもっているかについて、前記調査（労働省「勤労青少年の職業と余暇に関する調査」）によりみると、「時間、お金、施設」などの条件が満された場合、平日には、男子は「スポーツ、運動をしたい」（２９.７％）が最も多く、ついで「休養にあてたい」（２３.５％）、「趣味、文化活動をしたい」（２０.７％）の順であり、女子は「趣味、文化活動をしたい」（２７.７％）、ついで「各種講座や学校に行き勉強をしたい」（２５.６％）の順になっている。また、休日には、「旅行、ハイキング、ドライブ等をしたい」が圧倒的に多く男子６１.５％、女子６９.７％となっており、勤労青少年は、本来は行動型の余暇活動を志向しているといえよう。

次に、総理府「国民生活に関する世論調査」（５１年）により、青少年が日ごろ一番充実感を持つのはどのような時であるかについてみると、２０～２４才の男子では「友人や知人と会合、雑談している時」（３６.４％）が最も多く、次いで「趣味やスポーツに熱中している時」（３５.９％）の順になっており、女子では「家族団らんの時」（３７.８％）ついで「友人や知人と会合、雑談している時」（３１.５％）、「趣味やスポーツに熱中している時」（３１.３％）の順になっている。

勤労青少年の日常生活の中で余暇は重要な部分を占めているが、その余暇に「仲間」と共にすごすことが大きな生きがいとなっていることがうかがえるのである。

第2章　勤労青少年のボランテイア活動の実態と意識

― アンケート調査結果の概要 ―

1.　アンケート調査の概要

勤労青少年がどのような形で余暇活動をおこなっているか、そしてかれらはその中で十分心が満たされているのかどうかといった問題は、勤労青少年のあり方を考えるにあたって解決されなければならない重要な問題である。どんな時代でも青少年期は、感情面で悩んだり、自分の役割の確認ができなかったりといった点で大きくゆれ動く世代であるが、今日とくに、青少年の意識と行動には多くの混乱や混迷が見られる。自分とは何か、社会の中で自分が果たすべき役割は何か、社会から何が期待されているかといったことについて認識する機会に欠けている点、さらには、人間として連帯感がもてないままに、その裏返しとしての人間不信感の存在といった点に一つの特質が見られるのである。

とくに中小企業で働く勤労青少年の問題を考えたとき、このことは一層深刻な問題だといわざるを得ない。実際のところ、職場での仲間は、その規模が小さいこともあって、非常に少なく、また、職場の中で能力や個性を発揮しようにも、万事が能率中心である職場ではそれは望むべくもないのである。従って、自分はこれをしたのだという自己実現の確認と、心からつきあえ、何でもしゃべり合える仲間の確保は当面のところ余暇活動の中でおこなわれていかなければならないのである。

今回、研究会でとりあげた勤労青少年のボランティア活動は、そうした自己実現ないし連帯感の充足が得られる活動として、これからの勤労青少年の余暇活動のなかで重要な意味を占めるものと思われる。本章では研究会で実施した余暇生活におけるボランティア活動をめぐってのアンケート調査をもとに勤労青少年のボランティア活動の実態を明らかにしたい。

アンケートの質問事項は、巻末にある調査票の通りである。また対象とした勤労青少年は、一口に勤労青少年といっても、勤務先の規模や業種、あるいはそこで本人がどのような仕事をしているのかといったことの違いでその意識や行動にさまざまな違いがでてくることも予想されたので、できるだけ多くのサンプルをとることを考え、しかもいろいろな属性をもった人たちが、勤労青少年の実態をできるだけ代表する形でサンプリングされることを考慮して抽出作業をおこなった。

対象者は直接個人を抽出するのではなく、まず事業所を抽出し、その事業所から個人を無作為に抽出するという二段抽出法をとったが、中小零細な事業所を抽出するには直接抽出すること自体むずかしかったので、この場合は、まず協同組合、商店街等の業者団体を無作為に抽出し、その力を借りて事業所を抽出するという手続きをとった。

なお、事業所抽出にあたっては、労働力調査から産業別、規模別の労働者数の実態を把握し、

できるだけ、産業別、規模別に見てサンプルが実態を代表するように事業所を抽出した。対象とした事業所はわが国全域にわたるよう配慮し、110の事業所を次のような構成比で抽出した。

	1,000人以上	300～999人	50～299人	10～49人	9人以下	計
建設業	1	1	2	2	0	(6)
製造業	2	3	5	5	0	(15)
卸売・小売業	1	3	5	5	20	(34)
金融・保険・不動産業	1	0	0	0	5	(6)
運輸・通信業	1	0	1	0	0	(2)
電気・ガス・水道業	0	0	1	0	0	(1)
サービス業	0	3	3	10	30	(46)
計	(6)	(10)	(17)	(22)	(55)	(110)

なお、回収率は9人以下の事業所で低かったが、回収されたサンプルの内訳については以下で説明する。

2. サンプルの特性

(1) 性・年令別構成

回収されたサンプルの合計は1,012であり、その内訳を性・年令別に示すとⅡ－1表のようになる。回収サンプルは女子の方が多少多く、全体の58.5%、男子が残りの41.5%である。対象サンプルを年令別に見ると、男子では22才以上のところが多く、女子ではそれより若い層で男子よりも多くなっていることが注目される。

Ⅱ－1表　対象サンプルの性・年令別構成

単位：人(%)

性＼年令	～19才	20～21才	22～24才	計
男	83 (19.8)	103 (24.5)	234 (55.7)	420 (100.0)
女	144 (24.3)	221 (37.3)	227 (38.4)	592 (100.0)
計	227 (22.4)	324 (32.0)	461 (45.6)	1,012 (100.0)

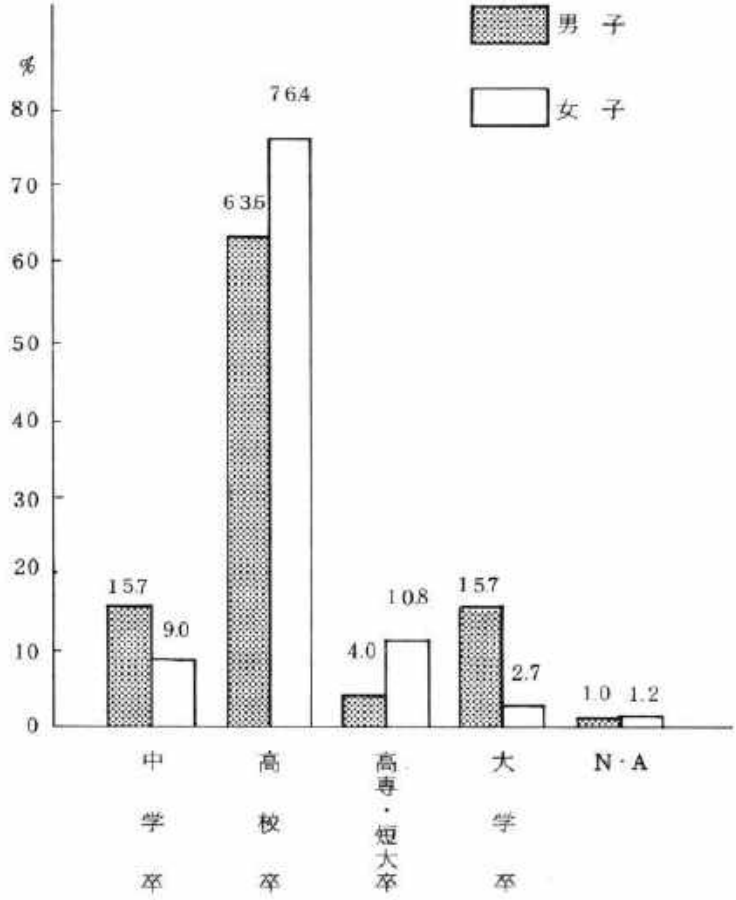
こうした傾向を生み出した原因は、男子と女子との大学への進学率の差も影響しているのではないかと思われる。すなわち、男子の場合、22才以上の年令層で比率が高まっているのは、大学卒業者が22才以降で入職してくることによると思われる。また女子においては、男子よりも比較的若い勤労者が存在しているということは、高卒で入職するものが多く、これが19才以下の層を増大させ、それが20～21才になると更に短大卒業者が含まれてくることによるのだと考えられる。22才を過ぎると女子の場合は退職するものもあらわれ、全体的に構成比を減らせているのである。以上のことからも明らかな通り、今回の調査による回収サンプルは、現在のわ

が国の勤労青少年の実態を比較的よく代表していると見ることができる。従ってわれわれはこの前提に立ってこの回収サンプルの分析をもとに、勤労青少年のボランティア活動の実態を究明したいと思う。

(2) 学歴別構成

対象にした勤労青少年の学歴別構成を見ると、Ⅱ－1図のようになる。勤労青少年と呼ばれる年令的には一般的に25才未満の勤労者の場合、高卒者が圧倒的に多いことがここからも明らかになる。男女の違いを探ると、男子の場合には、高卒者はもちろん多いが、それでも中学卒業者や大学卒業者もかなり含まれていて、比較的学歴的には多様化している傾向が見られる。それに対して女子の場合には、高卒者が圧倒的に多く、中卒者、大卒者はかなり少ない。また、短大クラスの卒業者が多いことは女子の特性であろう。

Ⅱ－1図　学　歴　構　成



(3) 居住形態別構成

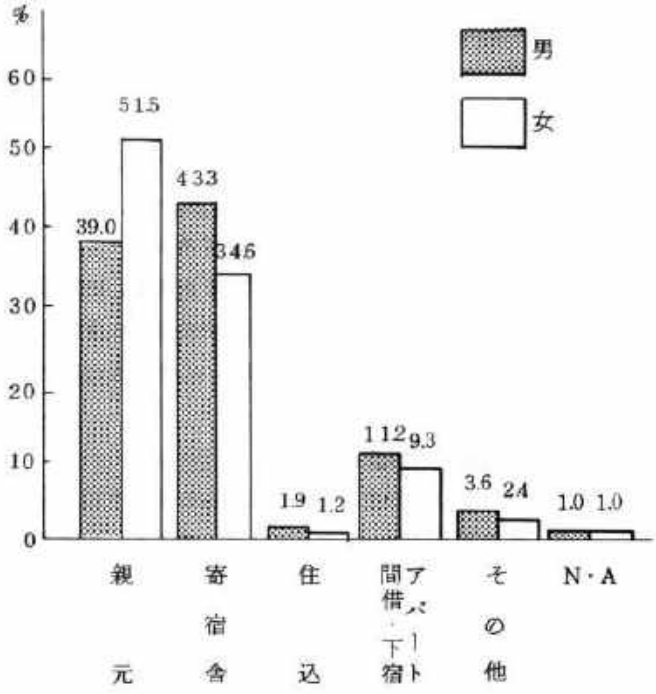
勤労青少年のひとりひとりが、どのような居住形態であるかということは、かれらの余暇活動にさまざまな影響を与えるものと思われる。そこで、性別に居住形態別構成を見るとⅡ－2図のようになる。全体的に見ると、親元で生活しているものと寄宿舎で生活しているものがほぼ同数存在しており、アパート　間借・下宿での生活者がそれに次いでいる。男女別では、男子の場合は寄宿舎住まいの者が多く第1位を占めており、親元に住んでいる者がそれに次いでいるが、それに対して女子の場合には、親元に住んでいる者が5割以上を占め、寄宿舎に住んでいる者はずっと少

なくなっている。なお、図に示されていないが、従業員規模の大きい企業に働く勤労者の場合には寄宿者に住んでいる者の比率が一般に高くなる傾向を示すことが明らかになっている。

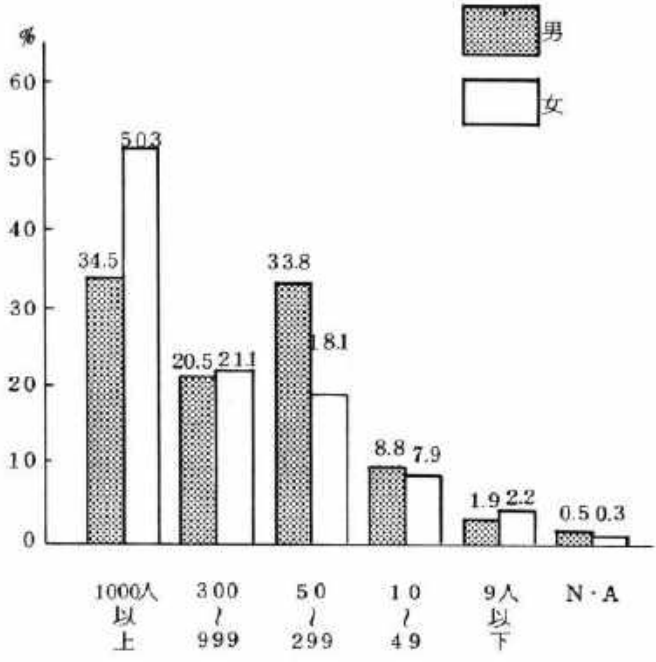
(4) 事業所規模別構成

すでに指摘したところでも明らかな通り、事業所規模の大小は、そこに勤務する勤労者の行動や意識にもさまざまな影響を与えている。今回回収されたサンプルの内訳を事業所規模でみるとⅡ－3図のようになり、小零細企業の従業員の数が比較的少ないことに気付く。とくに女子の場合には1,000人以上の大企業に勤める者の比率が過半数となっており、比較的規模の大きいところに集中している。男子の場合には女子とくらべると50～299人クラスの中企業に勤務する者も多く含まれており比較的分散しているが、しかしこの場合も50人未満の事業所に勤務する者の比率が非常に低いことが目立つのである。今回の調査においては、対象者は無作為に抽出しており、あえて小零細事業所に勤務する者を避けたようなことは決してなかったのであ

Ⅱ－2図　居住形態別構成



Ⅱ－3図　事業所規模別構成

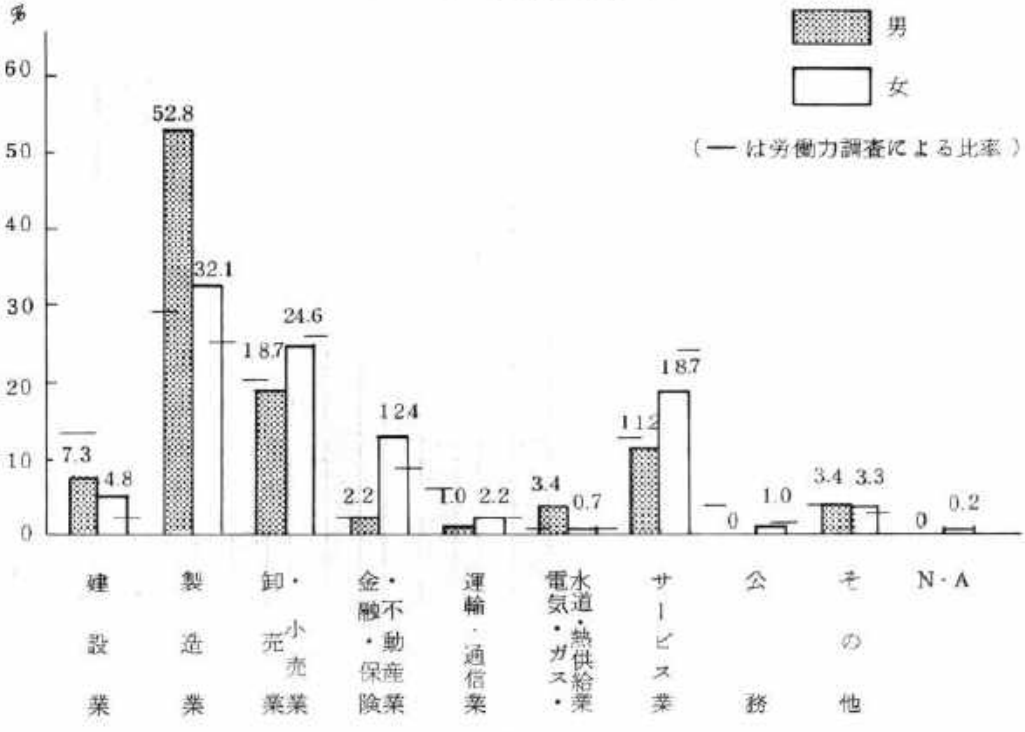


るが、結果はその層が少なくなっているのである。このことはある意味では、勤労青少年のボランティア活動の実態、あるいは職場活動を含む生活全体の実態を明らかにしていると考えられる。すなわち、小零細規模の事業所に勤務する人たちのサンプルが少なかったのは、対象者として選ばれた人が少なかったのではなく、対象者として選ばれても、それに答える人が少なかった、すなわち回収率が悪かったということが考えられるのである。そしてそのことは、小零細企業に働く人たちの生活において、アンケートに積極的に答えるゆとりそのものが時間的にも精神的にもないということ、さらには今回の中心テーマであるボランティア活動そのものに対して無知であったり無関心であったりすることの反映であるとも思われるのである。しかしいずれにしても、規模別で見るかぎり、小零細企業のサンプルが少ないということは、今回の回収サンプルが勤労青少年の中では多少条件的に恵まれている人たちに片寄っているということであり、今後分析を進めていく中でもこのことは重要な前提条件として考慮に入れなければならない。

(5) 事業所の産業別構成

対象者の抽出のところでもすでにふれたように、今回のサンプリングは二段抽出法をとっており、無作為とはいいながら、まず企業とか、協同組合とかを最初に選出したため、その選出の仕方によって事業所の産業別構成が決ってしまうわけである。我々としては勤労青少年が働いている業種のすべてを、それと同じ比率で含むことを理想としたのであるが、その結果はⅡ－4図に示すとおりとなった。

Ⅱ－4図　事業所産業別構成



総理府の労働力調査によると、１５才～２４才の勤労青少年は昭和５１年度の調査で、男３９２万人、女３５１万人であるが、その産業別構成比を見ると次のようになる。

＜男＞　建設業１３.５％、製造業２８.６％、卸売業・小売業２１.９％、金融保険業・不動産業2.8％、運輸・通信業7.1％、電気・ガス・水道・熱供給業1.0％、サービス業１５.３％、公務4.8％、農林漁業その他4.6％。

＜女＞　建設業2.3％、製造業２５.６％、卸売業・小売業２７.９％、金融保険業・不動産業１０.０％、運輸・通信業3.1％、電気・ガス・水道・熱供給業0.6％、サービス業２５.１％、公務1.7％、農林漁業その他2.9％。

さて、以上のデータをⅡ－４図の結果と比較してみるとどうなるであろうか。全体的に見ると、各構成比は男女のちがいも含めて、「労働力調査」の結果と概ね一致していることがわかる。ただ極端に違うのは男子の場合は製造業従事者が多いことであり、この多い分が他の産業従事者の比率を少しづつ下げる結果になっている。このように多少のかい離はあるが、全体的に見ると、今回のデータは勤労青少年の姿を比較的よく代表する縮図としてみていいことがここからも明らかになったわけである。

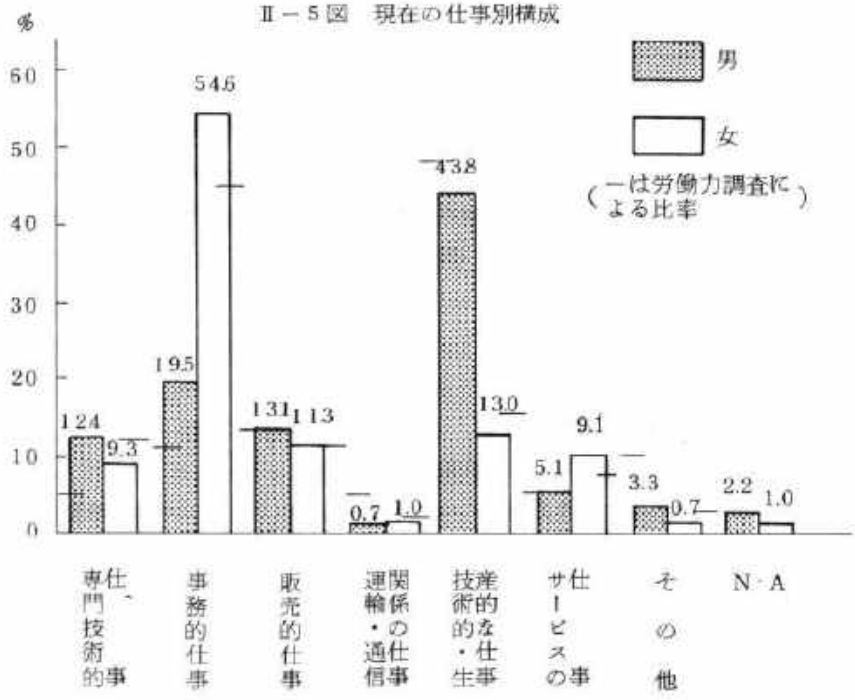
(6)　仕事の内容別構成

どんな仕事内容であるかということはいうまでもなく従事している産業に影響されるところが大きいのであるが、ここでも回収されたサンプルの構成比と、労働力調査との結果を対比してみよう。労働力調査によると、勤労青少年の職業別構成比は次のようになっている。

＜男＞　専門的・技術的職業従事者4.1％、事務従事者１１.５％、販売従事者１３.５％、運輸・通信従事者5.6％、技能工、生産工程作業者及び単純作業者18.7％、サービス職業従事者5.9％、その他10.5％

＜女＞　専門的、技術的職業従事者１２.３％、事務従事者４５.９％、

Ⅱ－５図　現在の仕事別構成



販売従事者１０.８％、 運輸・通信従事者1.７％、 技能工・生産工程作業者及び単純作業者17.4％、サービス職業従事者8.3％、 その他3.1％

このデータをⅡ－５図の回収サンプルと比較すると、この場合も概ね一致していることがわかる。男子の場合、専門技術的仕事ならびに事務的仕事が全国平均より高くなっているのに対し、女子の場合には事務的職業が高くなっている。しかしその差はそれ程大きいものではなく、回収されたサンプルの代表性はますます確保されたと見なすことができるのである。

(7) 在学中のクラブ活動経験

在学中にクラブ活動を経験しているかどうかは、職業についてからのボランティア活動に何らかの影響を与えるのではないかと予測されたことから、今回の調査ではそれを調べたのであるが、ここではサンプルの特性という観点に立って、クラブ活動経験の有無を性別に見てみよう。Ⅱ－２表はそれを示したものであるが、まず眼につくのはクラブ活動経験者が実に多いと

Ⅱ－２表　在学中のクラブ活動経験の有無

クラブ活動経験 ＼ 性別	有	無	不明	計
男	３０８人 （７３.３）	９０人 （２１.４）	２２人 （５.２）	４２０人 （１００.０）
女	３９２人 （６６.２）	１７０人 （２８.７）	３０人 （５.１）	５９２人 （１００.０）
計	７００人 （６９.２）	２６０人 （２５.７）	５２人 （５.１）	１,０１２人 （１００.０）

いう点である。男女計では６９.２％のものがクラブ活動を学生時代に経験しているわけである。男子と女子とでは男子の方が経験者が多く、７３.３％となっている。

このようにクラブ活動経験者が多いことはかれらの職場の中で充分生かされるべきなのであるが、ボランティア活動への参加の有無も含めて、それが生かされているのかどうかという問題を究明しなければなるまい。

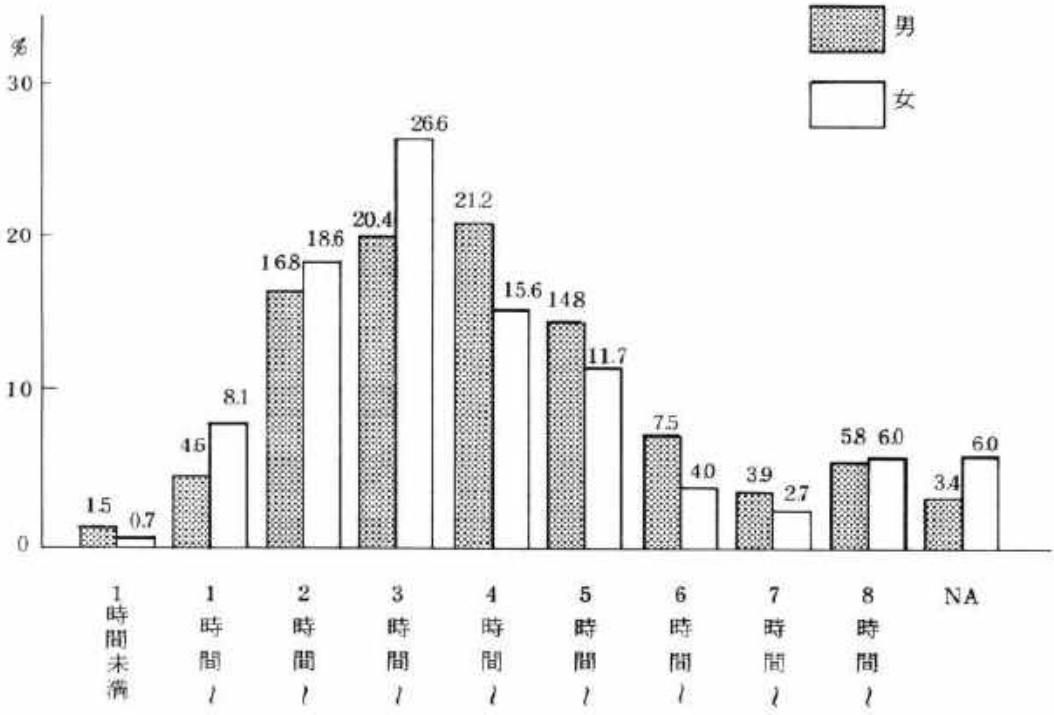
3. 調査結果

(1) 余暇をめぐる実態

イ．平日の自由時間と余暇活動

平日の場合勤労青少年には何時間ぐらいの自由時間（余暇時間）があるのかを見たものがⅡ－６図である。平均的にみると一日３時間～５時間ぐらいを余暇活動に当てることができることがわかる。男女別に見ると、男子の方が多少自由時間が多いところに比率が高まっている。つまり男子の方が多少暇があるわけで、これは女子勤労青少年が、親元から通勤している者の比率が高く、そのために通勤時間にかなりの時間をさくことにならざるを得ない実態を明

Ⅱ－6図　平日自由時間量



らかにしていると思われる。それと今ひとつは、若い女性の場合は、特に親元に居住している場合には帰宅後、家事労働も少しはおこなっていることが考えられ、そうしたことから男性にくらべて、平日の余暇時間が少なくなっているのであろう。

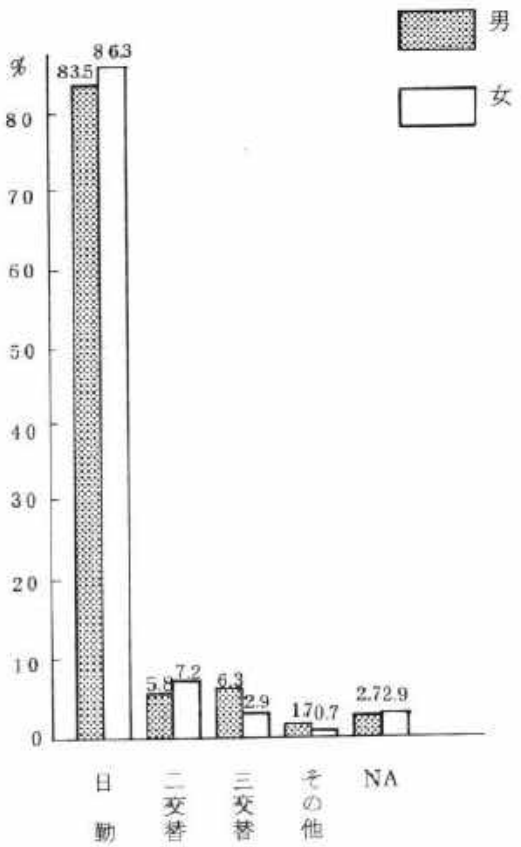
平日の余暇時間はいうまでもなく夜に集中することが予想される。Ⅱ－7図でも明らかな通り、今回調査して得られた対象者の大多数は日勤者であり、余暇時間は平日の場合は夜しかない、という実態をさし示している。

余暇時間が夜ということになれば、その時間帯でおこなわれる余暇活動というのは自然に決まってしまうのである。

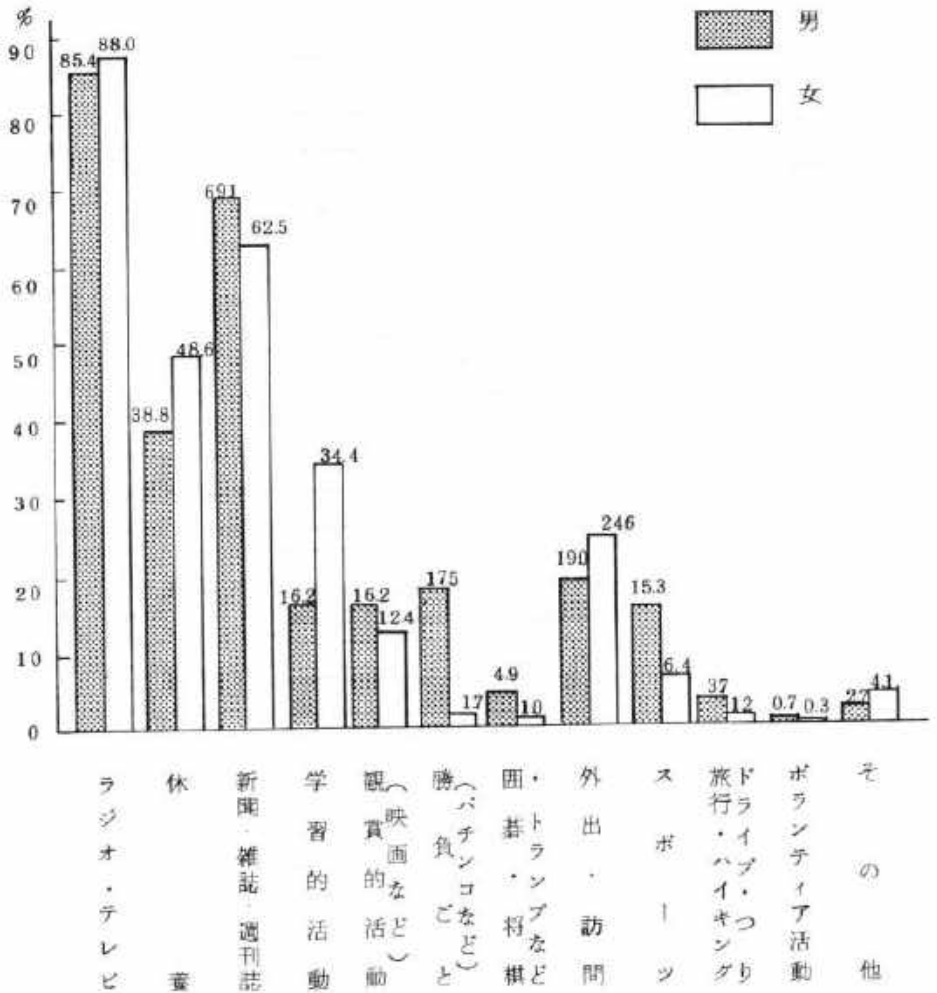
Ⅱ－8図は平日の余暇活動の実態を今回の対象者について調べた結果を示したものである。いうまでもなくその行為は家庭内でおこなわれるものが多くなっている。ラジオ・テレビが圧倒的に多く、新聞・雑誌・週刊紙等の読書がそれに次ぎ、第3位の休養も家庭内でおこなわれることを考え合わせると、家庭外でおこなわれる余暇活動への参加が非常に少ないことが目立つ。外出・訪問、観賞的活動、男子における勝負ごと、スポーツなどがその中でも多少高くなっている。平日に家庭外で積極的に行なえる余暇活動の開発が期待されるのである。

ボランティア活動は勤労青少年にとってそうした期待に答えうる何かをもっていると思われるのであるが、現実にはボランティア活動を積極的におこなっている人は極端に少ないのである。

Ⅱ－7図　勤務形態



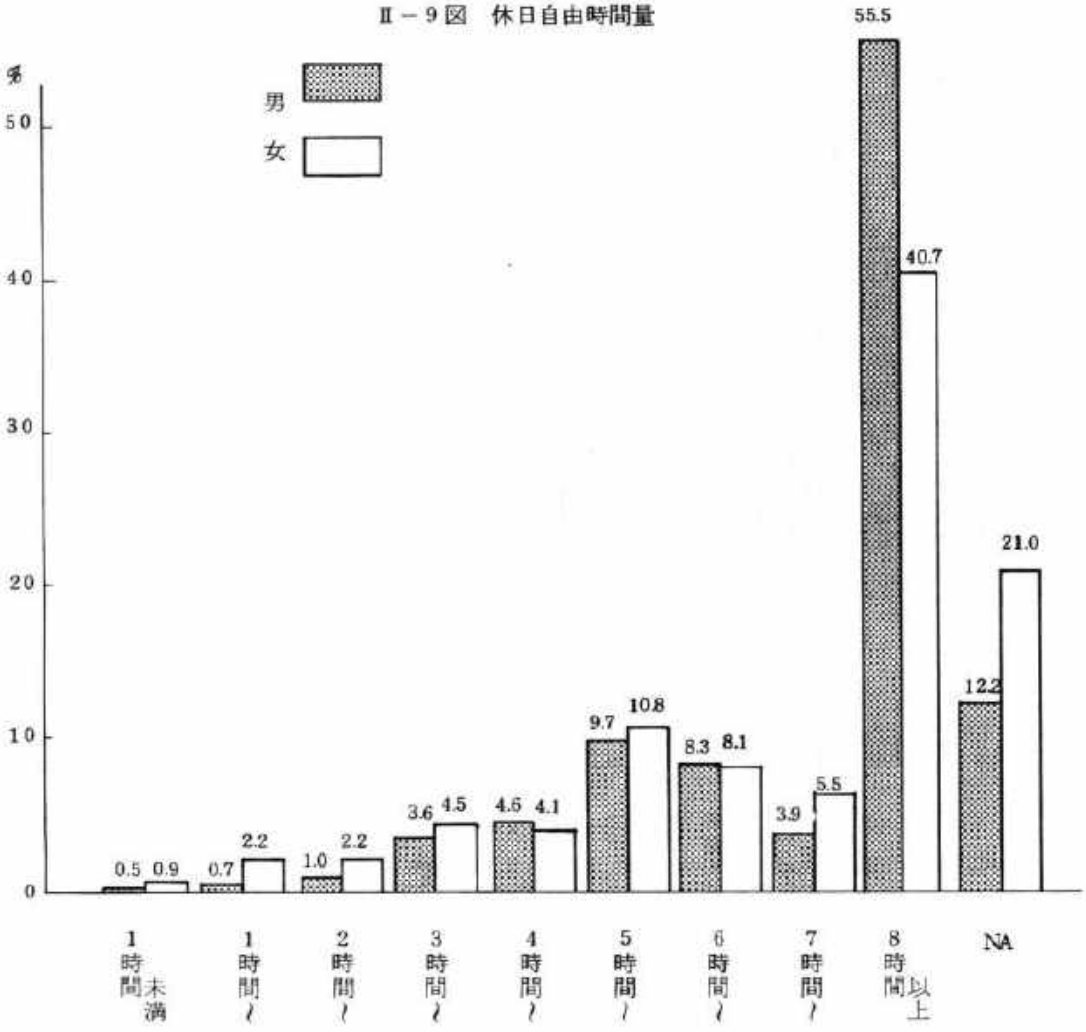
Ⅱ－8図　余暇活動（平日）



ロ．休日の自由時間と余暇活動

次に休日の余暇の実態についてみてみよう。Ⅱ－９図は、休日における余暇時間の実態をみたものである。いうまでもなく休日は余暇時間、自由時間が多く、８時間以上というのが男子の場合は５５.６％、女子の場合は４０.７％を占めている。しかも休日の自由時間の特質は、

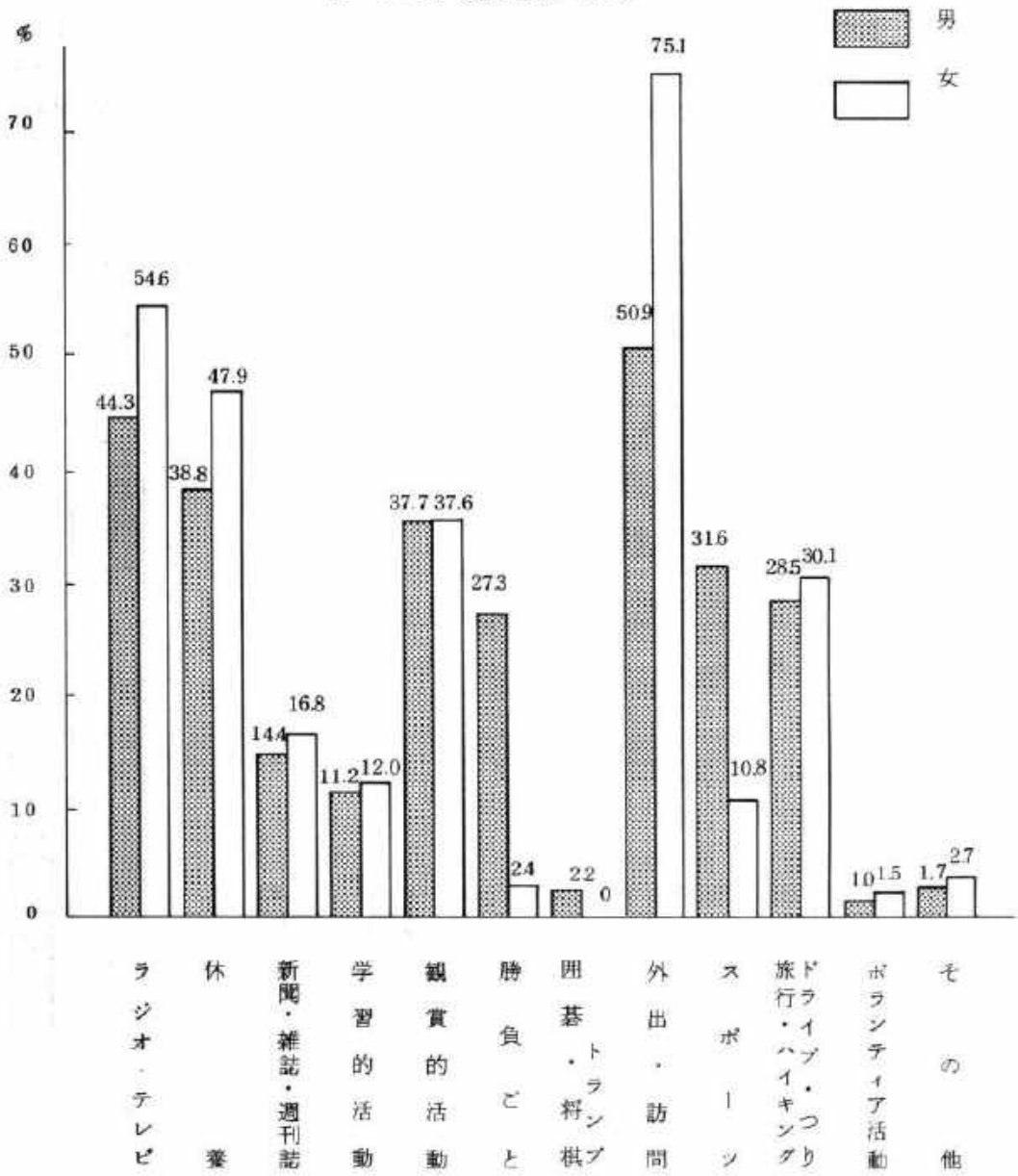
Ⅱ－９図　休日自由時間量



図にはあらわれていないが、それをどんな時間帯にもってくることもできるという自由裁量性にあると思われる。従って休日には、時間帯の制約や、時間的に短いということでできなかった余暇活動を積極的におこなうことができるのである。

Ⅱ－１０図はそうした観点に立って、休日に勤労青少年は果たして余暇活動をおこなっているのかを見たものである。一見して明らかな通り、平日の余暇活動にくらべると家庭外で積極的にそれを楽しもうとする傾向は増大していることがわかる。すなわち、男子において

Ⅱ－１０図　余暇活動（休日）

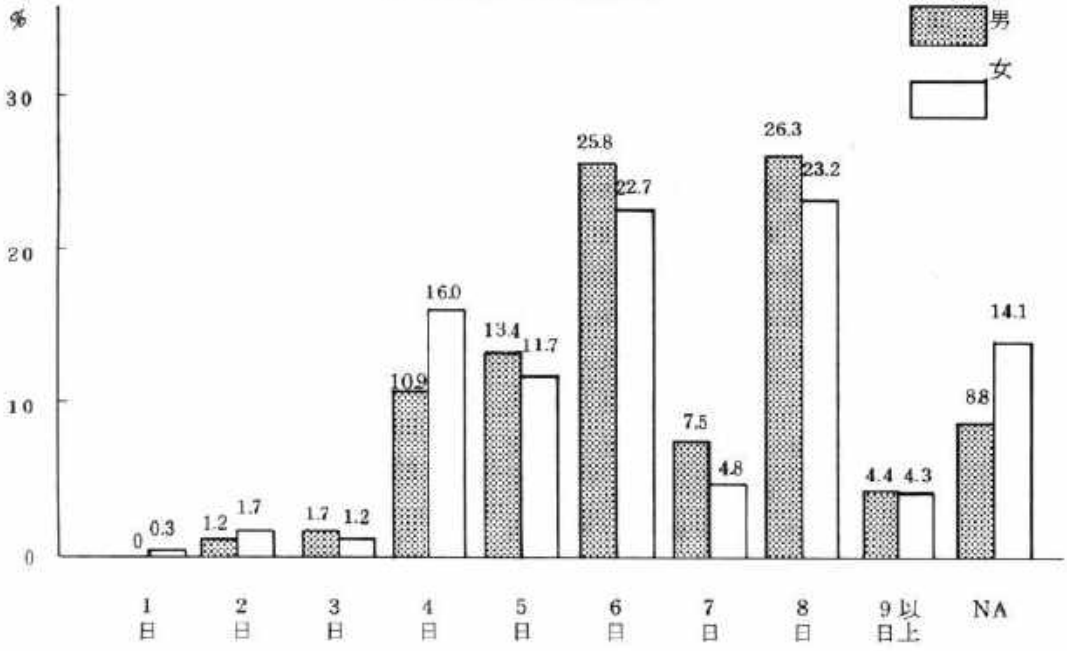


も女子においても、外出・訪問活動が第１位を占めるようになってきている。家庭外でおこなう活動としての観賞的行為や旅行・ハイキング・ドライブ・つりの占める比率も高くなっている。また男子においては勝負ごと、スポーツの占める比率も非常に高いのである。このように、全般的に見ると家庭外で積極的に身体を動かしておこなう余暇活動の比率は平日にくらべると増大しているのであるが、その反面、ラジオ・テレビ・休養の占める比率も依然として高いのである。しかも、この休日の場合も、ボランティア活動をおこなっているケース

は依然として少ないのである。しかし今後はこの活動に期待されるところが多いのである。

さて、最後に、休日数は1ケ月にどのくらいあるのかを見てみると、週休2日制度がかなり一般化していることが理解される。すなわち、8日のところと6日のところに2つピークがあるのは前者は完全週休2日制を実施しているスタイルであり、後者は隔週休2日制のスタイルだと考えられるのである。

Ⅱ－11図　1ケ月休日数

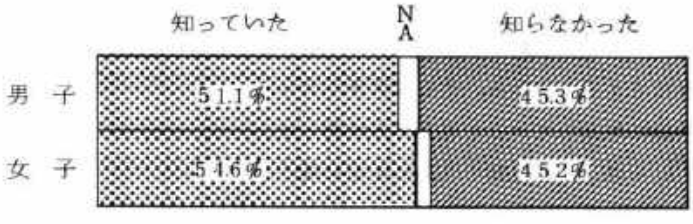


(2) ボランテイア活動をめぐる実態

イ．ボランティア活動に対する認知

一般に勤労青少年がボランティア活動に対し、その意義をどの程度理解しているかを調べる手始めとして、ボランティア活動とはどんなことかを知っているかを質問した結果がⅡ－12図に示されている。全般的に見ると半数余りの者がその言葉を認知しており、他はそれに

Ⅱ－12図　ボランティア活動に対する認知



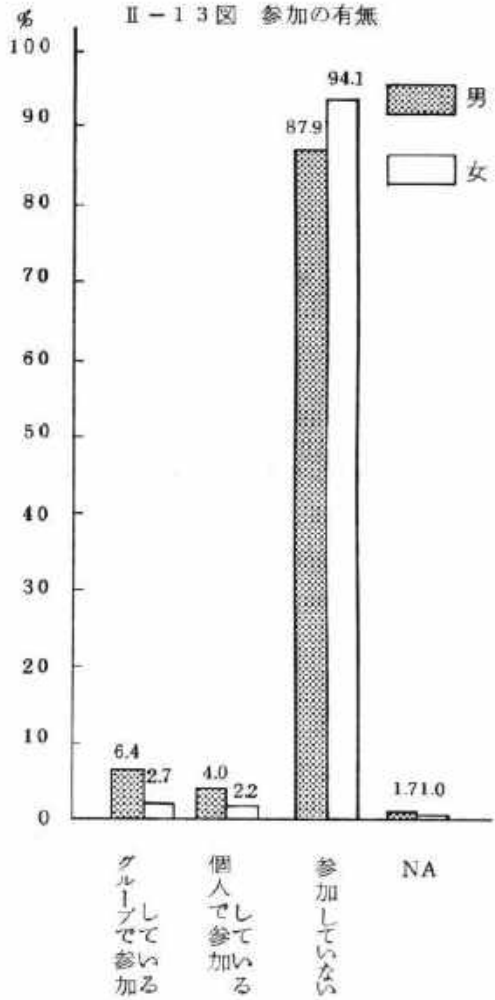
対して無知であった。もっとも、知っていたと答えても、本当に知っていたかどうかをチェックしている訳ではないので、知っているとしても言葉だけというケースもあり得るわけであるが、ともかく知っていたと答えたものは半数を越えていたのである。

男子と女子とでは、女子の方がわずかながら知っていたと答えたものの比率が高くなっている。ボランティア活動そのものはもちろん男女平等に参加しうるものであるが、場合によるとボランティア活動に参加する機会は比較的女子に多くめぐまれていることによるとも考えられるのである。

ロ．ボランティア活動への参加

ボランティア活動にどの程度理解を示しているかを更に検討するために、ただ単に知っているというのではなく、それにどの程度参加しているかをたずねた結果がⅡ－１３図に示した通りである。図を見て明らかなことは、ボランティア活動を知っている者は５割を越えていたとしても、実際にその活動をしている者は１割にも満たないという現状がある、ということである。先に見た余暇活動のところでもボランティア活動はほんの一握りの人たちによって実行されているにすぎないことがうかがい知れたが、そのことがこの図によって一層明らかである。

Ⅱ－１３図　参加の有無



男子の場合の方が女子に較べると参加している率が高くなっているが、先に述べたように認知段階では女子の方が高かったこととくらべると興味深い。その男子の場合でさえ、グループ単位で参加しているものは6.4%、個人単位で参加しているものは4.0%という低率である。具体的には回収したサンプル男子４２０名のうちにボランティア活動をしているものは４４名であり、女子の場合は５９２名中２９名のものしかボランティア活動には参加していないのである。

ハ．ボランティア活動の内容

ボランティア活動と一口にいってもその内容はさまざまである。そこでボランティア活動に参加していると答えた人に対して、それは一体どんな種類の活動かを更に深く質問した結果がⅡ－３表に示されている。

Ⅱ－3表　ボランティア活動の種類（M・A）

単位：人（%）

ボランティア活動 ＼ 性	福祉施設での活動	個人・グループに対しての活動	環境改善や社会制度に対する活動	活動に参加しているものの計
男	27 （61.3）	14 （31.7）	24 （54.5）	44 （100.0）
女	22 （75.8）	14 （48.1）	14 （48.2）	29 （100.0）

ボランティア活動を、母子福祉、精神薄弱者（児）、盲、ろう児、虚弱児、身体不自由児、養護、身障者、老人などの福祉施設での活動、地域などでの個人、グループに対しておこなう活動、環境改善や社会制度に対する活動の三つに分けると、福祉施設での活動が最も多く、男子では61.3%、女子では75.8%となっている。それに次いで、環境改善や社会制度に対する活動が多く、男子では54.5%、女子では48.2%となっている。個人・グループに対しての活動はその中では最も少ない。

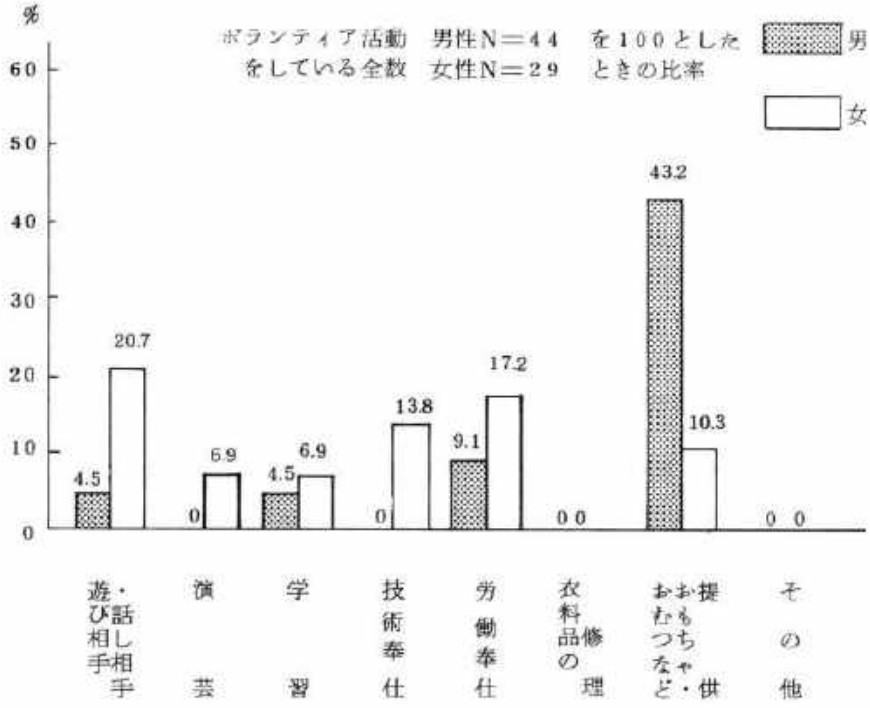
もっとも、ボランティア活動はそれ自体ある意味では多面的な活動であり、一つの行為が三つの活動の総合されたものであるということも決して少なくないと思われるし、また1人の人間がいくつもの活動を同時におこなっているというケースも当然考えられるのである。従って上記質問に対する回答は多項目任意選択方式（M－A）で得たものである。

それでは次に、それぞれ三つの活動についてさらに具体的に検討してみよう。福祉施設などでの活動といっても、そこにはさまざまな具体的活動があるはずである。Ⅱ－14図は、ボランティア活動をしている人のうち、何%の人がそれぞれの活動をしているかを示したものである。図を見ても明らかな通り、なんといっても一番多いのは、福祉施設などへのおもちゃ、教材、おむつなどの提供活動が一番高く、とくに男子では43.2%と非常に高い。勤労青少年にとってもそれが最も手軽な行為であることを物語っているものであると云えよう。ただ、女子の場合には、男子とは多少異った傾向を示していることが特徴として見られる。すなわち、福祉施設での遊び相手、話し相手としての行為が20.7%と一番高く、それに次いで清掃、造園、修理などの労働奉仕、さらにマッサージ、ドライブ、手話、リーディングサービスなどの技術奉仕の順になっている。

ものを提供する形の奉仕はもっとも手軽であるかも知れないが、勤労青少年にとってもっとも望ましいのは、自らの時間をさき、エネルギーをさいての奉仕活動ではないかと思われる。

福祉施設での活動に積極的な参加をする人はどんな特性をもった人かを見たものがⅡ－表である。年令から見ていくと、男女とも22才以上の層で参加率が高くなっている。ここでいう参加率

Ⅱ－14図　福祉施設などでの活動



とは、調査対象者のうちの何％がその活動に参加しているかという数字であらわしてある。２０～２１才層も２２才以上の層にくらべて参加率はそれ程低くないが、１９才以下の層の参加率が低い。これは、この層の多くが職場では新入社員であり、ボランティア活動をするゆとりに欠けていることとの反映かも知れない。しかしその反面、何でも話せる仲間をもち、また余暇活動の中で自分の役割を発見し、自己実現の機会をもつべき必要性のあるのはむしろこの層であり、この層をボランティア活動に引き出す方法の検討がまたれるのである。

学歴別に見ると、高卒の者の参加率が高くなっていることが目立つ。短大・大学卒の高学歴者ではかえって参加率が低くなっていることがわかるが、これについては二

Ⅱ－4表　福祉施設での活動に対する参加率

（単位：％）

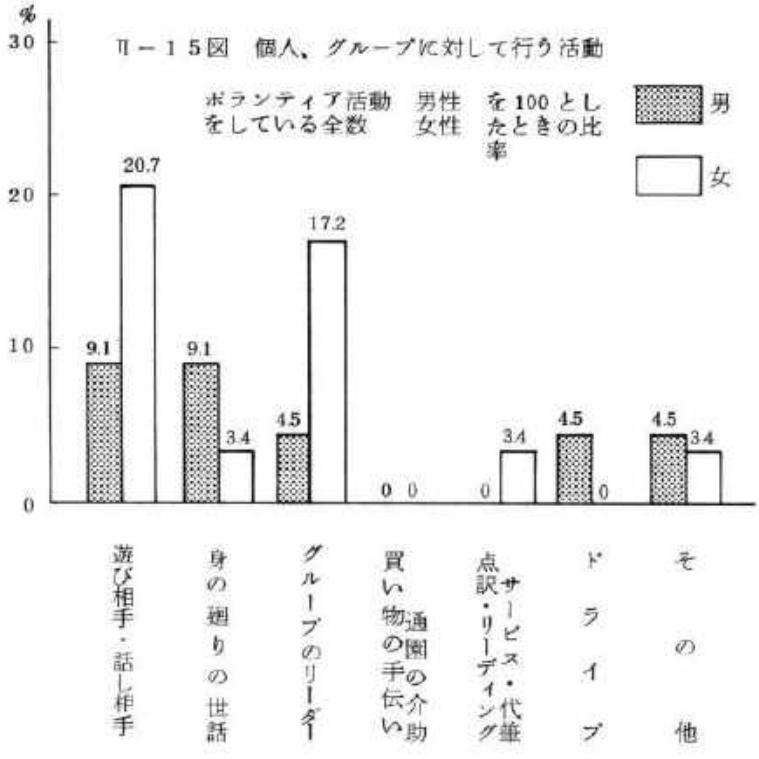
項目	性	男	女
年令	～　19才	0	2.1
	20～21才	7.8	3.6
	22～24才	8.1	5.3
学歴	中学卒	0	0
	高校卒	9.0	4.6
	短大・大学卒	3.6	1.3
平日の自由時間	3時間未満	4.4	4.0
	3～5時間未満	7.5	5.2
	5時間以上	6.8	0.7
クラブ活動	経験あり	7.8	5.1
	経験なし	1.1	1.2
規模	1000人以上	13.8	3.7
	300～999人	4.6	5.6
	50～299人	1.4	0
	49人以下	2.2	6.7

通りの理由が考えられる。一つは、大学卒など高学歴者の場合には、受験競争その他の経験をするなかで、個人の利益のみを優先する思想が強くなっているということであり、いま一つの理由は、ボランティア活動に参加するのは入社してから2～3年後の仕事上のゆとりができてからであるということである。つまり、高学歴者がボランティア活動に不熱心なのではなく、かれらが積極的に参加するのは仕事の上でもなれてゆとりのでる25才以降であるからだという理由である。

平日の自由時間の大小でみると、3～5時間という中間層で参加率が高くなっているのが目立つのである。しかし何といっても、参加率にもっとも強い影響を与えているのは在学中のクラブ活動の経験の有無である。男子の場合は経験のない者 1.1％に対して約7倍の 7.8％の者が経験者では参加しているのであり、女子の場合は4倍強となっている。集団活動の経験がボランティア活動への姿勢に重要な機能を果たしているのである。

事業所の規模では大企業における参加率が高い。すでに指摘したように、同年代の仲間に恵まれていない中小企業の勤労青少年にこそ、こうした活動に積極的に参加する機会が与えられることこそ必要であると考えられるが、現実には仲間のいないことが、いっそうそうした活動への取りくみを低下させているという悪循環が見られるのである。

次に、個人、グループに対して具体的にどのような活動をしているかをⅡ－15図をもとに見てみよう。ボランティア活動の対象者の遊び相手、話し相手になっているケースがこの中では一番多い。とくに女子の場合は、ボランティア活動をしている人の 20.7％が遊び相手、話し相手としての活動をしていることがわかり、また同じく女子の場合には地域の子供会その他のグループのリーダーとして活動するケースも 17.2％とかなり高くなっていることがわかる。前にも指摘したように、個人、グループに対して行う活動はボランティア活動の中ではもっとも参加率の低いものであり、遊び相手・話し相手としての活動、グルー



プのリーダーとしての活動以外にはあまり参加率の高いものは見られないのである。

Ⅱ－5表によって、個人、グループに対して行う活動への参加率が、属性のちがいによってどのように異っているかを見てみよう。全体的な傾向としては、福祉施設での活動とほぼ似通った傾向を示しているといえるが、年令的には男子の場合は20～21才、女子の場合には22才以上に参加率が高い。学歴ではこの場合も高校卒の中学歴者において参加率が高いが、女子の場合は高学歴者もかなり参加率が高くなっている。平日の自由時間については、5時間以上の余暇時間をもつという層が男子の場合には圧倒的に多く、女子の場合にはかえって3～5時間未満のところに参加率が高い。

Ⅱ－5表　個人、グループに対して行う活動活動に対して行う参加率

項目＼性別		男	女
年令	～19才	0	1.4
	20～21才	5.8	1.8
	22～24才	3.4	3.5
学歴	中学卒	3.0	1.9
	高校卒	3.7	2.4
	短大・大学卒	2.4	2.5
平日の自由時間	3時間未満	2.7	1.5
	3～5時間未満	2.3	4.0
	5時間以上	5.3	0.7
クラブ活動	経験あり	4.2	2.8
	経験なし	1.1	1.8
規模	1000人以上	5.5	1.7
	300～999人	5.8	3.2
	50～299人	0	1.9
	49人以下	2.2	5.0

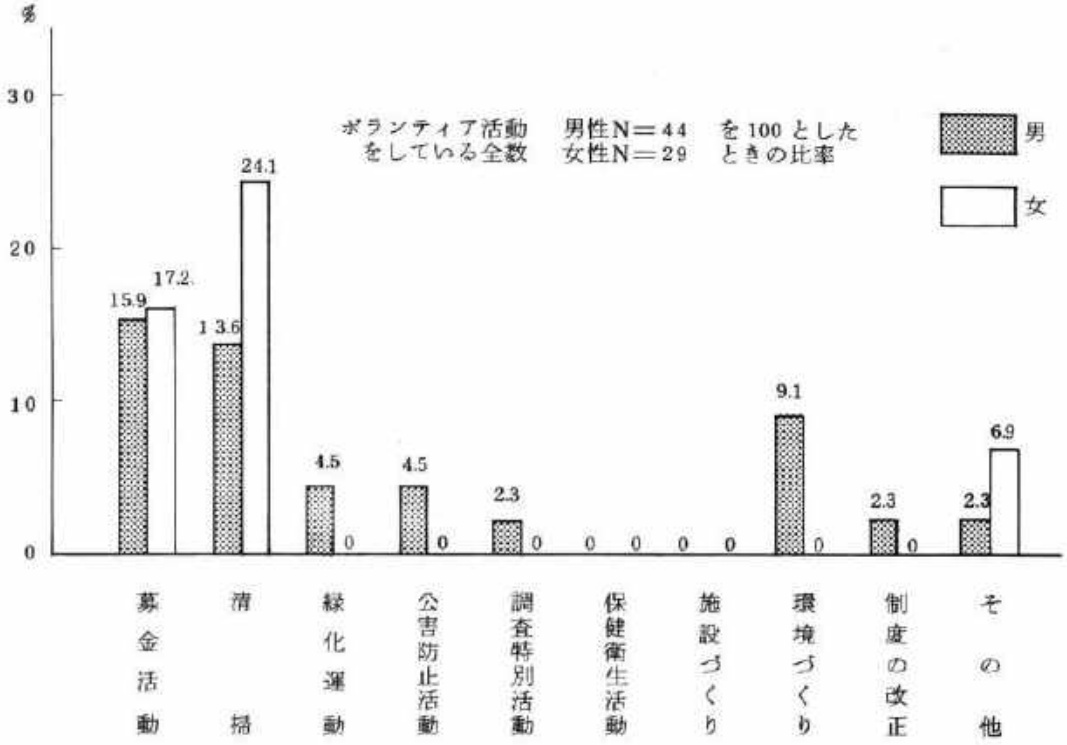
在学中のクラブ活動の経験については、この場合も経験者において参加率が高くなっている。但し、福祉施設の活動にくらべるとその差は大きくない。就業先の規模についても同様の傾向が見られる。すなわち、規模の大きいところに参加率は高いが、この場合は1000人以上でとくに高いというわけでなく300～999人の規模ではそれ以上の参加率を示している。これは個人、グループに対しておこなうボランティア活動の場合には、福祉施設での活動の場合よりも、個人で自由に振舞えることによると考えられる。

次にⅡ－16図により、第三のボランティア活動の形態たる環境改善や社会制度に対する活動への参加の形態について見よう。図を見ても明らかな通り、男子の場合には第1位が募金活動であり、それに次いで清掃、環境づくりとなっている。それに対して女子の場合には清掃が一番多く24.1％の参加率を示しており、それに次いで募金活動となっている。女子の場合は殆んどこの二つで占められているのである。

以上の環境改善や社会制度に対する参加率を個人の属性別に見たものがⅡ－6表であるが、一見して明らかなことはすでに述べた二つのボランティア活動と大変傾向が類似しているということである。すなわち年令では、男子が20～21才、女子の場合は22才以上が参加率のピークになっている。学歴ではこの場合も中学歴者がとくに男子の場合は高くなっている。しかし女子の場合には短大・大学卒も参加率が高くなっている。

自由時間は、この場合は男子の場合について見れば5時間以上もある人たちに参加率

Ⅱ－１６図　環境改善や社会制度に対する活動



が高いのである。在学中のクラブ活動の有無による参加率の違いについても同様の傾向を示し、経験者の場合に、この形態でのボランティア活動に参加する率が高い。規模については、この場合も大規模企業での参加率が高くなっているのである。この環境改善や社会制度に対する活動については、全般的に見ると福祉施設における活動への参加率と似通った傾向を強く示していることがわかるのである。

ニ．活動年数

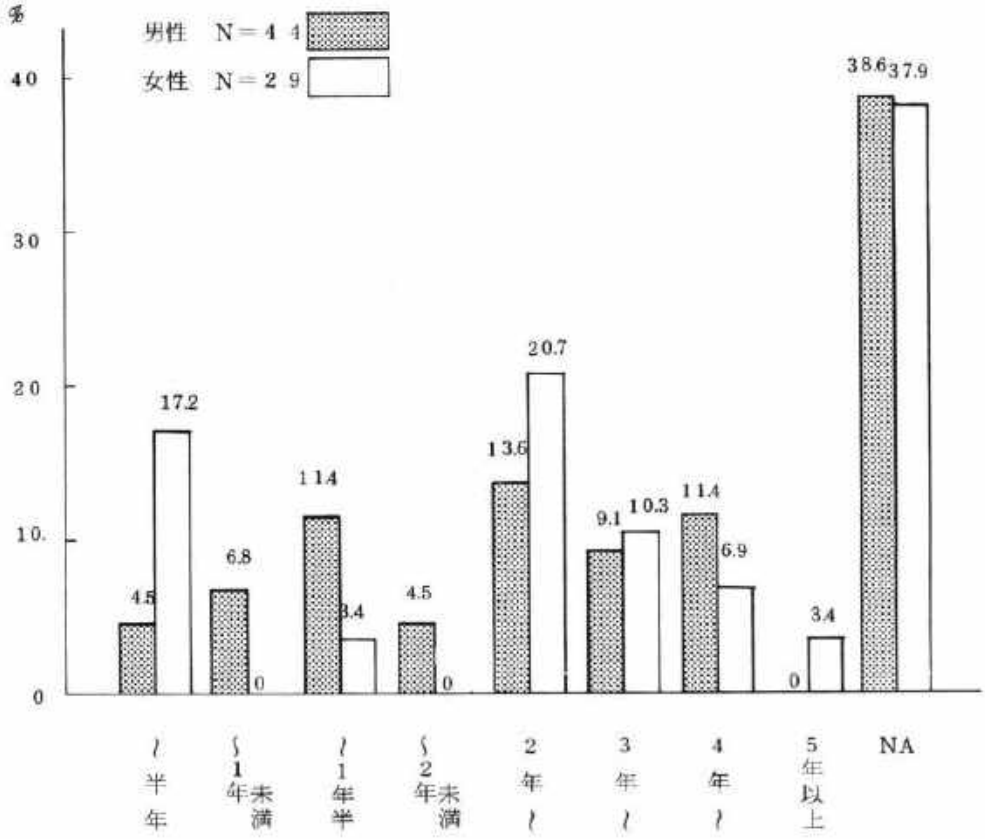
ボランティア活動をどのくらい続けているのかという質問に対する回答を性別に見るとⅡ－１７図のようになる。無回答（ＮＡ）を除けば一番多いのは２年～３年未満の者が高い。とく

Ⅱ－６表　環境改善や社会制度に対する活動への参加率

（単位：％）

項目 ＼ 性別		男	女
年令	～　１９才	0	1.4
	２０～２１才	10.7	1.4
	２２～２４才	5.6	4.0
学歴	中学卒	1.5	0
	高校卒	7.9	2.2
	短大・大学卒	2.4	5.0
平日自由時間	３時間未満	4.4	2.5
	３～５時間未満	4.6	3.6
	５時間以上	8.3	0
クラブ活動	経験あり	7.8	3.3
	経験なし	0	0.6
規模	１０００人以上	14.5	2.7
	３００～９９９人	2.3	2.4
	５０～２９９人	0	1.9
	４９人以下	2.2	1.7

Ⅱ－１７図　活動年数

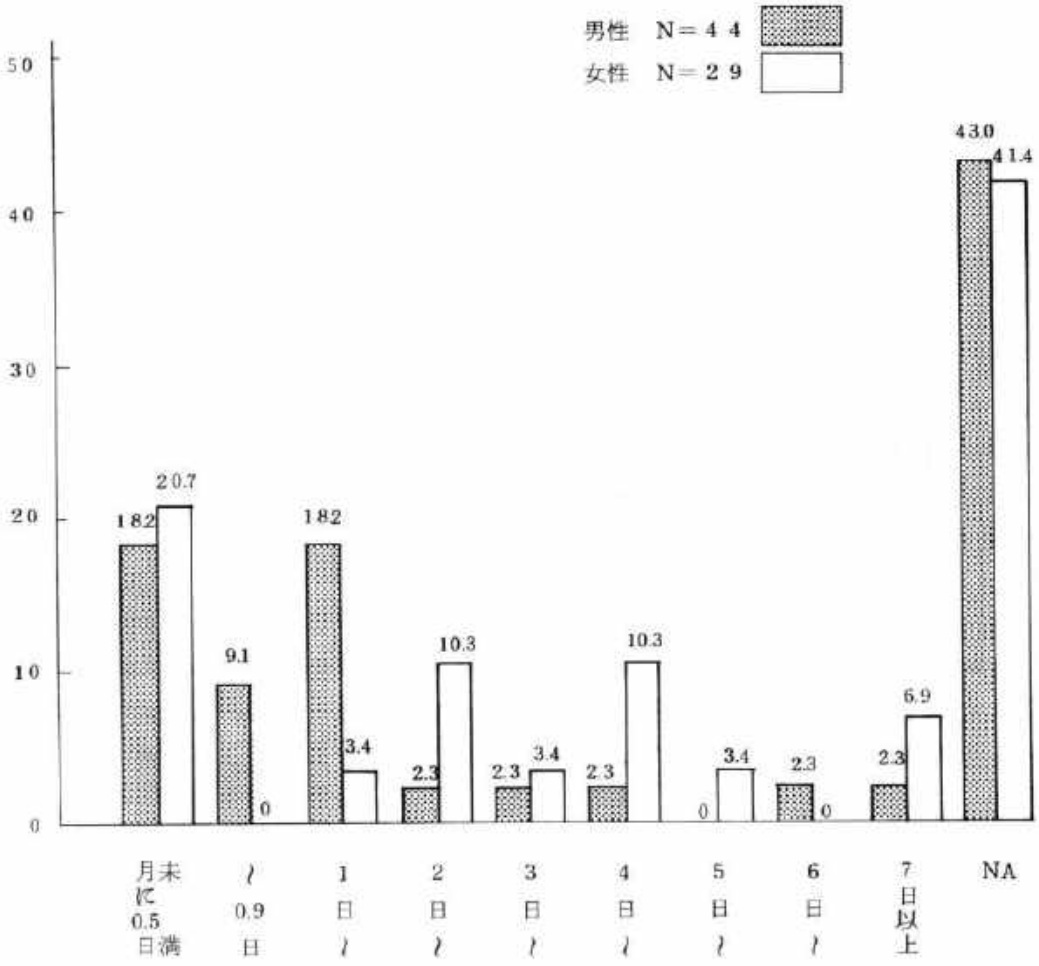


に女子の場合には、２～３年未満の者と半年未満の者が多い。それに対して男子の場合には活動年数においてもさまざまな人が多いことがその特徴となっている。対象者が２５才未満の勤労青少年と限られているため、この資料結果をもって直ちに、活動年数の長短を論ずる訳にはいかないことはいうまでもない。ボランティア活動を、現在おこなっていて、将来もおこなっていこうとしている人たちに過去何年活動してきたかをきいているのであり、しかも、学校をでてからそれ程長く経っていない人たちにきいているのであるから短く回答が出てくることになるのである。ただ、男子と女子の傾向の違いはある程度の推定はできるのである。つまり、女子では半年未満と２～３年未満より上の層で比率が高く、男子はどちらかというと平均化しているのは、女子の方が集団で参加し、集団でやめる傾向をもつのに対して、男子の場合は、参加するのもやめるのも、個人の資格、個人の意志の反映でおこなっていることによるものと思われる。

ホ．活動日数

活動日数についても無回答が多く、活動日数の正確な実態はこの調査結果だけからはつかみにくいが、全般的にいえることは、活動日数はどちらかというと男子において少なく、女

Ⅱ－１８図　活動日数



子においては多いということである。例えば男子の場合、月の活動日数が２日に満たないものが４５.５％、２日以上活動する者は１１.５％であるのに対し、女子の場合は、２日に満たないものは２４.１％と男子の約半数であるのに、２日以上活動する者は３４.４％と男子の３倍になっているのである。女子の場合の方がボランティア活動を本格的にやり出したら参加日数も増大し、活動年数の長い人も生ずるということをよく表わしていると思われるのである。

(3) ボランテイア活動参加へのきつかけと問題点

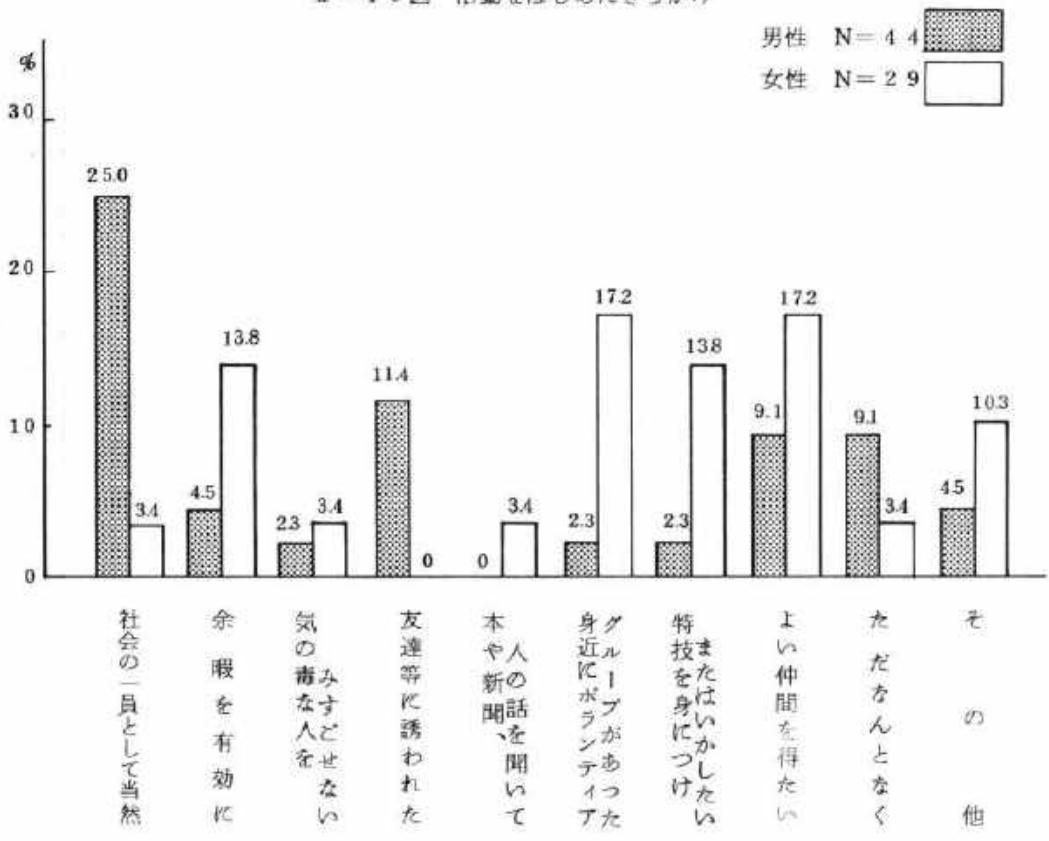
イ．ボランティア活動へのきっかけ

ボランティア活動がいくら自発的な行為だからといっても、ボランティア活動を始めるに至った人たちはそれぞれ、きっかけがあるに違いない。そしてそのきっかけ、あるいはかれらをボランティア活動に対して動機づけたものは何であったかを分析することは、これから

のボランティア活動と勤労青少年の問題を考えるうえで非常に大事なことだと思われるのである。

Ⅱ－１９図は、それを性別に見た結果である。全般的に高いのはよい仲間を得たい、社会

Ⅱ－１９図　活動をはじめたきっかけ



の一員として当然だ、身近にボランティアグループがあった、などの理由が比較的多くなっている。一見しただけで明確なことは、男子と女子とではその参加への動機、きっかけにずいぶん違いがあるということである。図に示した個々の動機は概略次のように分類できると思われる。

a　論理的に自己が納得して参加する（理屈から入る）タイプ　……　社会の一員として当然、気の毒な人をみすごせない、本や新聞、人の話をきいて、といった項目に代表される。

b　周辺にチャンスが存在したことによって参加するタイプ　……　友達等に誘われた、身近にボランティアグループがあった、といった項目に代表される。

c　個人的目標を達成するためのもので、ボランティア活動はそのための手段としてつかわれているタイプ　……　余暇を有効に、よい仲間を得たい、特技を身につけまたはいかしたい、といった項目に代表される。

d　特別の動機や理由がないもの　……　ただ何となく、という項目に代表される。

さて、以上、a、b、c、dと動機を4類型に分類したのであるが、その類型毎にいま少し詳しく分析したい。

aの類型すなわち論理的に自己が納得して参加するタイプの場合には、全般的に見ると男子の場合がこうした動機でボランティア活動に参加するケースが多い。男子は社会のためという理屈でわかって参加する形が多いことを示していると思われる。ただ、ボランティア活動の意義を認識し、その必要性を認めて参加するということは確かに必要であるが、そうでなければボランティア活動に参加できないということではないはずである。逆に、ボランティア活動にともかく参加してみる、その中でその意味がわかってくるということもあり得ると思うし、観点を変えればとくに若い人たちはボランティア活動に参加してみてその中で意義を見出していくということも必要なのではないかと思われる。

そうした観点に関連して、bの類型すなわち、周辺にチャンスが存在したことによって参加するタイプの場合を見ると、男子の場合は、友達から誘われたケースが多く、女子の場合には身近にボランティアグループがあったというケースが多い、しかしいずれにしても、先にあげたような理由でボランティア活動をする機会がもっともっと与えられていることが期待されるのである。

ボランティア活動とは何をするのかということもわからずに、とにかくチャンスをとらえて参加してみるというのも、ボランティア活動への参加の一形態ではあるが、現在の若い人たちは、個人中心にものを考える傾向がかなり根強く存在しており、自分にとってそれがどう役立つのかという発想は当然あるはずである。cの類型すなわち、個人的目標を達成するために参加するタイプはこの層を代表するものと思われる。こうした動機で参加するものは、余暇を有効に、特技を身につけまたはいかしたい、よい仲間を得たいといった項目のすべてで女子の方が高い比率を示している。すでに述べたように社会的意義を認めて参加するケースが男子の場合に多かったことと対照的である。このように自分の利害関心を表面に打出しながらボランティア活動を考えることは、ボランティア活動の奉仕性といったことから考えると、多少の矛盾を生ずることも予想されるが、しかし、ボランティア活動への参加のきっかけとしては、このルートは当然高くていいのではないかと思われる。

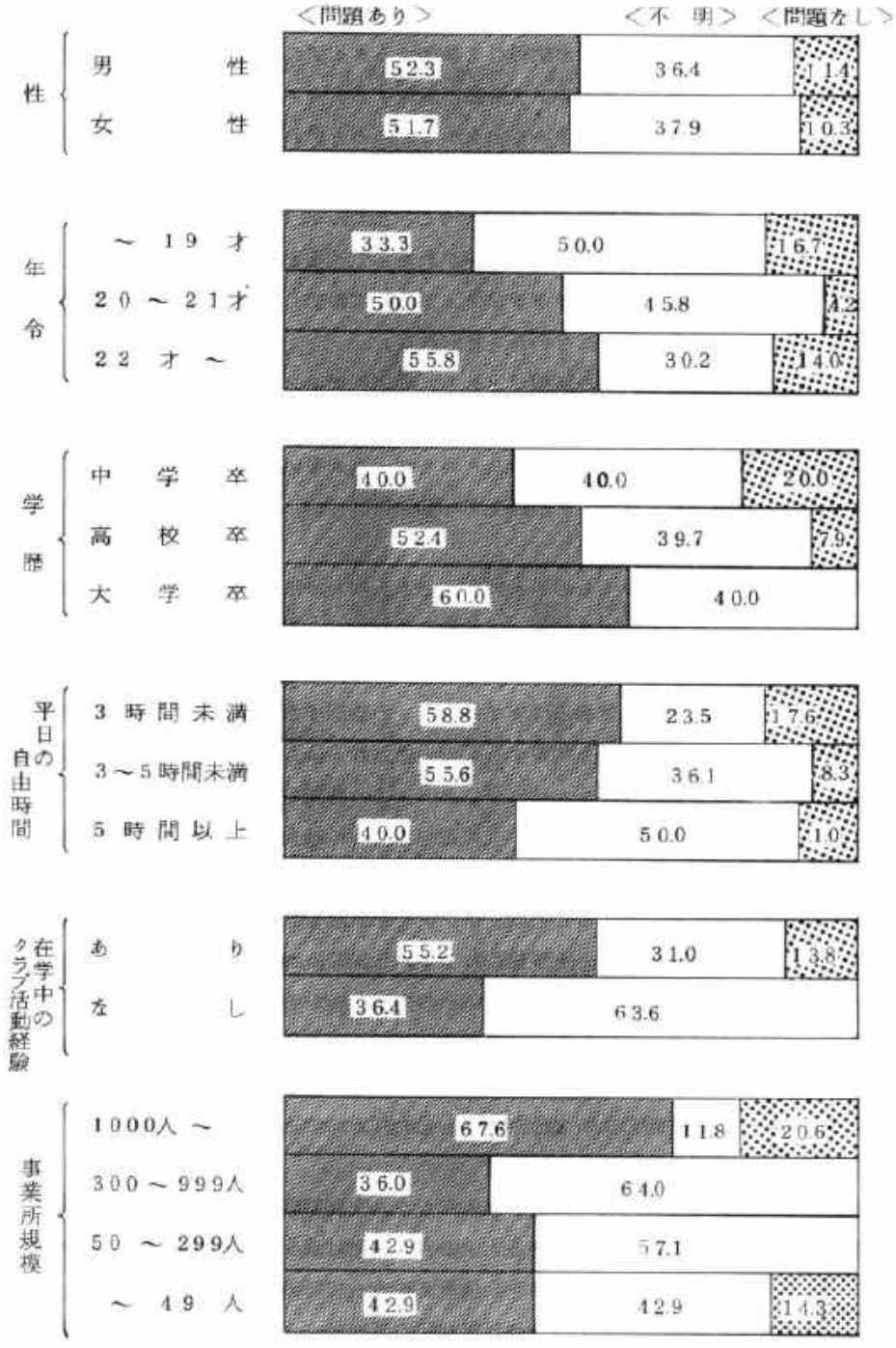
ただ何となく参加する、というケースは具体的にどういう状況かは推定できないが、おそらくこのケースは、bのケース、すなわち意義はわからなくとも、そういうチャンスがあったから参加した、という形のものではないかと思われるのである。

ロ．ボランティア活動をするうえでの問題点

ボランティア活動をするうえで問題があるかどうかを回答者の属性別に見たものがII－20図である。全体的に見ると、問題があるとする者の比率は過半数となっており、問題はないとするものの比率の10％強と較べると5倍近くになっている。

それを各属性別に見ると、まず性別では男女間の差は殆んど見られない。年令による差はそれに較べるとかなり大きい。すなわち、問題があるとする者の比率は年令が高くなるに従

Ⅱ－２０図　「ボランティア活動をする上で問題があるか」の属性別検討



って高くなっている。問題があるという答は事実としての問題があるということの反映であると同時に、問題を問題だと感ずる問題意識があるかどうかということの反映でもある。

２２才以上の層に問題ありという答えが多いのは、前者の理由によるものか後者によるものかはむづかしい問題であるが、いずれにしても２２才以上の層にボランティア活動を阻害する要件の存在していることは事実のようである。その内容が何であるかについては、後ほど検討したい。

学歴による差も年令差と同じような傾向を示している。すなわち高学歴化することによって問題ありとする者の比率が非常に高くなっている傾向が見られる。この理由はおそらく、問題意識が高いことの反映という側面が強いのではないかと思われる。

平日の自由時間の大小によって問題ありとする者の比率がどう変るかを次に見ると、この場合は、余暇時間の少ないものに問題ありとする答が多くなっている。つまり、ボランティア活動をする時間が少ないことが問題だとする答の中心になっていることが予想されるのである。

在学中のクラブ活動では、経験している者ほど問題がある、とする者の比率が高い。クラブ活動を経験していない人の場合は不明が非常に多く、問題があるかどうかもわからないという実態があるのである。クラブ活動の経験者がボランティア活動への参加率が高いことは既に見てきた通りであるが、問題だとする意識があるからこそ参加率が高まるのであり、参加率が高いからこそ問題意識も旺盛になるのである。

事業所規模で見ると、この場合も参加率の高い1000人以上の企業で問題あり、とする回答が多い。これなどもクラブ活動経験の有無と同じで、参加率と問題意識の高まりとが同居していることの反映であろう。それをよく表わしているのが、総合的に見ると、各属性別に共通していえることは、問題ありという答が多いところでは逆に、問題なしとする答も多く、問題のある、なしが参加率が高ければ個人にとって明確になっていることを示している。それとは逆に、問題ありとする答が少ない層では、問題なしとする答が多いのではなくて、不明の答が圧倒的に多いということなのである。

問題の有無について見てきたのであるが、それではどんなところに問題があるのかについて次に検討してみよう。Ⅱ－２１図はその内訳を示したものである。活動をしていくうえで問題とされるのは第１位が時間がとれないという理由であり、それに次いで多いのが周囲の理解が足りない、さらに、よいリーダーや相談相手なしといった項目である。以上の３つの項目がとくに多い項目である。それに対して他の項目は比較的少なくなっている。とくに、自己負担が多くて困る、心身が疲れるといった項目についてはそれを挙げるものは極端に少なくなっている。

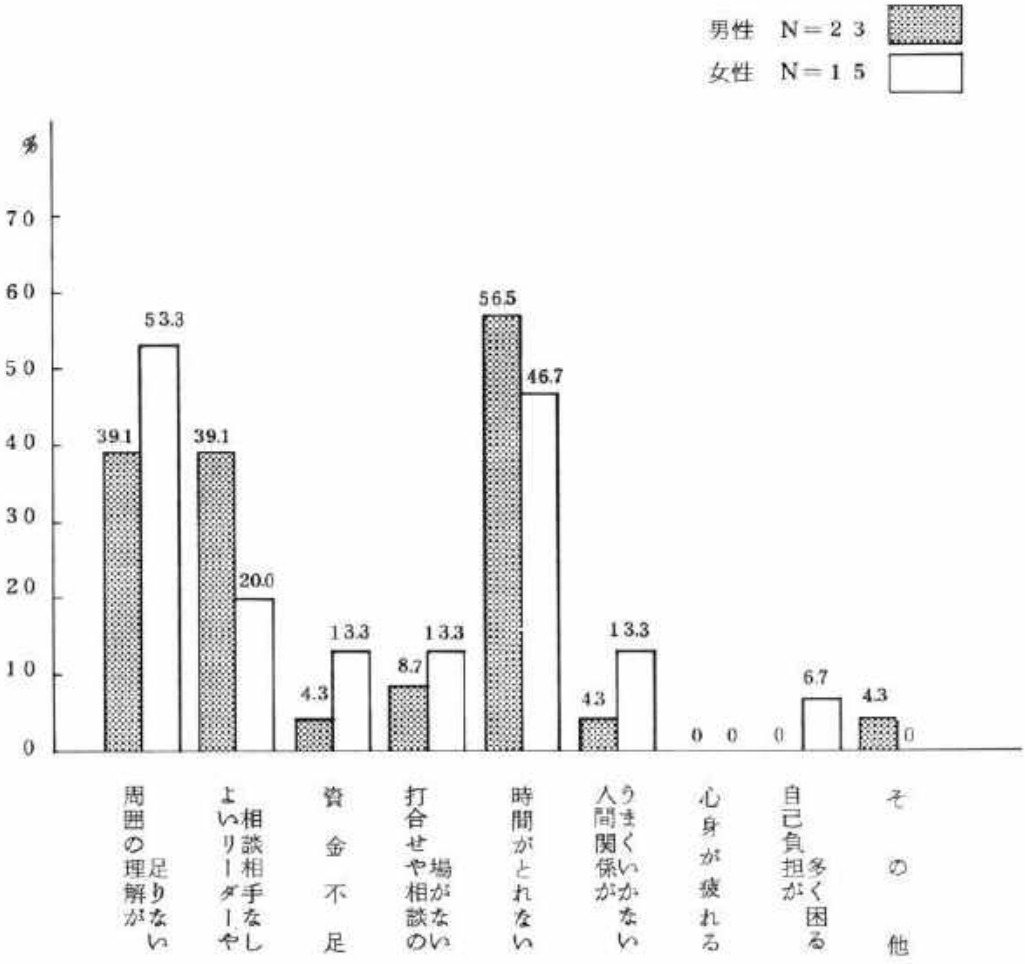
Ⅱ－７表は各属性別に問題点を探ったものである。年令別に見ると年令の低いところでは周囲の理解が足りないという問題点が指摘されているのに対し、年令の高い層では仕事の都合で時間がとりにくいとする回答が多くなっている。

また、学歴別に見ると学歴の低い層では周囲の理解の足りなさをあげるものが多いが、逆

に、仕事の都合で時間がとりにくいとする者は学歴の高い者になっている。

就業先を規模別に見ると、規模の小さい企業すなわち４９人以下の事業所の勤務者に周囲の理解不足とリーダー不足をあげる声が高く、小令細企業に働く人たちのボランティア活動における問題の所在を知るうえで参考になるものである。

Ⅱ－２１図　活動上の問題の内訳



Ⅱ－7表　問題の内訳に対する属性別検討＜問題ありとするものの計を100とする＞

	周囲の理解が足りない	相談相手がいないよいリーダーや	資金が足りない活動のための	相談する場がないグループ員の打合せや	時間がとりにくい仕事の都合で	関係がうまくいかないグループ員との人間	心身が疲れる	自己負担が多く困る	その他
	%								
合計	44.7	31.6	7.9	10.5	52.6	7.9	0	2.6	2.6
～19才	100.0	50.0	0	0	50.0	0	0	0	0
20～21才	41.7	16.7	8.3	25.0	33.3	16.7	0	8.3	0
22～24才	41.7	37.5	8.3	4.2	62.5	4.2	0	0	4.2
中卒	50.0	100.0	0	50.0	50.0	0	0	0	0
高卒	45.5	21.2	9.1	9.1	51.5	9.1	0	3.0	0
短大・大学卒	33.3	100.0	0	0	66.7	0	0	0	33.3
～3時間未満	50.0	20.0	20.0	10.0	50.0	0	0	10.0	0
3～5時間未満	50.0	20.0	5.0	10.0	55.0	10.0	0	0	5.0
5時間～	25.0	75.0	0	12.5	50.0	12.5	0	0	0
クラブ活動あり	50.0	25.0	6.3	9.4	53.1	9.4	0	0	31.3
なし	25.0	50.0	25.0	0	50.0	0	0	25.0	0
1000人～	39.1	30.4	0	4.3	60.9	4.3	0	0	0
300～999人	55.6	22.2	11.1	33.3	33.3	22.2	0	0	0
50～299人	33.3	33.3	0	0	100.0	0	0	0	0
～49人	66.7	66.7	66.7	0	0	0	0	33.3	33.3

(4)　属性別に見たボランテイア活動参加への阻害要因と参加の意志

これまでの分析では、ボランティア活動に現在参加している者についての分析を中心に展開してきたのであるが、すでに述べたように、勤労青少年の中で現在その活動に参加している者の比率は少なく、むしろ、勤労青少年のボランティア活動のあり方あるいは参加への奨励策を検討するためには現在参加していない人たちに対する分析を進めることも重要なことだといわねばならない。こうした観点から、ここでは、ボランティア活動に参加していない人たちを中心に置いて、かれらの参加への阻害要因、参加への意志などを、属性のさまざまな側面から検討してみたい。

1．性別検討

Ⅱ－8表でも明らかなように参加の経験ありと答えるものは女子の方にわずかながら多くなっているのである。つぎに男女それぞれについて、かつては参加していたが現在は参加していない人に対し、その理由をたずねたものがⅡ－9表である。ボランティア活動の継続を阻害する要因としては、まず第1に、仕事の忙しさがあげられ、それに次いで高いのが、つきあい程度に参加したためという回答であったが、男子の場合はわづかながら後の理由の方が高くなっているのである。

最後に参加の経験のない人たちの参加意志についてⅡ－10表より見てみたい。表より明らかなことは、参加する気持は男女合わせると半数弱（44.7％）の人がとにかくもボランティア活動に対して参加の意志をもっているのであるが、なかでも女子の場合はその傾向が強い。すなわち、女子の場合は48.1％の者が参加の意志をもっており、男子の39.8％をしのいでいる。

Ⅱ－8表　性別・ボランティア活動参加経験の有無

	男	女
ある	32 （7.6％）	57 （9.6％）
ない	344 （81.9％）	493 （83.3％）
N・A 及び 非該当	44 （10.5％）	42 （7.1％）
計	420 （100.0％）	592 （100.0％）

Ⅱ－9表　性別・現在不参加の理由

単位：人（％）

現在不参加の理由	男	女
仕事が忙しかった	10 （31.3）	21 （36.8）
活動についていけない	3 （9.4）	3 （5.3）
受け入れ側とうまくいかなかった	2 （6.3）	2 （3.5）
つき合い程度に参加したため	11 （34.4）	13 （22.8）
家族が反対したため	0 （0）	1 （1.8）
自分の楽しみを持つことが必要	4 （12.5）	3 （5.3）
その他	2 （6.3）	14 （24.6）

Ⅱ－１０表　性別・参加意志

参加経験なし、今後は	男	女
参加したい	45 （13.1）	77 （15.6）
参加したいが、方法がわからない	52 （15.1）	89 （18.1）
参加したいが、てれくさい	40 （11.6）	71 （14.4）
参加の気持はない	200 （58.1）	222 （45.0）
N・A	7 （2.0）	34 （6.9）
計	344 （100.0）	493 （100.0）

ロ　年令別検討

Ⅱ－１１表は、ボランティア活動に対する参加経験の有無を年令別にクロス集計した結果である。表から見られる傾向として、これは当然のことながら、年令の高い層では参加経験の占める比率が高く、年令の低い層では参加経験のないものの比率が高まっている。経験年数の大小がこうした結果を招いたものであろう。

それでは、かつてボランティア活動を体験したもので現在おこなっていない者が、それを継続しておこなわなかった理由はどんなところにあるのであろうか。それを年令別に見てみよう。Ⅱ－１２表からも明らかな通り、過去にボランティア活動を体験しながら、現在はそれをおこなっていない

Ⅱ－１１表　年令別・ボランティア活動参加経験の有無

	～19才	20～21才	22～24才
ある	18 （7.9）	28 （8.6）	43 （9.3）
ない	198 （87.2）	270 （83.3）	369 （80.0）
N・A	11 （4.8）	26 （8.0）	49 （10.6）
計	227 （100.0）	324 （100.0）	461 （100.0）

ない者を100としたとき、ボランティア活動をやめた理由ごとの人数の比率が（　　）の中に示されているわけであるが、これを見ると現在の年令によって、ボランティア活動を継続し得なくなった理由が異っていることがわかる。すなわち、20～21才層および22才以上の層では、仕事の忙しさがボランティア活動をやめさせる大きな原因になっていることがあきらかである。

Ⅱ－12表　年令別・現在不参加の理由

	～19才	20～21才	22～24才
仕事が忙がしかった	2 （11.1）	11 （39.3）	18 （41.9）
活動についていけなかった	4 （22.2）	0 （0）	2 （4.7）
受入側とうまくいかなかった	2 （11.1）	0 （0）	2 （4.7）
つきあい程度に参加したため	3 （16.7）	7 （25.0）	14 （32.6）
家族が反対したため	1 （5.6）	0 （0）	0 （0）
自分の楽しみをもった方がよいと思ったから	1 （5.6）	0 （0）	6 （14.0）

それに対し、つきあい程度に参加したためという理由も年令が増大するごとに、その比率を高めているのであるが、これは恐らく、経験年数が長くなるに従って、ボランティア活動になんらかの形でかかわるチャンスは生じ、しかもそのかかわりあいが、あまり深い参加をもたらすに至らなかったという体験をより多くの人がもってくるということを示していると思われる。また、22才以上の層に、自分の楽しみをもった方がよいと思ったからという理由をあげた者が14%と増えていることがわかるのであるが、これなども、ボランティア活動のチャンスに恵まれながら、ボランティア活動の奉仕性、社会性といったことについていけず、あくまで個人の利益追求の枠を越えられなかった人たちが案外多いことを示していると思う。

まだ、ボランティア活動を体験していない人たちに、その活動への参加の意志を年令とクロスして示したものがⅡ－13表である。ここからも明らかな通り、参加の気持はないとする者は22才以上の層に多く、かれらがいろいろな意味でゆとりを失いつつある世代であることを浮き彫りにしている。一方参加したいという気持はあっても、その方法がわからないという答は19才以下の者に多く、そうした機会の提供が若い人たちにはとくに必要なことを示している。参加したいが照れくさい、といった答が20～21才層に多いのも、ボランティア活動の機会が多く提供され、ボランティア活動が社会的に一般化していくようになれば当然解消される問題で、その意味でも、ボランティア活動に対する社会的関心の高まりが期待されるのである。

Ⅱ－１３表　年令別・参加意志

	～19才	20～21才	22～24才
参加したい	26 （13.1）	44 （16.3）	52 （14.1）
参加したいが方法がわからない	44 （22.2）	40 （14.8）	57 （15.4）
参加したいが照れくさい	21 （10.6）	41 （15.2）	49 （13.3）
参加の気持はない	95 （48.0）	132 （48.9）	195 （52.8）
N・A	12 （6.1）	13 （4.8）	16 （4.3）
計	198 （100.0）	270 （100.0）	369 （100.0）

ハ．学歴別検討

次に学歴別に見てみよう。Ⅱ－14表からも明らかな通り、ボランティア活動を過去に体験したことがあるという答は、高学歴者ほど高い。これは恐らく、学生時代の体験も含めて高学歴者の方がそうした活動をするチャンスには恵まれているということを示しているように思われる。

Ⅱ－１４表　学歴別・ボランティア活動経験の有無

	中学卒	高校卒	短大 大学卒	D・K
ある	11 （9.2）	51 （7.1）	27 （16.6）	0 （0）
ない	97 （81.5）	604 （84.0）	128 （78.5）	8 （72.7）
N・A	11 （9.2）	64 （8.9）	8 （4.9）	3 （27.3）
計	119 （100.0）	719 （100.0）	163 （100.0）	11 （100.0）

ところが高学歴者の場合は、Ⅱ－１５表からも明らかな通り、せっかくボランティア活動に参加しても、仕事が忙がしかったという理由によって、その継続を断念したケースが非常に多いのである。高学歴者のみが仕事が忙がしいはずはないのであるが、ボランティア活動よりも仕事を優先するという考え方が高学歴者ほど高いという結果によるものとも考えられる。

一方低学歴者の場合、サンプル数は少ないのであるが、つきあい程度に参加したためとする答の比率が高い傾向を示している。これは低学歴の人たちがせっかくボランティア活動に参加する機会を得たのに、それに対して積極的に取り組む気持になれなかったということを示しており、ボランティア活動を体験するなかで、その意義をどう認識させるかについての検討の必要性を指し示していると思われる。

Ⅱ－15表　学歴別・現在不参加の理由

	中卒	高卒	短大 大学 卒	DK
仕事が忙がしかった	3 (27.3)	14 (27.5)	14 (51.9)	0 (0)
活動についていけなかった	1 (9.1)	4 (7.8)	1 (3.7)	0 (0)
受入側とうまくいかなかった	1 (9.1)	1 (2.0)	2 (7.4)	0 (0)
つきあい程度に参加したため	4 (36.4)	14 (27.5)	6 (22.2)	0 (0)
家族が反対したため	0 (0)	1 (2.0)	0 (0)	0 (0)
自分の楽しみをもった方がよいと思ったから	0 (0)	5 (9.8)	2 (7.4)	0 (0)

Ⅱ－16表　学歴別・参加意志

	中卒	高卒	短大 大学 卒	DK
参加したい	17 (17.5)	87 (14.4)	17 (13.3)	1 (12.5)
参加したいが方法がわからない	22 (22.7)	102 (16.9)	16 (12.5)	1 (12.5)
参加したいが照れくさい	9 (9.3)	84 (13.9)	14 (10.9)	4 (50.0)
参加の気持はない	43 (44.3)	306 (50.7)	71 (55.5)	2 (25.0)
N・A	6 (6.2)	25 (4.1)	10 (7.8)	0 (0)
計	97 (100.0)	604 (100.0)	128 (100.0)	8 (100.0)

Ⅱ－16表により、学歴別の参加意志を見てみよう。表から明らかなことは、参加のチャンスに恵まれているということと、参加の意志とは高学歴者の場合、全く別の問題だということである。つまり、高学歴者の場合は参加の気持がないとする答が他の層に比較して圧倒的に高いということである。これはある意味では、ボランティア活動への参加の機会により多く恵まれている高学歴者であるにもかかわらず、今までそれに参加してこなかった層であるからこそ、その気持がないのだということを示しているのであろうが、よくよく考えてみると、これは社会にとっても重要な問題を投げかけている。つ

まり、社会の中ではある意味ではエリートとして指導的役割を期待されている高学歴者に、自発的な奉仕活動としてのボランティア活動に対して消極的な姿勢が見られるということである。受験競争を中心とした競争社会を乗り越えて高学歴を達成した層であるから、他人のことにはかまっていられない、という考えが支配的であり、あるいはそうした考え方をしなければきびしい受験競争を生きられなかったということであろうか。そうであればなお一層事態は深刻である。うがった見方かも知れないが、高学歴者ほどボランティア活動に積極的に参加させ、社会にとってその活動が如何に意義のあるものであるかを身をもって体験する機会を作るべきではないかと思われる。

二、自由時間の長さ別検討

これまでの分析の過程でも示されたようにボランティア活動を継続しえない理由の大きなものとして、仕事が忙がしいという項目があるわけであるが、果たして自由時間の長さは、ボランティア活動にどれ程の影響を与えているものであろうか。こうした問題を究明するために先ず、平日の自由時間の長さが、ボランティア活動の経験とどんな関係を保っているかをⅡ－１７表から見てみよう。いうまでもないことであるが、自由時間の長さは現在の自由時間の長さであり、参加の経験は現在までの間の過去のすべての時点にわたってきているのであるから、この表自体の組み立てにある意味では問題が含まれているということもあるが、この表で見るかぎり、時間の長さとボランティア活動の経験との間にはあまり相関は見られないということがいえる。つまり、自由時間が長ければボランティア活動に参加できるというものではなく、自由時間の長さは大事な必要条件ではあろうが、十分な条件ではないのである。

Ⅱ－１７表　平日の自由時間・ボランティア活動参加経験の有無

	3時間未満	3～5時間未満	5時間以上
ある	30 (9.6)	43 (10.2)	16 (5.8)
ない	258 (82.4)	344 (81.3)	235 (85.1)
N・A	25 (8.0)	36 (8.5)	25 (9.1)
計	313 (100.0)	423 (100.0)	276 (100.0)

ただ、Ⅱ－１８表からも明らかな通り、時間にゆとりのあること自体は、十分な条件ではなくとも必要条件であるから、ボランティア活動に参加しても、自由時間の短い層は、仕事が忙がしかった〔時間がなかった〕という理由で継続できなかったケースが多いのである。３時間未満の層で仕事が忙がしかったというケースが５０％と多くなっているのはその典型である。一方、自由時間はたっぷりあるのに、ボランティア活動をやめていった理由をさぐってみると、何といっても多いのは、つきあい程度に参加したためという項目と、受入側とうまくいかなかったとする項目である。ボランティア活動をやめるにはそれ相応の理由があることは当然であるが、自由時間の長い層に、仕事が忙がしいという理由

がすくないのは、やっぱり自由時間の長短がボランティア活動の継続にある種の影響を与えていることは否めないということを示している。

それでは、自由時間の長さは、そうした活動への参加の意志にどんな影響を与えているのであろうか。Ⅱ－19表はそれを示したものであるが、一口でいえば、参加の意志については、自由時間の長短はあまり影響していないということがいえる。つまり、参加の気持がないという答もとくに3時間未満層に多いわけではなく、ボランティア活動の意味を認識し、それに積極的に参加しようという意志は自由時間の長さに関係なく決められているということがわかったのである。ただ、自由時間が短い場合には、せっかくボランティア活動に参加したとしても、その継続の上にはいくつかの問題が浮き彫りになっていることを示しているわけである。

Ⅱ－18表　平日の自由時間割・現在不参加の理由

	3時間未満	3～5時間未満	5時間以上
仕事が忙がしかった	15 (50.0)	14 (32.6)	2 (12.5)
活動についていけなかった	2 (6.7)	2 (4.7)	2 (12.5)
受入側とうまくいかなかった	0 (0)	1 (2.3)	3 (18.8)
つきあい程度に参加したため	7 (23.3)	10 (23.3)	7 (43.8)
家族が反対したため	0 (0)	1 (2.3)	0 (0)
自分の楽しみをもった方がよいと思ったから	0 (0)	7 (16.3)	0 (0)

Ⅱ－19表　平日の自由時間別・参加意志

	3時間未満	3～5時間未満	5時間以上
参加したい	36 (14.0)	47 (13.7)	39 (16.6)
参加したいが方法がわからない	43 (16.7)	64 (18.6)	34 (14.5)
参加したいが照れくさい	31 (12.0)	46 (13.4)	34 (14.5)
参加の気持はない	131 (50.8)	171 (49.7)	120 (51.1)
N・A	17 (6.6)	16 (4.7)	8 (3.4)
計	258 (100.0)	344 (100.0)	235 (100.0)

ホ．クラブ活動経験の有無別検討

在学中のクラブ活動の経験がボランティア活動への取り組みにどのような影響を与

えているかについての検討はすでにおこなってきた。そしてそこから明らかになった事実は、クラブ活動の経験者はボランティア活動に大変積極的に参加しているということであった。

Ⅱ－２０表　在学中のクラブ活動の経験有無別　ボランティア活動参加経験の有無

ボランティア活動＼クラブ活動	ある	ない	DK
ある	66 (9.4)	21 (8.1)	2 (38)
ない	572 (81.7)	223 (85.8)	42 (80.8)
N・A	62 (8.9)	16 (6.2)	8 (15.4)
計	700 (100.0)	260 (100.0)	52 (100.0)

Ⅱ－２０表は、クラブ活動の経験が、一度ボランティア活動に参加したが、それをやめた人に対してどのような影響を与えているかを見たものである。表からもわかる通り、クラブ活動の経験の有無と、ボランティア活動を過去には行ったが今はやめているというケースとは殆んど相関していない。すでに述べたように、クラブ活動の体験者はそれだけ多くボランティア活動を行っているのであるから、それをやめたケースも当然多くなって当り前なのであるが、実際は多くなっているのである。ということは、クラブ活動の体験者は、ボランティア活動には積極的に参加するが、途中でそれをやめることは非常に稀だということを示しているのである。こうした観点から、学生時代のクラブ活動の体験はボランティア活動に対して重要な意味をもっているということが明らかになったのである。

ヘ　事業所の規模別検討

ボランティア活動参加への阻害要因と参加の意志をめぐって、各属性別にさまざまの観点から論じてきたのであるが、その最後に就業先の事業所の規模別に分析してみよう。

Ⅱ－２１表は、ボランティア活動に参加した経験があるかどうかを事業所規模別に見たも

Ⅱ－２１表　事業所の規模別・ボランティア活動参加経験の有無

	1000人～	300～999人	50～299人	～49人	DK
ある	43 (9.7)	19 (9.0)	13 (5.2)	13 (12.4)	1 (25.0)
ない	351 (79.2)	173 (82.0)	226 (90.8)	85 (81.0)	2 (50.0)
N・A	49 (11.1)	19 (9.0)	10 (4.0)	7 (6.7)	1 (25.0)
計	443 (100.0)	211 (100.0)	249 (100.0)	105 (100.0)	4 (100.0)

のであるが、参加した経験が過去にあるとするものの比率は1,000人以上の事業所とともに49人以下の規模の小さい事業所の勤務者に多いという特徴が見られる。中間的な規模の事業所に参加経験者は少ないのである。

そこで、かれらが何故ボランティア活動をやめることになったかの理由をⅡ－22表によって検討してみよう。表から明らかなことは、49人以下の事業所では、仕事が忙がしかったを理由とするものの比率が圧倒的に高く、小さい規模の事業所では仕事の忙がしさのためにボランティア活動を断念したものの数がかなり多く存在することを示している。

Ⅱ－22表　事業所の規模別・現在不参加の理由

	1000人～	300～999人	50～299人	～49人
仕事が忙がしかった	16 (37.2)	5 (26.3)	4 (30.8)	6 (46.2)
活動についていけなかった	4 (9.3)	1 (5.3)	0 (0)	1 (7.7)
受入側とうまくいかなかった	2 (4.7)	1 (5.3)	0 (0)	1 (7.7)
つきあい程度に参加したため	13 (30.2)	5 (26.3)	4 (30.8)	2 (15.4)
家族が反対したため	1 (2.3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
自分の楽しみをもった方がよいと思ったから	4 (9.3)	2 (10.5)	1 (7.7)	0 (0)

一方、つきあい程度の参加だったため現在はそれを実行していないとするものの比率は、1,000人以上の規模において30.2%を占めており、かなり高くなっているのに対し49人以下の場合は15.4%とかなり低い。小さい企業の人たちにはボランティア活動に参加する機会にも恵まれていないが、参加する以上はつきあい程度といったものではなく、真剣に考えて参加しているのだということの実態が明らかにされたのである。

Ⅱ－23表は現在までのところでは参加していない人たちに対して、参加する意志があるかどうかをたづねたものであるが、一見してあきらかなことは、49人以下、50～299人といった規模の事業所すなわち中小零細企業の労働者の場合には、ボランティア活動への参加の意志があまり強くない、ということを示しているのである。中小零細企業に働く勤労青少年は、いろいろな意味でゆとりがなく、ボランティア活動に参加するどころではないということが実情であろうが、ボランティア活動のもたらす巾広い効用を考えると、この層に対しても、ボランティア活動をしたいという意志が生ずるような施策が是非とも必要なのである。

Ⅱ－２３表　事業所の規模別・参加意志

	1000人～	300～999人	50～299人	～ 49 人	D ・ K
参加したい	63 (17.9)	31 (17.9)	23 (10.2)	5 (5.9)	0 (0)
参加したいが方法がわからない	65 (18.5)	32 (18.5)	34 (15.0)	10 (11.8)	0 (0)
参加したいが照れくさい	48 (13.7)	27 (15.6)	24 (10.6)	12 (14.1)	0 (0)
参加の気持はない	154 (43.9)	75 (43.4)	137 (60.6)	54 (63.5)	2 (100.0)
N ・ A	21 (6.0)	8 (4.6)	8 (3.5)	4 (4.7)	0 (0)
計	351 (100.0)	173 (100.0)	226 (100.0)	85 (100.0)	2 (100.0)

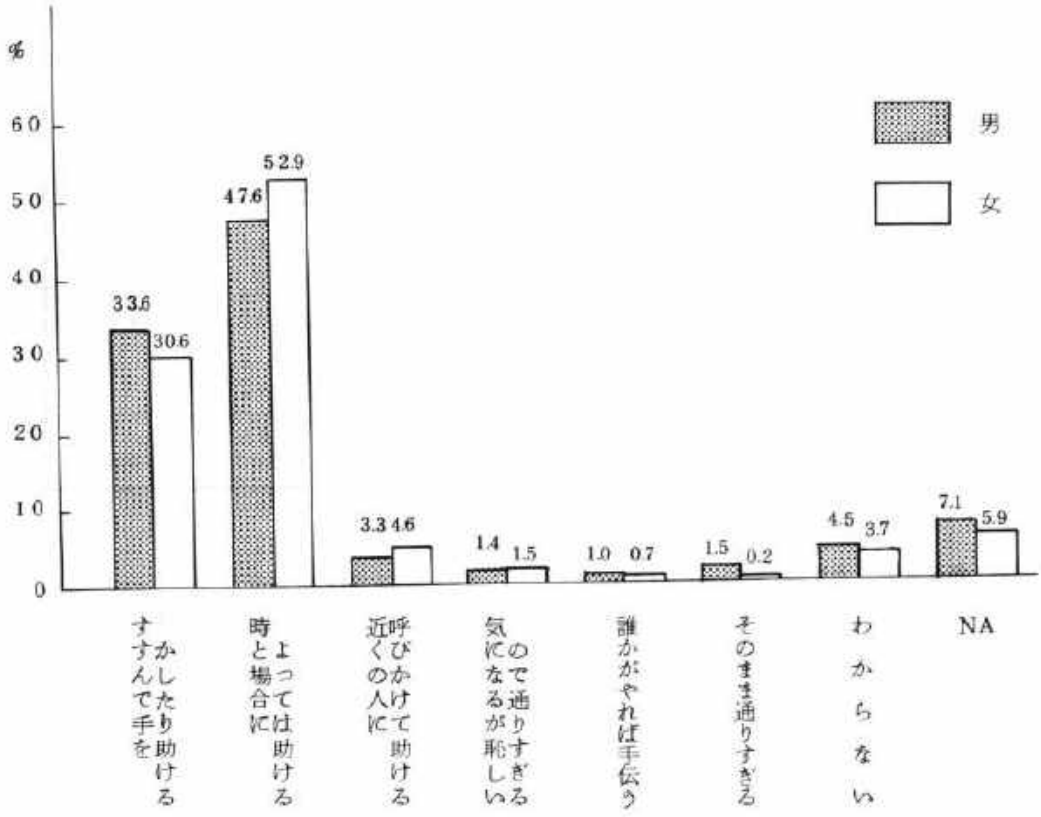
(5) 奉仕をめぐる意識

ボランティア活動は多くの場合、組織を通じて展開されるが、しかしその基礎にあるのは個人のその活動に対する自発的かつ積極的な気持であると思われる。そこで、ここではボランティア活動の基礎になる奉仕行為に対する考え方そのものについて検討してみたい。

イ．奉仕意識について

Ⅱ－２２図は、老人や身体の不自由な人、子供などが困っているときどうするかという質問に対する解答を示したものであるが、進んで手をかすという回答よりも、時と場合によっては助けるという消極的な態度の回答の方が多くなっている。近くの人に呼びかけて助けるとか、気になるが恥しいので通りすぎるとか、誰かがやれば手伝う、あるいはそのまま通りすぎるといった更に消極的な態度は極端に少ないことは、その反面、勤労青少年がある程度奉仕的な気持をもっているということの証明になるのかも知れない。ただ注意しなければならないことは、「時と場合によっては」という言葉自体非常に広い巾をもっている言葉であり、強いて極言すれば、時と場合によっては助けるということは、「ほとんどの場合助けない」ということにもなるのである。こうした観点にたつと、この回答の比率が高いことは、むしろ勤労青少年の奉仕活動に対する消極性を示していると見ることもできるのである。

Ⅱ－２２図　老人や体の不自由な人、子供などが困っている時



ロ．奉仕意識の属性別検討

Ⅱ－２４表ならびにⅡ－２５表は、ａで検討した質問に対し、各属性別にクロス集計したものであるが、この２つの表をもとに、奉仕に対する考え方がその人の属性によってどう異っているかを分析したい。

まず、年令差によって奉仕活動に対する意識が異っているかという問題であるが、対象者が２５才未満ということもあって、年令による回答上の差異はあまり見られない。あえてその差をさぐれば、２２才以上の男子に、すすんで手をかすという積極的な姿勢が見られるのに対して、２０～２１才の男女および２２才以上の女子に、時と場合によっては手をかすという消極的な姿勢が見られるということなのである。

学歴の違いは奉仕の意識にどのような影響を及ぼしているのであろうか。一言でいえば低学歴層で積極的な姿勢が見られ、高学歴者で消極的な傾向がうかがわれるということである。すなわち、中学卒業者では、すすんで手をかすという答は、男子で３７.９％、女子で４１.５％い

るのに対して、短大　大学卒業者では男子で33.7%、女子で32.5%しかいないのである。反面、時と場合によっては手をかすという消極的な態度は、中学卒業者の男子では43.9%、女子では41.5%であるのに対し、短大・大学卒業者の場合には男子で51.8%、女子で53.7%とかなり増大しているのである。高学歴化するほど奉仕に対して消極的になるという傾向については、これまでのところでも指摘してきたのであり、ここでも同じような傾向があらわれているということである。

Ⅱ－24表　老人や体の不自由な人が困っているときの態度（年令・学歴別）

		すすんで手をかす	よっては手をかす時と場合に	共同で助ける	恥しいので通りすぎる	だれかがやれば手伝う	そのまま通りすぎる	わからない	N・K	計
年齢	～19才	25	36	4	1	2	2	7	6	83
		30.1	43.4	4.8	1.2	2.4	2.4	8.4	7.2	100.0
		45	70	11	3	2	0	3	10	144
		31.3	48.6	7.6	2.1	1.4	0.0	2.1	6.9	100.0
	20～21才	27	59	2	3	1	2	2	7	103
		26.2	57.3	1.9	2.9	1.0	1.9	1.9	6.8	100.0
		69	119	6	4	2	0	11	10	221
		31.2	53.8	2.7	1.8	0.9	0.0	5.0	4.5	100.0
	22～24才	89	105	8	2	1	2	10	17	234
		38.0	44.9	3.4	0.9	0.4	0.9	4.3	7.3	100.0
		67	124	10	2	0	1	8	15	227
		29.5	54.6	4.4	0.9	0.0	0.4	3.5	6.6	100.0
学歴	中学卒	25	29	1	1	1	1	4	4	66
		37.9	43.9	1.5	1.5	1.5	1.5	6.1	6.1	100.0
		22	22	4	1	1	0	0	3	53
		41.5	41.5	7.5	1.9	1.9	0.0	0.0	5.7	100.0
	高校卒	87	127	10	5	3	2	12	21	267
		32.6	47.6	3.7	1.9	1.1	0.7	4.5	7.9	100.0
		130	247	19	8	3	1	19	25	452
		28.8	54.6	4.2	1.8	0.7	0.2	4.2	5.5	100.0
	短大卒 大学卒	28	43	3	0	0	3	3	3	83
		33.7	51.8	3.6	0.0	0.0	3.6	3.6	3.6	100.0
		26	43	2	0	0	0	3	6	80
		32.5	53.7	2.5	0.0	0.0	0.0	3.7	7.5	100.0

＊表中の上段は男性、下段は女性の数値である。

Ⅱ－２５表　老人や体の不自由な人が困っているときの態度（規模・クラブ活動経験別）

		すすんで手をかす	よっては手をかす時と場合に	共同で助ける	恥しいので通りすぎる	だれかがやれば手伝う	そのまま通りすぎる	わからない	N・A	計
事業所の規模	1000人以上	48	68	5	6	0	2	4	12	145
		33.1	46.9	3.4	4.1	0.0	1.4	2.8	8.3	100.0
		85	166	14	7	1	1	7	17	298
		28.5	55.7	4.7	2.3	0.3	0.3	2.3	5.7	100.0
	300～999人	27	38	3	0	1	1	6	10	86
		31.4	44.2	3.5	0.0	1.2	1.2	7.0	11.6	100.0
		42	60	7	0	0	0	6	10	125
		33.6	48.0	5.6	0.0	0.0	0.0	4.8	8.0	100.0
	50～299人	50	70	4	0	3	3	8	4	142
		35.2	49.3	2.8	0.0	2.1	2.1	5.6	2.8	100.0
		31	56	5	2	1	0	5	7	107
		29.0	52.3	4.7	1.9	0.9	0.0	4.7	6.5	100.0
	49人以下	16	23	2	0	0	0	1	3	45
		35.6	51.1	4.4	0.0	0.0	0.0	2.2	6.7	100.0
		23	29	1	0	2	0	4	1	60
		38.2	48.3	1.7	0.0	3.3	0.0	6.7	1.7	100.0
在学中のクラブ活動経験	有	106	145	10	5	4	4	10	24	308
		34.4	47.1	3.2	1.6	1.3	1.3	3.2	7.8	100.0
		131	196	18	5	1	0	17	24	392
		33.4	50.0	4.6	1.3	0.3	0.0	4.3	6.1	100.0
	無	27	46	4	1	0	2	7	3	90
		30.0	51.1	4.4	1.1	0.0	2.2	7.8	3.3	100.0
		45	98	8	4	1	0	5	9	170
		26.5	57.6	4.7	2.4	0.6	0.0	2.9	5.3	100.0

＊ 注　表中の上段は男性、下段は女性の数値である。

事業所の規模で見ると、規模の小さい事業所に勤務するものの方が積極的な意識が高いということがわかる。つまり、すすんで手をかすという答は、例えば 1000 人以上の事業所に勤務しているものの場合には、男子が 33.1%、女子が 28.5%であるのに対して、50～299 人の規模では男子が 35.2%、女子が 29.0%、さらにそれが 49 人以下の事業所になると男子が 35.6%、女子が 38.3% と非常に高くなっているのである。小さい事業所に勤務

するものの方が全般的にいえば生活水準あるいは企業内福祉については問題を多くかかえているはずであり、ある意味ではそうして自分たち自身が悩みをもち問題点をもっているだけに、より弱い人たちに対する積極的な姿勢が生れてくるということもいえるのであろうか。

在学中のクラブ経験の有無と奉仕意識の間にもかなりはっきりした相関関係が見られる。すすんで手をかすという答は、クラブ活動体験者の場合には男子34.4%、女子で 33.4% と、クラブ活動未経験者の場合の男子30.0%、女子 26.5% をはるかにしのいでいる。逆に、時と場合によっては手をかすという消極的姿勢は、クラブ経験者の場合（男子47.1%、女子50.0%）にくらべて、未経験者（男子 51.1%、女子 57.6% ）の方がずっと高いのである。クラブ活動をしたからボランティア活動に関心があるのか、逆に、ボランティア活動に関心のあるような人だからクラブ活動にも熱心であるのか、ここからはいちがいにはいえないが、両者がお互いに原因であり結果であるということであろうし、クラブ活動体験がボランティア意識を高めるという側面があるとすれば、学生時代からのクラブ活動への積極的参加がはかられるべきであるし、それはまた就職後の職場でのクラブ活動にもあてはまる問題だと思われるのである。

(6) ボランテイア活動のあり方についての認識

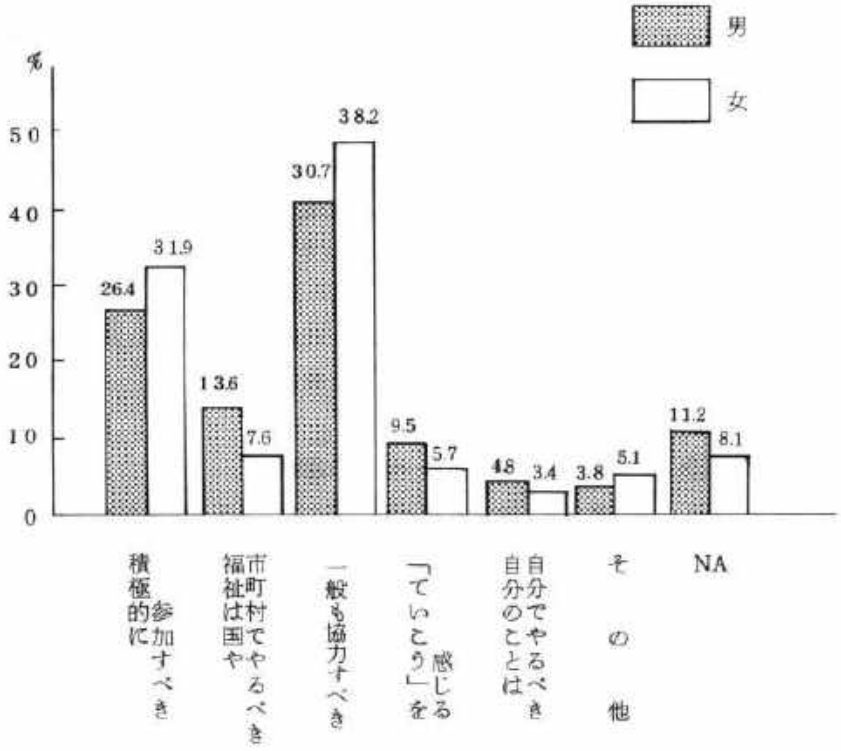
さて、勤労青少年のボランティア活動をめぐっての調査結果をさまざまな観点から分析してきたのであるが、最後に、ボランティア活動のあり方についての意見を分析して終りとしたい。

ボランティア活動がどんな形で展開されるべきかという問題をめぐって、さまざまな見解が存在していることはいうまでもない。それらを整理すると、Ⅱ－２３図の選択肢に示したようないくつかの見解に分類されると思われる。その第１は、福祉は最終的には社会を構成している各個人個人がそれにどうとり組むかの問題であって、ボランティア活動に対しても個人がそこにどう積極的に参加していくかということが決定的なポイントだとする考え方である。第２の考え方は、福祉は社会全体の問題であるだけに、そこでの最終責任者は国であり地方自治体であるべきだとする考え方である。個人は全く無関係というわけではないが、個人の支出した税で国や地方自治体がリーダーシップをとって福祉事業は推進すべきだとする考え方である。

第３の考え方は、前二者の折ちゅう案なのでもあるが、一般の個人は責任をもっている行政機関なり組織なりに対してできるだけ協力する形で福祉活動が推進されるべきだとする考え方である。第４の考え方は、福祉という概念自体が恵まれた者が恵まれないものに手をさしのべるということであり、福祉的な行為が変に美化されることは、考えようによれば、恵まれた者の存在と恵まれない者の存在を容認することにもなる。豊かな者が貧しい者へ、幸福な人間が不幸な人間へという行為が、つまり上から下へとくだす行為が容認され、要請されているようで抵抗を感ずる、というものである。第５のそれは、現代のような自由競争社会では人に頼ること自体が問題で、自分のことは自分で責任をもつべきだ。言葉をかえれば、福祉にあまりに力を注ぐとかえって怠惰な人間を生み出すことになってしまうという考え方がそこに含まれているのである。

以上のような５つの考え方に対し、勤労青少年がどのような反応を示すかを見たのがⅡ－

Ⅱ－２３図　ボランティア活動のあり方について



２３図である。図からも明らかなように第３の考え方すなわち一般の人たちも福祉推進機関に対して協力すべきであるとする考え方が一番強く、それに次いで第１の考え方つまり個人こそが積極的に参加すべきだとする考え方、３番目には、福祉は国や市町村（地方自治体）でおこなうべきだとする考え方、４番目には、福祉という考え方自体に抵抗を感ずるという意識の順で続いているのである。

男女ともその順位においてはかわらないが、女子に比較的強くでる項目と男子に強くでる項目とがあり、男女のものの考え方の相異が浮き彫りにされているようで興味深い。女子の場合は一般も協力すべき、個人が積極的に参加すべきという個人のボランティアへの取りくみ方を主張する声が高く、それに対して男子の場合には、全体的には低いが女子との比較においては、福祉は国や自治体でおこなうべき、ていこうを感ずる、自分のことは自分でやるべきといった福祉とは何かという問題を問い直すような種類の意向が高まる傾向を示している。

Ⅱ－２６表は、そうした５つの見解が、年令と学歴のちがいによってどう変化するかを見たものである。表の年令の項からも明らかな通り、年令による差よりも、性別による差の方が明確に出ていることがわかる。すなわち、すべての年令層において、積極的に参加すべきだとす

Ⅱ－26表　ボランティア活動についてどのように考えているか

		積極的に参加すべき	国や市町村でやるべき	一般も協力すべき	ていこうを感じる	自分でやるべき自分のことは	その他	N・A	計
年齢	～19才	23	13	21	9	3	10	10	83
		27.7	15.7	25.3	10.8	3.6	12.0	12.0	100.0
		48	13	53	7	5	7	11	144
		33.3	9.0	36.8	4.9	3.5	4.9	7.6	100.0
	20～21才	30	12	30	8	7	14	14	103
		29.1	11.7	29.1	7.8	6.8	13.6	13.6	100.0
		68	16	91	17	7	10	12	221
		30.8	7.2	41.2	7.7	3.2	4.5	5.4	100.0
	22～24才	58	32	78	23	10	10	23	234
		24.8	13.7	33.3	9.8	4.3	4.3	9.8	100.0
		73	16	82	10	8	13	25	227
		32.2	7.0	36.1	4.4	3.5	5.7	11.0	100.0
学歴	中学卒	23	7	19	6	3	0	8	66
		34.8	10.6	28.8	9.1	4.5	0.0	12.1	100.0
		23	5	15	4	3	2	1	53
		43.4	9.4	28.3	7.5	5.7	3.8	1.9	100.0
	高校卒	73	38	76	22	15	12	31	267
		27.3	14.2	28.5	8.2	5.6	4.5	11.6	100.0
		149	36	163	26	17	22	39	452
		33.0	8.0	36.1	5.8	3.8	4.9	8.6	100.0
	短大卒 大学	14	12	33	12	2	4	6	83
		16.9	14.5	39.8	14.5	2.4	4.8	7.2	100.0
		14	4	46	4	0	5	7	80
		17.5	5.0	57.5	5.0	0.0	6.3	8.7	100.0

＊注　表中の上段は男性、下段は女性の数値である。

る意見と、一般も協力すべきだという意見は女子に高く、国や自治体でやるべきという意見、ていこうを感じる、自分のことは自分でやるべきといった意見は男子に高いのである。つまり、年令差よりも男女差の方が強くでていることがわかるのである。

最後に、学歴について見てみよう。この場合は男女差とは別に明らかな差異が出ていると思う。すなわち、同じように個人のあり方を問題にする第1の見解、第3の見解ではあるが、学

歴の低い場合は、第1の見解すなわち、個人が積極的に参加すべきだとする考え方が支配的であるのに対し、高学歴者では、個人も協力すべき、つまり福祉推進主体が積極的に推進すべきで、それに個人が支援するという第3の見解をとる人が多くなっているのである。そして、国や自治体などが積極的におこなうべきだとする第2の見解に対しては、とくに男子の場合であるが、高校卒14.2%、短大、大学卒 14.5%という高い比率が出ており、ていこうを感ずるとする層も、男子の短大、大学卒では 14.5% の高い率になっているのである。

以上、アンケート調査の結果を紹介することに重点をおきながら、勤労青少年のボランティア活動の実態と意識について述べた次第である。

第3章　勤労青少年ホームにおけるグループのボランティア活動の実態と地域社会

― アンケート調査の概要 ―

勤労青少年ホーム（以下「ホーム」という。）は、主として福祉施設に恵まれない中小企業に働く青少年のために、健全な余暇活動の場を提供することを目的として、労働省が地方公共団体（主として市町）に補助金を交付し、設置を促進している勤労青少年のための総合的福祉施設で、昭和52年度末においては全国で369ケ所（昭和52年度設置分21ケ所を含む。）に設置をみている。これらホームの利用の対象者はおおむね25才未満の働く青少年となっており、昭和51年度における全国のホーム利用者は年間で延約705万人にのぼり、1ホームあたりでは年間約2万人、1日当り約70人となっている。

労働省においてはホームにおけるクラブ活動やスポーツ活動などの促進を図ってきており、年々各種の活動が活発化してきているが、最近は、ボランティア活動も盛んになりつつある傾向にある。

本研究会は、第2章に述べたアンケート調査に加え、ホームにおけるボランティア活動の実態をは握するため、ホームを対象に調査を実施した。回収された調査票は319であった。本章ではその結果についてみることとする。

1. ホームにおけるグループ数

319のホームにおけるグループはクラブ数は総数で 3,031であったが、Ⅲ－1表のとおり10～14のグループがあるところが最も多く93（29.2%）、次いで1～4、61（19.1%）5～9、60（18.8%）の順となっており、30以上ものグループがあるところは8（2.5%）となっている。

Ⅲ－1表　ホームにおけるグループ数

グループ数＼計	1～4	5～9	10～14	15～19	20～24	25～29	30～	N・A	不明
319	61	60	93	42	17	3	8	32	3
100%	19.1	18.8	29.2	13.2	5.3	0.9	2.5	10.0	0.9

2. ボランティア・グループの有無とグループ数

ボランティア・グループ（ボランティア活動を直接的な目的としているグループのほかに、ボランティア活動を直接的目的としないグループであってもその活動内容にボランティア活動が含

まれるものを含む。）の数は、全グループの9.0％にあたる２７４で、Ⅲ－２表のとおり約半数の１５６（４８.９％）のホームにみられた。これをグループ数別にみると、１グループのホームは８８（５６.４％）で最も多く、ついで２グループ３４（２１.８％）、３グループ１６（１０.３％）となっており、５グループ以上あるところは３（１.９％）とその割合は低くなっている。

ボランティア・グループの参加者総数は 8,707人で、うち男子は 4,141人（４７.６％）、女子は 4,566人（５２.４％）で、女子がわずかに男子を上回っている。

次にグループの参加者とグループ数との関係をみると、Ⅲ－３表のとおり１０～１４人が最も多く６５グループ（２３.７％）、ついで５～９人５７（２０.８％）、１５～１９人５０（18.2％）の順となっており、２０人未満のグループが大多数を占めている。

Ⅲ－２表　ボランティア・グループの有無とグループ数

計	ある							ない	N・A
	小　計	1	2	3	4	5　～	N・A		
319 100％	156 48.9 （100％）	88 （56.4）	34 （21.8）	16 （10.3）	7 （4.5）	3 （1.9）	8 （5.1）	160 50.2	3 0.9

Ⅲ－３表　ボランティア・グループの参加者数別グループ数

グループ員数 ＼ 計	1～4	5～9	10～14	15～19	20～24	25～29	30人以上
274 100％	2 7.3	57 20.8	65 23.7	50 18.2	35 12.8	16 5.8	49 17.9

3.　ボランティア・グループの活動年数

各ホームごとに、活動歴の最も長いグループの活動年数についてみるとⅢ－４表のとおり、３年、４年のほか１０年以上がそれぞれ２５（１６％）と高くなっているが、５年以下が過半数（６０.９％）を占めている。

なお、活動年数についてはホームの設置時期との関係に留意する必要があるが、昭和４５年以降に設置されたホームについてみると、設置後１～２年でボランティア活動が始められている傾向がみられた。

Ⅲ－４表　ボランティア・グループの活動年数

活動年数 ＼ 計	1	2	3	4	5	6	7	8～9	10年以上	N・A
156 100％	7 4.5	19 12.2	25 16.0	25 16.0	19 12.2	14 9.0	10 6.4	9 5.8	25 16.0	3 1.9

4. ボランティア活動の内容

次にボランティア活動の内容をみるとⅢ－５表のとおり、福祉施設での活動が２１４（４７.９％）で最も多く、ついで環境改善や社会制度に関する活動１４０（３１.３％）、個人グループに、対して行う活動９３（２１.０％）とねっており、前記の個人アンケートの場合と同様の傾向がみられる。これをさらに具体的にみると、福祉施設などの活動で最も多いのは、ホームにおける音楽その他のグループ活動の成果を提供する形で行なわれるものと考えられる「演芸」で、ついで、「遊び相手、話し相手」、「労働奉仕」の順となっており、環境改善や社会制度に関する活動では「清掃」、「募金活動」などの順となっている。個人グループに対して行う活動では、「グループのリーダー」、「遊び相手、話し相手」が多い。

Ⅲ－５表　ボランティア活動の内容（Ｍ・Ａ）

計	福祉施設での活動										個人・グループに対して行う活動									環境改善や社会制度に関する活動											
	小計	遊び相手・話し相手	演芸	学習、習いごとなどの指導	技術奉仕	労働奉仕	衣料品の修理	おもちゃなどの提供	その他	小計	遊び相手・話し相手	身の回りの世話	グループのリーダー	買物の手伝い・通園の介助	点訳・リーディングサービスの代筆	ドライブ	その他	小計	募金活動	清掃	緑化活動	公害防止活動	調査特別活動	保健衛生活動	施設づくり	環境づくり	制度の改正	その他
447 100％	214 47.9％ (100)	59 (27.6)	63 (29.4)	7 (3.3)	14 (6.5)	49 (22.9)	0 (0.0)	4 (1.9)	18 (8.4)	93 21.0％ (100)	31 (33.3)	6 (6.5)	34 (36.6)	1 (1.0)	6 (6.5)	3 (3.2)	12 (12.9)	140 31.3％ (100)	42 (30.0)	50 (35.7)	19 (13.6)	1 (0.7)	2 (1.4)	3 (2.1)	5 (3.6)	7 (5.0)	6 (4.0)	11 (7.9)

5. ボランティア活動へのきっかけ

活動へのきっかけは、Ⅲ－６表のとおり「自発的にはじめた」が１３０（６７.７％）と圧倒的に多く、ボランティア活動が本来自発的に行われるべきものであることと符合している。ついで「ホームで推奨したため」３０（１５.６％）が多く、また「講座でとり上げた」８（４.２％）とホームによる動機づけをうかがわせるものもみられる。他方、「公的機関からの呼びかけ」９（４.７％）、「ホーム外のグループからの呼びかけ」７（３.６％）によるものは少い。

Ⅲ－６　ボランティア活動へのきっかけ（ＭＡ）

動機 / 計	グループが自発的に	ホームで推奨したため	講座でとり上げたため	福祉施設を見学したため	ホーム外のグループからの呼びかけ	公的機械からの呼びかけ	その他
１９２ １００％	１３０ ６７.７	３０ １５.６	８ ４.２	４ ２.１	７ ３.６	９ ４.７	４ ２.１

6. 地域におけるボランティア活動の積極的な動きとホームにおけるボランティア・グループの有無との関係

ホームにおけるボランティア活動が行われているかどうかは、その地域の特性ともかかわりがあるのではないかと考えられる。先ず地域におけるボランティア活動についての動き（ボランティア活動を行っていないホームの地域の状況を含む。）をみるとⅢ－7表のとおり地域の学校、自治体等で、ボランティア活動について積極的な動きが「ある」とするホームは214（66.1%）と大多数を占め、「ない」は85（26.6%）となっている。「ある」についてその内容をみると、「社会福祉団体などの団体がボランティアの養成をしたり、参加の呼びかけをしている」112（52.3%）が最も多く、ついで「自治体その他の団体が広報誌などでPR」93（43.5%）、「都道府県や市町村がボランティアの養成をしたり、参加の呼びかけをしている」88（41.1%）の順となっている。

次に地域におけるボランティア活動の動きとホームにおけるボランティア・グループの有無との関係についてみると、ボランティア・グループが「ある」ホームは155（48.6%）、「ない」ホームは144（45.1%）となっているが、グループが「ある」ホームで地域にボランティア活動が「ある」は123（79.4%）、「ない」は32（20.6%）となっており、ボランティア・グループは「ない」が地域に活動の動きが「ある」は91（63.1%）、「ない」が53（36.8%）となっている。ボランティア活動の積極的な動きが「ある」地域のホームは「ない」地域のホームよりボランティア・グループが「ある」割合が高く、また、逆にボランティア活動の動きの「ない」地域のホームでは、「ある」地域のホームよりボランティア・グループの「ない」割合が高く、両者の間に相関関係のあることが認められる。

Ⅲ－7表　地域におけるボランティア活動の積極的な働きとホームにおけるボランティア・グループの有無との関係

計			ある								ない	N・A
			小計	小・中・高校で指導している	広報誌などでPRしている	都道府県や市町村がボランティアを養成	社会福祉団体がボランティアを養成	商工団体等で呼びかけ	労働組合などで活動がある	その他		
319 100%			214 67.1 (100%)	24 (11.2)	93 (43.5)	88 (41.1)	112 (52.3)	6 (2.8)	2 (0.9)	10 (4.7)	85 26.6	20 6.3
ボランティアグループ	ある 155 100%		123 79.4 (100%)	9 (7.3)	49 (39.8)	64 (52.0)	67 (54.5)	3 (2.4)	2 (1.6)	4 (3.3)	32 20.6	
	ない 144 100%		91 63.1 (100%)	19 (20.9)	41 (28.5)	38 (26.4)	48 (39.0)	5 (5.5)	1 (1.1)	5 (5.5)	53 36.8	

7. ボランティア活動に対する勤労青少年ホーム側の立場

ホームの立場として、グループやクラブのボランティア活動についてどのような姿勢でのぞんでいるかについてみると、Ⅲ－8表のとおり「グループの主体制にまかせ求めがあれば助言」とするものが222（69.6%）と圧倒的に多いが、「積極的に指導していく方針」のホームが45（14.1%）とこれについで多くみられた。また、「ホーム内での活動に重点をおく」21（6.6%）「行政は関与すべきでない」3（0.9%）は極めて少く、ボランティア活動については、全体として、介入はしないまでも前向きに見守っていくか積極的に育てていこうとする姿勢がうかがえる。

Ⅲ－8表　ボランティア活動に対するホーム側の立場

計	積極的に指導していく方針	グループの主体制にまかせ求めがあれば助言	ホーム内の活動に重点を置く	行政は関与すべきでない	何ともいえない	その他	N・A
319	45	222	21	3	5	10	13
100%	14.1	69.6	6.6	0.9	1.6	3.1	4.1

第４章　勤労青少年のボランティア活動事例

以上第２章及び第３章においてボランティア活動をめぐる２つの調査結果について述べたが、以下、勤労青少年のボランティア活動の具体的な事例として、

勤労青少年福祉推進者選任事業所の活動事例

勤労青少年福祉推進者は、勤労青少年福祉法第13条の規定に基づき、常時使用する20才未満の勤労青少年が20人以上である事業場で選任することが定められており、その雇用する勤労青少年の職場適応を容易にするために、指導・相談、レクリエーション等の事項を担当することになっているものである。

勤労青少年福祉推進者は、１４,０５１事業所において１９,８９６人選任されているが（昭和５２年３月末現在）、ここではそのうち大手の「電機㈱」の場合を紹介する。

Ｔ電気㈱におけるボランティア活動

(1)　はじめに

当社においては、「国の内外ともに地域との協調連帯をはかる」ことを経営方針の一としてきており、我々が社会の一市民であることを銘記して、地域社会とのコミュニケーション、地域開発への協力、会社施設の開放、地域社会・団体への参加・寄付等の諸施策を通じて、地域社会との融和・協調に努めている。

即ち、企業は、社会の一員であり社会の中でその活動を営む以上、企業は社会においてその機能（開発・生産・流通・サービス）を発揮するにとどまらず、社会の他の構成員に迷惑をかけないことは言うまでもなく、相互に協調し合いながら進歩発展をめざすべきであるということである。

当社では、かゝる方針に基づき諸施策を推進しているが、この中で従業員のボランティア活動が生れる素地を見ることができる。

若干具体的に言えば、活力のある職場とするための小集団活動（ＺＤ運動、ＱＣサークル活動、改善提案推進活動等）も活発に行なわれ、ここ１０年来定着した活動となっているが、これらの運動や自主研修の場として自然の多い過疎地の旧農家等を借り受けた「自然研修道場」（全国10ケ所……総収容人員５３０余名）も設けられている。

また、昭和４２年から本格的に実施したレクリエーションリーダーの養成研修によって従業員のレク活動も定着しており、リーダーも社内研修によって順次受け継がれている。

さらには、こゝ数年　会社の各種イベントの開催による地域連帯強化の呼びかけに応え、従来の窓口企画から全従業員の参画による企画、創造を通じて地域ぐるみへの祭、が実施されているが、共感をよび年毎に輪が広がっている。（ちなみに５２年度は２４工場中２２工場で行なわれた。）

このように、働く若者の自発性を求める場づくりを通じて、従業員個人の社会の一員として意識・生きがい・奉仕の精神の醸成に資しているのである。

(2) 以下、ボランティア活動について、具体的にいくつかの領域に分けて述べてみたい。

(イ) 福祉・教育等の施設における活動

① 児童養護施設等における活動

- A工場（川崎） 男子２３名
  施設の子供達とレクを行なう他、設備の補修や整備に奉仕している。
- B工場（川崎） 男子２２名
  施設内外の清掃、レクの他バザー等の収益金で購入した学用品、書籍、ゲーム用品、菓子類等の提供も行なっている。
- C工場（府中） 男女１５０名
  毎年クリスマスにプレゼントを持って慰問する他、年１回工場見学・昼食会を行なっている。
- D工場（深谷） 男女３０名
  音楽サークルがバンドサークルと一緒に訪問し、歌の披露や詩の朗読等を行なっている。
- E工場（川崎） 男女２２名
  施設の子供達と一緒に、花見（４月）、花火見物（７月）、動物園見学（９～１０月）もちつき大会（年末）等の諸行事を行なっている。
- F工場（大阪） 男女２００名
  毎年１月に子供達を体育館に招待して新春パーティーを開き、レク・ゲームを行なっている。
- G工場（瀬戸） 男女 ８名
  年３～４回慰問し、レク・ゲームを行なったり、スベリ台等設備作りに奉仕している。
- H工場（三重） 男女 １７名
  工場で４８年末発足した「生きがい運動」を契機に音楽部の部員が慰問を続けている。

等々、保護者のいない幼児・児童の施設や心身障害者施設を慰問する活動は、若年層を中心に相当の例を見ることができる。

㊁ 老人ホームにおける活動

老人ホームにおける活動は、前記の養護施設における活動メンバーで行われている例が多いが、レクやゲームを行うことに代えて、趣味を生かした裁縫、歌、民謡、詩吟、映写会等内容は、多種多様にわたっている。

また、施設清掃、設備点検等の奉仕や入浴手伝、談話相手となるなど巾広い活動を行なっている。

特筆すべき例としては、J工場（名古屋）の音楽部（男女１３名）が挙げられる。(財)善意銀行の芸能部門に登録しており、年５～６回 老人ホーム 療養所等を慰問する方法をと

っているが、先輩から後輩へと実に１５年間受けつがれて今日に至っている。

㈩ 以上、従業員のチーム活動を中心に述べたが、視覚障害者用書籍の点訳等個人活動もみられる。

(ロ) 地域における活動

㈠ 環境整備活動

工場・社宅・独身寮をとりまく地域への活動も相当活発に行われている。これらの会社施設附近の道路、通勤路、バス停留所、公園、駅前広場、公営駐車場、公衆便所等の清掃、吸殻入れの備付・整理、諸施設の簡易補修、街灯の手入れ、不用ビラの撤去等に奉仕しているが、参加人員は今回の調査では、約２０００人（１年）にも及んでいる。

また、若干例としては、独身寮所在の神社や墓地の清掃、参道の手入れをしている事例、交番慰問等の事例もあるが、これが契機となったのか付近の町内会でも同様の奉仕活動をはじめたとの報告がある。

㈡ スポーツ・レク活動を通じての活動

地域住民のスポーツ・レク活動への当社従業員の参加は、会社施設（グラウンド、体育館、道場、プール、研修所等）の地域への解放と相俟って特に盛んである。

少年野球チームの監督、コーチ、ママさんバレーの指導員、運営援助の例が多いが、卓球、バトミントン、バスケット、テニス、サッカー、ラグビーマラソン等の指導者としての参加もあり、全工場で実例がある。

また、ＰＴＡ主催の親子レクリェーション大会、青年団レク等にリーダとして参加する例が地方事業場（特に地域との密着度が高い。）にみられる。

これらに参加している者は、過去においてレクリーダーの研修を受けた者や社内スポーツチームのＯＢ、現役等の経験者が中心となっており、これらの者の提唱で賛同者が増加しつつあるが、全社で１５００余名にも及んでいる。

㈢ 各種委員、メンバーとしての活動

さらに、従業員の個人的活動として、公的、私的の委員や団体のメンバーとしての活躍も見逃がせない。

調査にあらわれた名称を若干あげてみると次のとおりである。

社会奉仕協力団員、体育指導員、社会福祉委員、青少年指導員、ボーイスカウト、スポーツ活動推進協議会委員レクリェーション連盟役員、青少年育成カウンセラー、子供会指導員、野外活動指導員、オリエンテーリング指導員、救急指導員、各種スポーツ連盟審判員等。

(ハ) 各種イベント行事に出店（模擬店）した際の売上金や従業員が持ち寄った不要品廃品の処分代金等を寄付する事例がある。

(3) む す び

以上、当社の概要を簡単にまとめてみたが職場・社宅・独身寮等の集団から生じた活動もあれば、個人として趣味や相通じたスポーツ技倆を生かした活動もあり、発生の動機は多様であるが、会社施策を推進するなかで徐々ではあるが従業員のボランティア活動促進の成果をみることがで

きる。

著しい科学技術や文明の発展の中で、価値が多様化、相対化し、心や行動の支えにするものを求めることが困難な時代にあっても、働く若者達を見れば、社会への潜在的関心と奉仕の精神は、決して失われてはいない。

企業としては、これら若者達が、社会との連帯感を抱き、自発的意思ですゝんでボランティア活動に参加するように、あらゆる機会における小集団活動を推進する必要がある。

2. 勤労青少年福祉員の指導による活動

勤労青少年福祉員（以下福祉員という）は、労働省婦人少年局が中小企業団体に対し、選任をすすめているもので、主として当該団体に加入している事業主に雇用されているおおむね２５才未満の勤労青少年に関し、余暇の有効活用、職場適応の促進、労働条件の改善等に関する活動を行うことになっているものである。

福祉員は2,２２３団体で3,３８９人が選任されているが（昭和５２年８月現在）以下福祉員の奨励指導により行われているボランティア活動について２つの事例を紹介したい。

(1) 特技を活かしたボランティア活動の事例

Ｔ県理容環境衛生同業組合Ｋ地区連絡協議会の福祉員が、団体傘下の勤労青少年に対しボランティア活動を勧奨した結果、ボランティアグループが育てられ次のような活動が行われている。

イ　精薄児施設に対するボランティア活動

昭和３６年に上記団体に福祉員１名が選任された。福祉員は活動の柱に勤労青少年の余暇の善用としてボランティア活動をすすめることとした。たまたま精薄児施設M学園で園児を調髪に街へ連れていく際、園児がいやがるなどで保母がいろいろ苦労していることを耳にしたため、調髪奉仕を学園に申し入れ、理容・美容生の習練教育のための学習を兼ねたボランティア活動を開始することとしたのである。

当時、園児は８０名位であり、理容・美容生は合せて３５名であった。活動は毎月１回月曜日の休日に学園に行き、午前９時から１時間程度園児の調髪作業を行い、続いて国家試験の科目について２時間学習を行い、さらに１時間を園児とスポーツやコーラスなどで交流の時をもつことにしたのである。昭和４６年頃まで、この活動は続いたが、その頃になると理容・美容生になるものが減少し、M学園の奉仕活動も中止せざるを得ない状態に至った。この時に福祉員は、理容・美容関係の勤労青少年にボランティア参加を呼びかけ、それによりグループ「奉仕会」が誕生したのである。一方地区理容組合長からもM学園に対する奉仕活動に協力するとの申出があり、以後「奉仕会」と「理容組合の奉仕協力会」の共同により奉仕活動が絶えることなく続けられている。

現在、「奉仕会」のメンバーは８名（理容６、美容２）で「奉仕協力会」のメンバーをあわせて６０名位が園児１２０名の調髪を毎月第２月曜日の休日に、午前９時から１１時５０分まで行うこととしている。

M学園には、当初に、理容、美容生が小遣を出し合って揃えた理容用具の一部が今も残っており、それを懐かしむボランティアもいる。

メンバーの1人は、団体の機関紙に「理容奉仕を通して」と題して、次のように活動のもようを書いている。

今日は月曜日だ。月1回M学園に行く日だ。仕事が忙がしかった昨日はエネルギーを使いはたしてしまったので、疲れが残っている。学園の子供の姿が目に浮ぶ。朝食をすませ従業員と共に車で学園に向う。学園に着くと子供達が笑顔で車の回りに集まってくる。みんな見なれた顔だ。奉仕をはじめてもう10年近くになる。はじめの頃はインターン生など技術者のほうが多かったが、年々インターン生が少なくなり、5・6人で120人近くの頭を刈り、声も出ないほどくたくたになったこともある。店と違って仕事もやりずらい。子供はよく動く。バリカンや鋏で少しでも皮ふに触れると声をあげて泣き出したり、床をはい回る子供もいる。先生に子供を手足をおさえてもらう。子供も技術者も先生方も汗びっしょりになる。

また、こんな事もあった。かみそりで顔を剃っていたら子供が飛び上った。「やった」全身の力がぬける。しかし切れていなかった。もう何もする力が残っていない程疲れた。

しかし、楽しいこともある。朝早目に学園につくと子供達がやっている野球の仲間に入れてもらう。力いっぱいバットを握った。空っぶりだ。子供が声をたてて笑う。今日も来てよかったとしみじみ思う。私の家には、学園の子供達みんなが力を合せて贈ってくれた壁かけがある。子供達が懸命にとりくんだ作品だ大切にしよう。運動会の招待状ももらったことがある。これからもできる限り学園に行き、子供達と仲よくやってゆきたい。

ロ　寝たきり老人に対するボランティア活動

昭和50年4月福祉員は町のホームヘルパーに調髪の方法等について指導して欲しいと依頼されたが、その折に寝たきり老人の実態を知ることとなり、会員に対し整髪ボランティアを呼びかけたところこれに4名（うち勤労青少年2名）の応募があり「フキノトウ会」が誕生した。グループは町の福祉係に寝たきり老人の調髪奉仕を申し入れ活動を開始したのである。現在対象の老人は11名で、町のホームヘルパーに同行して、その家を訪問し整髪作業をして回ることになっているが、整髪の傍かに歩行訓練の手助けをしたり、話し相手になったり、整髪日以外でも附近を通った時は老人に声をかけるようにして、孤独な老人をなぐさめている。

以上、二つの事例を紹介したが、福祉員は活動をすすめるにあたっては、①勤労青少年の自発性を育て、おしつけにならないこと。

このためには先輩が率先して活動し、若者に共感を得るよう努めること、②活動がスムースにいくよう受け入れ側との連絡や打合せをよく行っておくことが大切であるとしている。

また勤労青少年がボランティア活動に参加したことによる効果としては、①職場の上司や同僚との人間関係が円滑になり、希望や意見も積極的に出されるようになったこと。②隣人に対する思いやりと感謝の心が養われたことを挙げ福祉員活動にとっては、勤労青少年に対するボランティア活動の推進は意義あることであり、社会的使命でもあると感じているとしている。

(2) ボランティア友の会によるコミュニティづくりの事例

I県I市商工会の福祉員が市内の青少年リーダーに対し助言・指導を行った結果、ボランティアグループが育ち、次のような活動が行われている。

昭和47年3月にH市の青少年リーダー研修会で、「自分達の今やりたいこと」というテーマでの数人の若者の話し合いに福祉員の立場で助言者として出席した時のことであった。

「自分の目の前に落ちている紙屑を、何のこだわりもなく自然に拾えるような生活をしたい」「社会のためになることをしたい」「社会のためになるといっても、あくまでも自分のために活動するのであり、決して人のためにやるのではない」「しかし何かすることで、まわりに何かが生れることを期待もしたい」等々意見が出されたが、当日の話し合いがきっかけとなり、ボランティア仲間づくりが芽生えて、その年の10月、ボランティア友の会が結成の運びとなったのである。当時、話し合いの場にのぞみ助言した（福祉員）が機関誌第1号に、こんな投稿を寄せている。

去る3月、リーダー研修の折各グループの分科会が持たれたが、どのグループにも入っていない若者も少数集っていた。私は、どんな考えで、どんな若者たちが集っているだろうかと、興味を持って話し合いの仲間となったのだった。ボランティア活動について話がはずみ、「あせらずに少し時間をかけても、活動することの目的を十分認識しあい、会員同志の親睦を深めながら、学習も積み重ね、真の目的を体得してから結成にもって行こう。」との結論が出た。とかく今まで、ボランティア活動をしている他の団体から、「活動といえば、どこかの清掃か、慰問か、献血するだけ、自分の身をけづっている活動」と、目的を持たず、ただ一時のカッコよさ？のみから活動に入った人達の声を聞いたこともあった私にとっては、足もとをしっかり固めようとした話し合いの結果を好もしく聞いたのだった。

そして現在、会合のあとの後仕末、ロータリーの美化活動など、地味な活動の中から、仲間も追々と増え、着々と目標通りあゆみ始めているのを見て、力強さを感じております。「現代の若者は、友達と言っても競争相手であり、遊び相手であっても手をつなぎ相助け合う真の友達とはなっていない」とも言われております。このような状態からは、奉仕や協力による仲間づくりは、なかなか期待されるものでもありません。また産業の発達、経済の成長と変化のはげしい毎日の生活の中からは、社会への関心も自己中心の利益の中に組み込み、他人のため、まわりの人のため、と思う人は少くなって来ております。

そういう意味からしても、ボランティア友の会の結成は深い意義のあるものと思います。犠牲と、奉仕とを混同することなく仲間と親しく交わり、欠点を補いあい、助け合って活

動して行く中から人間として、社会人として育って行くと思います。友の会1人1人が、まず自分のまわりから、日常の行動の中から輪を広げて行こうではありませんか、と結んでいる。

しかし、年月の経つにしたがって、グループ員の新陳代謝による目的の理解度の問題、行事の行き詰まり、仕事との両立等々悩みも数多く出て来たようである。

ある時期の機関誌より拾って見ると、

「停滞気味の中よりオアシスを見出すために」ということでメンバーの考えが書かれている。

◎私がサークルに入った動機を聞いてくださいね。私は毎日毎日が同じ事の繰返しで、なんとなく一日を過し、生活の張りがなかった。若いんだから、もっと楽しく過せたら…と思い何かを見つけたかった。H市の若い人がいろいろサークルを作って活動している事は知っていました。一年ほど前まで、自分の事さえ満足に出来ないのに人の為なんて出来る訳はないと思っていた。でも何故か、とにかく入ってやっています。

◎何か堅苦しい感じを持たれ、友達を誘っても、どういう事をするのか？と聞かれ、奉仕活動だと言うと逃げ腰だ。そして反対に、もの好きだと言われる。はた目には暇なことをしていると思われるらしい。暇があったら習い物の一つもすればいい、という友達もいる。でも他人に無理に解ってもらおうとは思わない。確かに習い物も大切だが……でも私はどちらも大切だから両立させて行く他はない。正直いってどちらも中途半ばみたいな気もするが……

◎何もしないでいる自分に罪の意識を感じ、入会、そして仲間の顔を見たらホッとするのです。

◎ボランティア友の会を知ったのは募金運動の時、こんなサークルもあるのだなーと思った。そして入会、今だにボランティアについて解らず、それについての資料さえ、あまり身近にあらず、あってもピタリとはこない。楽しい筈のサークルが重荷に感ずることもある。「仕事を犠牲にしたり、奉仕だと思って活動することは真の奉仕ではない。自分の余暇を利用して、ごく当り前だと思うことが大切である」こう書いていた人がいた。今の私は少し間違っているように思う。

◎ボランティアは奉仕活動だから何をして行くのか、と問われても私にはどう答えていいか解らない。奉仕という言葉にこだわって、何をすればいいのか解らない。でも今、人形劇を準備している。言葉にこだわって、なかなか思いつかなかったが、広い意味で考えて見ると、他にもいろいろとすることあるんじゃないかなー

こういう道をたどりながら余暇活動の在り方を彼等なりに体得して来た。人形を作りながら仲間づくりをし、その劇を発表することで、地域とのコミュニケーションを作りあげて行った。赤ずきんちゃんに始まり、現在はH市のおいたち、昔から語りつがれた地域の伝説など、古老の話語りをまとめ、台本を作り、老人達との対話の場を持ち、若ものと老人との輪を広げて行った。発表の場としては祭礼の広場、敬老会、文化祭、子供育友会等々である。3年前から心障者施設の母と子の集いのお手伝いも年中行事の1つとなって、その子供たちとの交通も始ま

っている。またボランティア友の会会員1人でも参加している会合では、終了後の会場は紙屑屑がら1本も残ってはいない。

「身近なところで、出来ることから」が実行されております。

H市の中央ロータリーの花壇づくりも発足以来続いてる事業の1つである。四季折々の花を咲かせ、道行く人達の目を楽しませてくれている。夏など出勤前に立寄って水やりをし、仕事帰りに雑草をとって行く。そして思いのままを花壇日誌にはしらせる。

7月7日、何故か知らぬが疲り、これから帰って朝飯二杯喰べるんだ。　A子

7月8日　晴天　死ぬような暑さ、P•M 2.30　ちょっと寄って見た。

7月16日　このところ、水まきを順調にさぼっています。この私、さすがに良心が大巾に痛みます。　P. M5〜5.30　A子 and C夫

7月19日　汗だくになってやりました。花も喜んでいました。暑い日が17日も続きました。でも花は生きています。空に向かって大きく息をしていました。横を通る人は笑顔でした。何故なら、花が人に向って、ほほえんだからです。朝夕、花たちは言いました（涙を流して）ボランティアの会の仲間よ、ありがとう。

7月24日　夏休みで職場に来たバイトに悩まされています。これから1ケ月余りつき合いをしなくては…と思ったら、あ〜あ、この苦しみ、暑い。暑い。

7月25日　おめでとうございます。やっと50ccの原付免許がとれました。自分でおめでとうなんて言うのは、オメデタイかな？

7月30日　お花に水をやっていたら、救急車が行きました。花さん、無事を祈りましょうね。

8月3日　今日こそはッと思ってやって来ました。水がやってありました。今日は例会ですよ、会いましょう。

こうした職場の悩み、喜び、日常生活の事など花日誌に書き残して、すれ違いの仲間同志の親睦を深めている。

ボランティア友の会会員は現在22名、青い小さな火であるが絶えることなく、燃えつづけるであろうし、またその火を求めて集う者もあろう。ボランティア活動の7年のあゆみをとおして、ボランティアの心を持った人の輪が広がることを念じている。

3. S県I市勤労青年ホームにおける活動

勤労青少年ホームにおけるボランティア活動については、第3章にその調査結果を述べたが、以下、具体的事例として、S県I市ホームの場合を紹介しよう。

勤労青少年ホームのクラブ活動の状況を眺めてみると、趣味を同じくする同好会的なグループが非常に多い。これは、当施設に限らず、全国勤労青少年ホームのクラブに共通する一般的な傾向でもあろう。

この同好会的な体質のクラブであれ、そこに参加する青少年には共通した夢がある。自分たちの集団の存在を、広く社会に示したいという欲求や関心を持っているはずである。音楽や舞踊の

クラブが発表会を企画し、カメラや絵画や生花のクラブが展示会を開催するなどは、その一例である。

これらの興味や欲求や関心を、どのように方向づけるかが、館側の助言であり、指導であり、育成につながる大きな課題だといえよう。

どんな仲良しクラブ的な小グループでも、想像を越える逞しいエネルギーを内蔵している。それが大きな力を発揮して、社会的役割を果たすことも多い。青少年グループは、このような特質があると思う。

当ホームは、独自性を生かし、積極的な社会参加のできるグループづくりと取り組んできた。したがって、館主催による全体行事は全くないし、クラブ代表者でつくっている連絡会も、連絡の域を出ていない。若者は「自分たちのクラブ活動に最善をつくす」のみである。リーダーは経験年数の少ない２２歳前後が主流であり、「有能な青年はメンバーの１人として、つねにリーダーを支えよ」というのが当ホームの願いである。この優秀なメンバーが多いクラブほど、すばらしい活動を展開するものである。

多くの勤労青少年ホームでは、リーダー研修をすすめ、幹部養成に努力されておられるが、当ホームではリーダー養成は全くやらない。そのためメンバーを引っ張る指導性をもったリーダーも存在しない。秀れたメンバーづくりが現在の課題だといえよう。

８年前に１人の女性が訪れ「私は高校で点字をやっていた。それでクラブをつくりたいが、点字をやっていた。それでクラブをつくりたいが、点字に興味をもつ同好者は少ないように思う。そこで１人でまず始め、共鳴者があったら力を合わせて点訳をすすめたい。１人のクラブでも認めてほしい」との相談があった。１人の点訳クラブはスタートしたが、３カ月を過ぎても仲間は増えない。たまたま、この女性の願いが新聞報道されたため、５カ月を経て３名となった。その後は仲間も次第に集まり、今日では社会的な評価をいただくグループに成長した。

主な活動は行政広報紙の定期的な点訳をはじめ、列車時刻表・料理メモ・歌集・郷土の民話などの点訳・点字講習会や盲人の方を囲む懇談会などで、巾広い活動を続けている。

盲人との懇談会の席で「途中から盲人になった私は点字が読めない。今ではカセット録音が普及している。これにお知らせや話題を録音して下さると有難い」との要望があった。

「Ｉカセット放送局」は昭和４８年に結成されたが、それは、こうした声に５人の若者が答えたものである。この若者は、春夏秋冬の移り変わりを耳から聴いてもらおうと、祭りの笛や太鼓・虫のなき声・波の音・そして音楽祭や卒業式の模様など、日常の暮しの変化に応じた話題を編集しながらの録音づくりを続けている。

また「手話サークル・トンボ」は、ホームにやってきた耳と口の不自由な一女性と、その友達によって生まれたグループで、昭和５１年に結成されている。

これらのクラブは、社会奉仕的な要素が強いため、地域社会の大人達から高い評価を受けているが、参加している若者には、そのような気負いは全くない。明るく楽しく余暇を活用しており、他のスポーツグループや文化グループと同じである。ボランティア・グループとしての特別扱いはないし、当然ながら経済的援助もしていない。しかし、地域社会からの激励や感謝は、つねにこ

れらのグループに寄せられ、お菓子や果物が一市民の名で届けられたり、電器店からカセットテープの差し入れがあったり、なかには青年の録音したテープをバイクで配達する労働奉仕者まで現われている。

オレンジポップスオーケストラ・日本舞踊チーム・フレッシュメンジャズオーケストラ・ブルースカイ魔法団は、全国のホームでも見られる芸能グループで、昭和５１年にこれらグループで、昭和５１年にこれら４グループの８０名が芸能集団を編成し、フィリピンに飛んで日比友好親善の大交歓会を成功させた。この派遣団は現地で熱狂的な歓待を受けたが、それも訪問国を正しく理解した青年の行為が、素直に評価された結果であろう。

青年が練りあげた計画の要点を記すと、①日本人観光団のコースには乗せないし、両国のエージェントにも主導権を渡さない。②訪問する都市の奉仕団体にシャツ・スカートなどの古衣類約３００点を持参する。③訪問する小学校には児童画１００点・ボールペン３千本・色紙３千枚・草花のタネ３千点をプレゼントする。④芸能公演は訪問地の人々との相互出演とし、司会も現地人に依頼する。⑤派遣団は訪問国の航空機で入国、滞在中は主催者の指示に従い独自の行動はしない。⑥訪問国の民族音楽を１０曲以上演奏する。⑦訪問地の人々に日本の御飯を試食していただくため６０キロの米を持参する。⑧主催団体に一切の経済的負担をかけない。以上の骨子についてフィリピン側は理解と厚志を示し、ケソンライオンズクラブ会長・オーロラ小学校長・ダクバン市長から、公式の招待状をいただく。１年有余にわたる調査と接渉の結果である。

フィリピン側では、次のような内容の文書が関係方面に配布され、現地の新聞も同様の記事を報じた。「フィリピンの民衆に奉仕する日本青年の音楽使節が来る。関係団体は最高の歓迎を示せ…」

とくにダクバン市では、学校や官庁は休日となり、市民は日の丸の小旗を振って沿道を埋める。別れにのぞみ全団員に栄誉の楯がダクバン市長から贈られた。総経費は８５０万円、全額を団員が積み立てして出し合い、いずこからも経済的援助を受けていない。

派遣団の若者は、どこの青少年ホーム内でも活動している平凡な芸能グループであって、特別の集団ではない。ただ「青春の日に残る感動のドラマがほしい」という要望に答え、フィリピンとの接渉をホームが担当したに過ぎない。青年は知恵を出し合い、協力しあい、発展途上国であるフィリピンへの理解を積み重ねた。

自分の、そして集団の利益しか考えない海外派遣団の多いこの頃、素朴な勤労青年の思いやりの心が、かえって新鮮に受けとられたのであろうか。相手を理解することの大切さを、この若者は肌で感じとってくれた。

原点に「思いやりの心」を持たない青少年活動は、いかに立派な目標をかかげようとも、社会の理解と信頼は得られないであろう。

昭和５２年には、訪問国を韓国に求めてオレンジポップスオーケストラの２５名が海を渡った。これは韓国ＹＭＣＡの招待によりソウル・大田・光州の三都市を訪問した。現地に掲示されたポスターには「日本青年のオレンジポップスオーケストラ来る。これは韓国の貧しい人たちを救う慈善コンサートである…」と記されていた。

韓国でも派遣団は非常に温かな歓待を受けている。バンドの演奏した「アリラン」「トラジ」の民謡は、いずれの会場も日韓友好の大合唱の渦をつくった。バンドの若者に韓国での印象を聞くと、全員から「韓国人のすばらしいマナー」に感動したという答えが返えった。日本からの韓国ツアーは、おびただしい数にのぼる。しかし、その人たちと派遣団の若者の間には、同じ韓国を訪問しながら、共通の感動は全く見出せない。

韓国の慈善コンサートに自費で出演する日本の若者に対し、韓国民は美しいマナーと感謝の気持をこめて歓迎した。その思いやりの心に、若者は感動を覚えたのである。

当ホームのクラブでは、このほかハムクラブが防災活動と積極的に取り組んでいる。災害時にはその真価が問われよう。若い根っこの会は、街路の清掃や福祉施設の慰問、文化財保護など、ハイキングクラブやユースの会も、海や山の清掃、標識の整備をすすめるなど、多くのクラブが余暇善用の楽しみの中に、社会性豊かなプログラムを加わえている。

また、フィリピンの集中豪雨による災害の救援運動の時は、あらゆるグループが参加して、音楽とライトが流れ輝く募金風景を駅前に飾った。そのため、これは市民運動に広がり、全市域から１００万余円の募金と、衣類数百箱が集まり日赤を通じてダクバン市に送られた。

勤労青少年ホームを「憩の場」とか「オアシス」とか呼ぶことが多いが、私はホームをそのような消極的な施設として、とらえたくはない。豊かな社会性をもった勤労青少年の逞しい活動の拠点でありたい。この拠点から多くの勤労青少年が、その地域社会に飛び出し、その存在を示すことこそ大切だと思う。

その地域の社会構造の中で、勤労青少年ホームが、どのように位置づけられるかは、その施設の活動の実体により、大きく左右されるものであることを施設側としては十分に認識すべきことである。

当市では昭和５３年度に１５０万円をかけて、カセットの録音テープを多量に復製できる装置が導入される。これは、目の不自由な人たちのために活躍する「点訳クラブ」「Ｉカセット放送」の要望に、行政が答えたもので、青少年ホームにとっても、すばらしい成果である。

4. 青少年団体における活動

青少年団体におけるボランティア活動の事例として、ガール・スカウトの場合を次に紹介しよう。

ガール・スカウトは同じ年頃の少女がグループをつくり、グループ活動の中で楽しみながら、実生活に役立つ技術を身につけた人に役立つ婦人になる訓練をすることを目的とする団体である。

Ｍは銀行に勤務して６年目に入ろうとしている。行員１００名弱で半数以上が女子。勤務する支店は事務社街とでもいうような所にある。勤務時間は平日は９時～１７時、土曜日は９時～14時、日曜以外の週休は月２回あるので、彼女はそのうちの１日は土曜日、他は週日のうちの何曜日かにしている。土曜日に週休をとって日曜と連休になるところは旅行などに使っている。

家庭は、母、高校生の妹と自分の３人暮らし。三姉妹だがすぐ下の妹は結婚している。

高校から私立の短期大学に進学したが、在学中に父を亡くした。現在は母と自分が職業をもっている。自宅からの通勤である。

職場では、女子リーダーといって新入社員にマナーやエチケットを研修する役割を与えられており、女子社員のだれかれと話す機会も多いことから一緒に何かしましょうとさそって社内にスポーツのグループを作って育て上げた経験もある。仕事をしていく上で女子ならではと自ら思う面もあり、今の仕事は自分にあっていると思い、まじめに楽しく勤務している。できるだけ勤め続けたいと考えている。

このような職場生活を送っている彼女は余暇をガール・スカウトのリーダーとしての活動に使うことが多い。ガール・スカウト運動に参加している少女たちは、年令によって内部での部門が分かれており、小1～小3、小4～小6、中学生、高校生及び同年代の少女の4つであるが、彼女は高校生及び同年代の少女たちのグループ（レンジャー部門という）を指導している。その他に毎朝6時から出勤前の時間に近所の子ども会の小学校3，4，5年生をあつめてドッジボールのコーチをしている。以前にたのまれて1度コーチをした子どもたちが、その後もひき続いてみてほしいと早朝自宅まで迎えにきてしまったので続けるようになったのである。

勤務を終えて帰宅してからの時間のうち、週に2度くらい1時間前後を使ってガールスカウトの集会のプログラムを考えたり、必要な人々へ電話連絡をしたりする。レンジャーの集会は月に2度、土曜日の午後2～3時間であるが少女たちに豊かなプログラムを与えようとすると準備の時間は集会に使う時間と同じ以上に必要である。彼女は団（ガールスカウトでは少女たちの活動の単位となるグループをこう呼ぶ）のリーダーとしての立場の他に東京の中で9つに分かれている地区の1つで、その地区に属している団のリーダーが集まって連絡、研修の機関としているリーダースクラブのクラブ長という立場がある。このクラブは月に1度、夜、開催されるのでそのための連絡、事務、研修内容の準備なども必要である。忙しく過していることは一向気にならず、ガールスカウトの一員としての活動は絶対やめたくないと思っている。仕事は出来るだけ長く続けたいが結婚もしたい。その場合、家庭と仕事は両立出来ないと思っている。何故なら、家庭と仕事を両立させるか、家庭に入ってボランティアとしてガールスカウト活動を続けるかのどちらかを選ぶといえば後者を選びたいと考えている。彼女の生活全体を試みに分けてみると仕事40％、ガールスカウト活動40％、その他20％といった感じである。

ガールスカウト運動に参加したきっかけは、幼稚園から小学校にかけての友だちから誘われたことで、行ってみておもしろくなかったら帰ってくるつもりで気軽についていった。行ってみると、新入団員としての彼女を迎えるために、みんながうたってくれた歌の中にちゃんと自分の名前がうたい込まれていたことに感激してずっと行くことに決めたのだった。以後は毎週集会が始まる1時間も前にいってまっていた。途中で家が移転したために片道1時間半かゝるようになったことがあったが殆んど欠席せずに通った。

ガールスカウト運動は1人1人の少女が現在及び成長して婦人となって、その置かれた立場でそれぞれが幸せな生涯を送って欲しいという願いのもとに少女たちに訓練のプログラムを与えているものである。自分の幸せは他の人を幸せにしてあげることから得られるという信念から「ひ

とに役立つ者になるために」が日常の活動のめあてとしている。

レンジャー部門では、ガールスカウト運動についての基礎知識を再学習（それまでの部門で習ってきている）をしたり、制定されている課題にしたがって、幼児施設、老人施設、病院などを訪問して見学をしたり、関係者から講義を受けたり、自分たちにできる仕事を一定期間奉仕したりする。また、環境問題、食糧問題など自分たちの生活にかかわる社会問題について調べたり、ディスカッションをしたりする。ゲーム、うたを楽しんだり、野外料理、自然観察をしたりすることも重要なプログラムである。これらの日常活動が集約されて総復習となるのがキャンピングである。リーダーになるということは、このようないろいろな種類の少女たちの活動のために企画を手伝ったり、訪問先との交渉に立ちあったり、付き添っていったり、野外活動の技術を伝授したりと多岐に亘る活動をすることになる。そして自分が責任をもっている少女たちの1人1人をよく知って、それぞれが努力して規定にそった活動を修了したかどうかを認めるのも役目である。

Mが勤務を終えてからする準備や連絡はこれらのプログラムに関係しており、月に2度の集会への参加はその実施なのである。この活動を彼女はとても楽しんでやっている。

このような生活を通して、彼女がガールスカウト運動に参加していることの意義と思っているのは自分の中に「人にゆずる気持」が育って働いているということである。他人がゆずってくれた時にとてもうれしく思い、そのことを別の他の人に返えす、こういう気持と実行の習慣を与えてくれたのは、ガールスカウト活動だったと思っている。みんなで手をつないで円を作った時、はみだしている人がいたら、円のどこかをはずしてその人を入れてあげるのがガールスカウトだと彼女は考えている。このような気持がもとになって、職場でも仕事をみんなでやっていこうと思うことができる。職場で女子リーダーをつとめることができるのは、このおかげだといっている。

彼女は、仕事が終わるとさっと帰宅する。同僚の中に残業をしている人がいると、その人を持っている人がいる。帰宅途中のわずかな時間、お茶を一緒にのむためである。それを見ると、人間はさびしがりやで、だれかと一緒にいたい、何かグループに入りたいと思うものなのだなと考える。1人で先に帰ると孤独感、疎外感を感じるようだ。このような観察が職場の中でサークルを作ろうとよびかけるっかけとなった。彼女は職場内だけではなく、自分が楽しく参加しているガールスーカウトのリーダーとしての活動に同僚もさそいたい、皆にもたのしい思いをしてもらいたいと思う。ただこの活動は、バレーボールとちがって幾人かの少女たちを指導するという人間相手の責い活動であるので責任感は人に強いることができないのむずかしいと思っている。

第５章　諸外国における青(少)年のボランティア活動

1.　世界的動向

今日の世界各国にみられる青年のボランティア活動の発展の契機となったのは、第一次大戦中から戦後にかけてといえよう。哲学者W・ジェームスはこの大戦を「道徳の戦争（A Moral equivalent of war)」と称したといわれる。このことからでもわかるように急激な発展、そして青年層のボランティア活動への参加の著しい増加現象が目立ったのである。それと同時に組織化の傾向がみられ世界的な組織化にまで及んでいる。

ここにいうボランティア活動とは、ジェームスが称した趣旨、すなわち社会的な活動（職業外の）に参加し、自発的奉仕活動にもとずいてある種の人間の生活の実質、人間の生活存在そのものにとって、脅威となる事に対しては挑戦していく活動をさしている。それは、若いエネルギーに充ちた行動そのものであり、視野を広くもって行われる事の必要性をも強調しているものである。その考え方による青年の奉仕活動組織は第一次世界大戦における近代兵器を用いた結果の悲惨さと戦後の窮迫した事態のショックを人類の多くが体験したからであるといえる。

(1)　歴史的ながれから

１９１９年ブルガリアが、まず最初に青年の労働部隊（brigades）を創設した。

１９２０年最初の国際奉仕活動ワーク・キャンプがヴェルダンの戦場になった村の建設（再建）のために結成されたのが契機となり各国に国際的つながりをもちつゝ大学生、勤労青少年の組織化がはかられている。

１９３４年、ヨーロッパ各国から長期のボランティアチームがインドにおもむき、生活改善のための諸種の活動を行っている。これも現在続けられており、東南アジア諸国に活動の拡がりをみせている。

第二次大戦後に青年たちのボランティアは東、西ヨーロッパの再建に大きな力と重要な役割を演じてきたのである。

１９５０年代に入っては、夏期のワークキャンプに参加するヨーロッパや北米の青年たちの数は著しく増加し、活動の場をアジア、アフリカ、ラテン・アメリカに拡大し、開発展途上国においてとりあげられるようになってきた。とくに新たな勤労青年、教職者の若い資格者を、未発展地域へ送る計画が、多くとりあげられるようになってきたのである。

１９６０年代は、「青年による奉仕」の１０年であったといえる。全世界的にも政治が青年の自発的参加による活動を援助しはじめた時代でもあり、良悪の批判もみられるようになってきている。一部の批判者の中には、１９７０年代には、青年たちと権力者との間の関係は激化し１９５０年代～６０年代にかけてボランティア活動に参加した経験の青年が社会に反抗するのではないかとの見方もある。

しかしそれらをよそに英国の青年奉仕活動計画は１９６４～１９６８年間に海外派遣ボランティアの数を２倍に増加させ１９６０年代後半に機能を停止した奉仕機関の数だけ、タイプの異なる新しい計画の機関も誕生したといわれる。

１９６８年１２月自発的奉仕（Voluntary Service）についての世界会議において国連食糧農業機関の事務局長（飢餓からの解放キャンペーン）C・ウェイン氏は「国連の第２次開発の１０年へ青年層の参加の明白な表明は、自発的な奉仕活動を通してであろう」と予想をのべたと伝えられる。おそらく「１９７０年代は開発に向けられた自発的奉仕を通しての青年の社会的参加の拡大の１０年になるか、さもなければ青年の社会拒否の１０年になると思われる」とも云われている。

同年同期にCCIVS（Coordinating Committee for International Volunteer Service）が主催して開いた第１６回ボランティア奉仕活動世界大会で満場一致採択された「ボランティア奉仕活動国際憲章」（Universal Charter of Volunteer Service）に示されている定義は奉仕活動の多様性及び力動性が考えられている現在一応の規準となろう、ここにそれを紹介しておきたいと思う。

「ボランティアとは、金銭的な利益に関心なく、自分のしている仕事（一時）を捨って共通の努力の枠内で、自らの知識・能力を社会的、経済的な不足の地域の人々のため捧げる人々である」

ここに「自分のしている仕事を捨てて」とあることは、国際的な場を前提にしての長期的活動を意味しているといえよう。そしてこの定義にもとずき、五つのタイプの奉仕活動方式が考えられている。

(2) ボランティア活動のタイプと現状

① ワークキャンプ方式 ② 他国へのボランティア派遣方式 ③ 国内エリート奉仕活動方式 ④ 奉仕活動と教育との組合せ方式 ⑤ 随時奉仕活動方式である。それぞれ特色をもつ活動推進のための機関を設けてきている。いずれにしても青年にとっては労働を必らず伴なう活動が多い。

ある国（ソ連及び東欧諸国）では「ボランティア・ブリゲード」の名で知られている①のワークキャンプは、１０人から１００人ぐらいのボランティア・グループから構成されて、各地からの青年、異国の青年もその中に２０～３０名参加する。経費も自弁であり、肉体労働をし、キャンプの開かれた地域社会との交流を深めることもその目的の一つである。その地域の建設のために力をつくし、類似のプロジェクトがあればそれに奉仕活動するといった状況である。わが国の日本青年奉仕協会の奉仕活動は、これに類する奉仕団体であるといえよう。

活動の期間は、数日から数ケ月にわたるものが多く、その後は、他のプロジェクトに移動していくというように世界中の何れの国においてもなされる活動である。この活動は通常宿舎と食物以上の報酬を受けることはないが場合によっては旅費と小額の小遣を支給されることもある。

②の海外派遣ボランティア（International longterm or cooperation Volunteer）は、普通個人で活動する。仲間のボランティアとチームで活動することもある。一般に先進工業国（ヨーロッパの国のほとんど、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、日本）から派遣される。このタイプのボランティアは広範な分野での中位の技術（例えば、手術、看

溝、建築、配管など）をもっており、受入れ国においては既存の開発行政機構又は計画のなかで活動をする。活動期間は9ケ月～2ケ年まで、その後は更新もできる。この種のボランティアは開発途上国なら何れでも活動する。これには多少の報酬が用意されることがあるが、自分の母国での専門的な職について働らく場合の収入よりも少額である。

③の国内エリート奉仕活動員は、教育部隊（Education corpsman）、中期ボランティア（Mnedium-term）あるいは地域社会奉仕活動員（community Serviceman）ともいわれ、ひとりで働らく事もあれば、小グループで活動することもある。国民全体のうちで比較的恵まれた階層から参加する。これらのボランティアも中程度での技術及び才能をもっている事が条件で、既存の計画または行政のもとで奉仕活動をする。

④の奉仕活動と教育の組合せ方式は、大きなチームによって活動するもので、この種の計画への参加が青年は、低開発地域の中でも教育を十分受けなかった階層からである。メンバーは農業、工業、公共事業、第三次産業部門で、その活動を通して職を身につける意味が大きい。すなわち自分自身の為になる活動に1～2ケ年間活動をする。この活動は母国内での奉仕活動が原則で、活動が終るときにいくらかの積立てられていた報酬が得られる。活動期間中に基礎的な一般教育を受けることにより学習が身につくしくみになっている。

最後の随時奉仕活動方式は、今まであげてきた4方式を広汎かつ、いろいろの組合せでするのが特色で、既存の青年団体や学生団体のメンバーである事が多い。随時必要に応じてある機関が呼びかけたり、積極的に青年たちの組織でニードを開拓したりして国内、外で、行われる活動で、年間計画としての定期的なプログラムでない事がその特徴といえよう。

ちなみに世界的なボランティア機関の主なものを紹介しておこう。

① International Builder Conpanions（国際建築者連盟）

② World Council of churches
③ World Federation of Democrat Youth（世界民主青年連合）
④ World Assembly of Youth（世界青年会議）
⑤ Internatinal Student Conference（国際学生協議会）
} 随時のボランティアサービス機関

⑥ The European working Group（ヨーロッパ・ワーキンググループ）

⑦ The European peace Corps（ヨーロッパ平和部隊）

⑧ Internatioral Action Corps（国際行動部隊）

⑨ The United Nations Association of Great Brtain and Nrthern Ireland（英国、国連々盟）

⑩ Gren fell Volunteers（グレンフルーボランティアズ）

⑪ Volunteers in Asia Incorporated＝VIA）

⑫ Tha International Voluntary Services, Incorporated）

⑬ The American Peace Corps（アメリカ平和部隊）

この外にまだ多くのプロジェクトがあるがいずれにしても、世界各地の多様な状況に対応する勤労青年のボランティア活動は、「どんな地域」に「どんな技術」をもって活動するかとい

う技術的な職業を生かしての活動に焦点がしぼられているといってよい。たとえば、ケニアのキスム州で農業技術をもって活動している事例をはじめ、教師という立場で、あるいは保健衛生、医師、工業技術、建築技術などをもって、発展途上国で行われるサービスが多い。また前述したような、世界の各種機構や、派遣する国の政府の資金の導入がなされ、期間も6ケ～2ケ年に及ぶ長期のものが多い。したがって職場の理解をえて休職するか職場がその国の政府へ協力して派遣するか、あるいは、一旦職場を退職してボランティア活動に参加するという型のものである。

(3) ボランティア活動参加者への影響

「われわれが道路を造る間、道路はわれわれを造る」というユーゴースラビアのボランティア部隊のスローガンは、ボランティアサービスの社会への貢献とそのボランティア自身を物語っているといえよう いずれの青年も活動に参加したことによって他人について、他国についての知識をひろめ、生活態度、価値観、行為などに影響を与えるものである。

あるカナダの青年は、カナダ人の奉仕の夏」のプログラムに参加した後に「私はすっかり人間が変った」と宣言していた。多かれ少かれ何らかの人間的成長を体験している事は確かな事実である。「青年によるサービスの新しい傾向」のなかに次のような言葉がある。「奉仕作業が終了したときに、必らずしも以前より良い人間とはいえないまでも、自分自身についてよりよく知る人間になる」ーイギリスの地域サービスボランティアー、「私は生まれて初めて自分がこの世の中に住む人間であること、この世界に生きていることに責任のある事を感じた」ーカナダ奉仕の夏に参加したボランティアー、「重要なニードに対して、それを充たす手助けの出来るような状態におかれることはすばらしいことである。人生が突如として意味深いものになったような気になる」ー世界YWCAボランティア（レバノン）等々、参加した青年ボランティアには大きな意味をもち、活動中のつらさを克服できる何ものかの力を得ている。アメリカの社会学者D・リーマン（Darid Reisman）は、アメリカ平和部隊の隊員に関して「外国にいることで隊員たちは以前自分がもっていた自己の力についての概念にこだわらなくなった」ことを指摘している。そして平和部隊のボランティアの評価によれば、「帰国したボランティアたちは、過去をふりかえって、何かを『与えた』『与える』道を見つけられるだろうということに期待をかけている」ことがわかる。（このような国際ボランティア活動の経験は、ボランティアの職業生活計画に深い影響を与え、学習意欲をもって職場生活の雰囲気を変える力を発揮した例がある。平和部隊などの国際的経験を生かして広い視野にたっての国際的仕事に望みをかける者の増加をみている。この現象を要約して、「ボランティア・サービスは、今日ますます強まる青春期の性急さと、ますます高まる成年期の複雑さとの間に橋わたしをするものである」と述べている関係者がある。

(4) 勤労青年ボランティア活動推進機関の役割

以上のようにサービスの社会への貢献と青年に対する影響をキャッチする推進機関の役割は今後ますます必要となろう。世界の総体としての課題をみきわめつゝ、ニードにそくした活動内容、一方ではボランティアの組織化をはかることが大切である。「サービスの為のサービス」

から「何かを達成する」ことを目ざしたボランティア活動へと移りかわっている事もふまえ、推進機関の機構上の柔軟性が要求されるのである。一方では各国の政府機関や民間機関の連携をいかにはかっていくかも大きな問題となろう。また世界的な視野にたってのボランティアサービス計画にも青年の参加を得ていく傾向も出てきている。

職業をもった青年の場合は、技術者尊重の派遣機関では、ボランティアの現地での生活水準を考え、通常準専門家としての取扱いをしている事が多いようである。

「１９６０年代から現在に至るボランティア・サービスの為の推進機関は、現実的かつ想像的なサービスという線にそって、かなりの成功をおさめてきたといえる。しかし６０年代後半になって派遣型サービス機関には、それぞれのアプローチについて人道主義派と技術主義派の間で系列化が進んできた。この動きは、やがて他の型のボランティア・サービスの分野でもさし迫ってきた問題のようである。この系列化のサービスは二極化するおそれがあり、このことが１９７０年代の社会にサービスする青年ボランティアの活動の質と量を決定していくであろう」と「青年によるサービスの新しい傾向」青少年育成のために第３集（中央青少年団体連絡（協））に述べられている。たしかにこの事実は、７０年代から８０年代半ばにかけての世界的青年ボランティアの課題であると同時に、それぞれの国での、とくに勤労青年ボランティア活動のあり方についての転換をみるべき時に至っているのではないかと考えさせる。

2. 諸国の（勤労）青年ボランティア組織の状況
― とくに全国組織を中心として ―

（「世界のボランティア」A.Dicson & A.T.Ariya TNE 著の中から）

(1) ヨーロッパ諸国

大きな組織をもつのは英国で全国的組織は６団体、機関で、そのうち情報提供及びボランティアの拠点、研究調査などを主としている機関が１ケ所で地方の地域開発活動を主とする機関は２ケ所、大学学生の組織でそれを起点としてJob. Creation プログラムをもって卒業者で仕事のない人の為の活動も行っている機関が１ケ所あり、ユニークな活動の展開がなされている。また主として青年のボランティア間の連絡調整を行ない行動計画の中心となっているセンター的機能を果している機関もある。ちなみに名称を紹介してみると、

① Yorng Volunteer Resources Unt. National Youth Bureau

② Voluntary Service Overseas

③ Tha Volunteer Center

④ Ex-Volunteers International (E.V.I)

⑤ Community Service Volunteers

⑥ ACORD

などである。その他に地方的には大小さまざまの組織をもっておりボランティアたちの相互交流をもちつゝ、地域社会を舞台とした活動展開が多くみうけられるようである。たとえば、農業地区、林業地区などの公共事業への参加、保健衛生サービスや訪問サービスである。勤労青

年の場合は、やはり技術的な場面での活動が目立っているようである。

西ドイツでは、Welt friedensdienst は政府の援助をうけている機関ではあるが、年間１０人の特別技術、とくに社会、技術開発に役立つ専門のボランティアの養成をしている。教育、農業、手工芸、衛生サービスなどであり１７年の組織歴をもっている。ワークキャンプ、社会福祉を中心として、青年（大学生、勤労青年）相互の連絡調整や友好をねらいとしているAktiongemeinschaft がある。その他２つの全国的組織をもつ機関があるが、すべて学生と勤労青年の混合プログラムが多い。

フランスでは３機関であり、それぞれ特徴をもっている大学からのボランティア派遣を主としているAssociation Pourle Volontariat a l'acte gratuit en Enrope、調査研究、情報提供を主としボランティア銀行の活動をしているCentre d'Etude et d'Information Sur la Volontariat と、地方、都市の地域開発を目的として、とくに勤労青年を対象に養成している組織歴２０年をもつAid a Toute Detresse－Science et Service がある。これらの組織の活動に参加する青年は、年間1,０００人～1,５００人とされているが、その指導者となれる人の養成は３５人を限度としている。

スイスでは農業技術を主とするワークキャンプ方式の活動が盛で、小グループによる編成で地域の要請に対応する活動をしている。キリスト教を背景とした機関であるInterteam Entwicklungs－Dienst durch Freirvilligen－Einsotg では、ボランティアの養成、派遣を主としておりそのボランティアの指導者養成を年間３５人している。その専門家ボランティアの活動内容は、さきに述べた農業が中心で、スラムにおけるソーシャルワーカーもその領域の主なものとなっている、あとの２ケ所の機関、組織はいずれも１２年～２８年の組織歴をもつもので、多くの勤労青年の参加者をもっている。

(2) 北アメリカ諸国

カナダでは５ケ所の機関、団体があり、そのすべてが、地域開発を中心とした活動であり、その中に教育とくに児童の夏期キャンプの活動も加えられている。Canada World Youth では、建設土木、畜産などにたずさわる青年たちに対し年間７５０人講習をし、各地に派遣している。Frontier College では、組織歴７７年に及び、児童のキャンプ指導者を中心に、僻地における成人教育をもふくめ、勤労青年の参加を中心に大学生なども加わって活動している。その中から、活動を通じて教育事業とくに社会教育の領域に職業をかえていく青年もみられるといわれる。勤労青年のこのような活動は、夏期休暇など長期の休暇をこれにあてている。

アメリカでは、さすがに実践の国といわれるように全国組織をもっているものは１４ケ所の機関や団体がある。そして活動内容も各機関毎にユニークな特色をもっている。とくに歴史的に古い（１００年）School of Public and International affairs Uuiversity of Pittsburgh では、大学生のボランティア派遣、大学卒業者の再教育、経済、社会に関する教育をし、とくに教育ボランティア、高度の衛生サービスを主とするボランティアの養成を行っている。いわば、地域社会開発のディベロッパーの養成をし、その指導のもとにまた青年ボランティアを組織して活動するといったものである。また青年たちによる資金活動（募金）を通して

ボランティアの開発をしている団体United Way Internationalなどもあり、その配分にその特色をあらわしている団体もある。日本の善意銀行に似た機関ともいえよう。Volunteers in Technical Association(VITA)では、大学からのボランティア派遣では、大学の単位取得(実習)ができる組織もある。

農業(農作、家畜、漁業)、手工芸、地域開発、建設など2,000人の青年(多くは大学生)を扱っているところもある。The National Center for Voluntary Action (NCVA) は、ボランティア活動のための支援協力機関で、全米にネットワークをもち、情報提供、リーダーシップトレーニング助言指導、学習の場の提供、学習の為のテキスト(ボランティアに関する)の製作などを行っている。勤労青年もこの機関の恩恵を多く受けながら、個々の地域での活動の資料として活用されている。

カナダ、アメリカ両国の共通点は、大学々生も勤労青年も区別なく活動展開をしていることである。大学生向けの場合でも職業と結びつけて考えられる傾向も出ている。そしてボランティア活に関係する機関は、それぞれの特色を明示し、それに対してボランティアが選択して、その機関を媒介に活動展開を行っている点は、組織的であると同時に、青年の個の確立を前提としての活動であることがわかるのである。

第6章　ボランティア活動に対する国の助成

近年、ボランティア活動に対する国や地方公共団体の関心が高まり、助成も徐々に強化されてきている。ここでは、そのうち厚生省、文部省、総理府及び法務省の行っているボランティア活動を推進するための助成策を概観したい。

なお、勤労青少年のみを対象とした施策は見られない。

◎ 厚　生　省

昭和48年に都道府県と指定都市全部の社会福祉協議会に奉仕銀行活動費の助成を開始している。奉仕銀行は、青少年、婦人、老人等地域住民の社会奉仕に関する理解と関心を深めるとともに奉仕活動の育成援助ならびに連絡調整を行い社会福祉の向上に資することを目的とするものである。

次いで昭和50年度より、奉仕銀行を都道府県社会奉仕活動センターに改め、新たに全国の市町村社会福祉協議会に市町村社会奉仕活動センターを設置しその助成を開始し、活動内容にも組織的な社会奉仕活動の育成援助等を柱の一つに加えており、さらに昭和52年度から、全国ボランティア活動振興センターを設置した。その目的は国民の社会連帯意識の高揚を図ることによって、社会福祉の充実発展に寄与することとしている。主な事業は次のとおりとなっている。

(1) 社会連帯意識にもとづくボランティア活動の開発普及

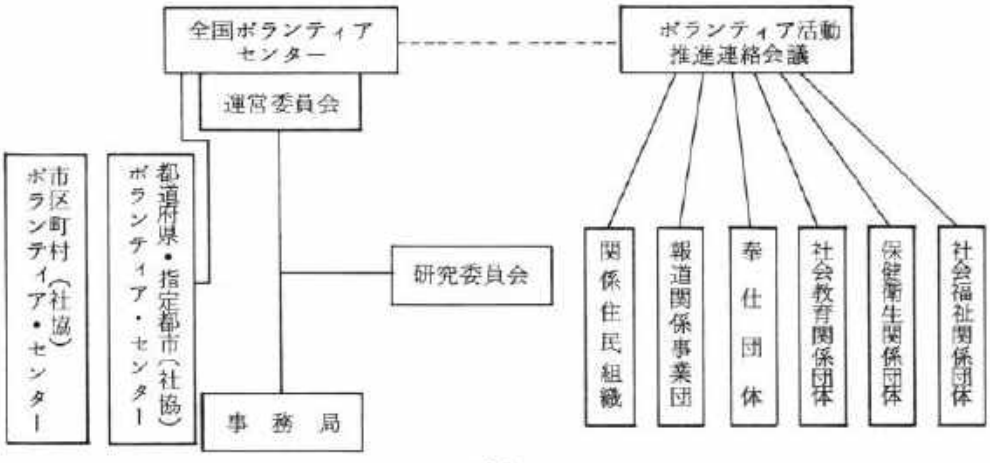
(2) ボランティア活動推進指導者の養成と調査研究

(3) ボランティア活動に対する情報、資材の提供

(4) ボランティアに関する相談、あっせん、援助

(5) 各種ボランティア活動推進団体との連絡提携、都道府県・市区町村ボランティアセンター等に対する援助・協力

全国ボランティア活動振興センター機能図



◎ 文　部　省

1. 昭和４６年度から４９年度までの３ケ年間にわたり、婦人の奉仕活動（ボランティア活動）促進のための研究事業を１２市の教育委員会に委嘱し奉仕活動に関する婦人の学習を推進援助するための社会教育行政の役割について考察がなされた。

この研究のねらいは、奉仕活動とは、婦人が自ら主体的に行う能力や技術の提供を通して自らの人間性を高める活動であるととらえ、社会教育行政の役割は奉仕活動に関する婦人学習を推進援助することにあるとしている。

昭和５１年度よりは新たに婦人ボランティア活動促進事業費を市町村を対象に予算化している。

2. 青少年地域活動（ふるさと運動・仲間づくり）事業に対する助成を昭和５１年度より開始している。

ふるさと運動は、青少年の郷土理解や仲間づくりを促進するために行われる活動で、その主な事業は次のとおりとなっている。

(1) 地域の伝統の継承・発展を図る事業

郷土芸能、民話、伝説の学習、郷土芸能・工芸などの継承、郷土の歴史学習等

(2) 地域の豊かな生活環境の醸成を図る事業

花や木を植えるなど自然の愛護活動。公園、河川などの清掃美化活動、親切運動など連帯感を高める活動

(3) 仲間づくりのための野外活動・体育・文化等に関する事業

野外活動、体験発表会、レクリエーション大会等

3. 昭和４９年より青少年団体指導者研修を実施し初級、中級、上級とも有志指導者ボランティア養成をすすめている。

4. (社)日本青年奉仕協会の啓蒙普及資料作成事業、各種研究会、協議会、ワークキャンプ等の事業に対し助成している。

(社)日本青年奉仕協会は昭和４２年設立され、自発的に人びとに貢献する青年たちを育て、その輪をひろげていくことを目的にしているが、主な事業は次のとおりとなっている。

(1) ボランティア活動の啓蒙のための資料の作成、講師等の派遣、ボランティア・スクールなどの開催

(2) ボランティア・リーダーの養成

(3) ボランティア活動推進のためのワークキャンプの開催

ボランティア活動の相談など

(4) 社会開発青年奉仕隊の派遣

調査、研究活動、海外協力活動など

◎ 総　理　府

財団法人新生活運動協会に対し、昭和４６年度より郷土奉仕活動啓発のための助成を行ってい

る。

新生活運動とは、住民の具体的な生活課題を住民自らの努力によって解決しようとする運動で、その目標は「新しいコミュニティづくりである」としており、連帯を培い社会生活のルールを確立し、住民と自治体との新しい協力関係を築くことが期待されているが、郷土奉仕活動は新しいコミュニティづくりの一環として取上げられた。この活動は奉仕活動の原則（自発的参加・無償の行為）に加え、自分が現に住んでいる地域（郷土）で住みよい郷土づくりに奉仕する住民の活動を促進することとしている。

◎ 法 務 省

B．B．S運動の会員の自己研さん活動のうち、中央研修については共催にして援助をするほか、全国都道府県の保護観察所等を通しても指導援助を行っている。

B．B．S運動（Big Brothers and Sisters Movement）とは非行に陥ってしまった少年たちの〝ともだち〟となって立ち直ろうとするのを援助したり、自分たちの属している地域社会に対して、青少年の保護や非行の防止に関する理解と協力が得られるように働きかけるなどの活動を行うことにより、非行のない社会の建設に寄与しようとする青少年ボランティアたちの運動で、17才から30才位まで、性、学歴、職業を問わず運動の趣旨をよく理解している者は参加出来ることになっている。主な活動は次のとおりとなっている。

(1) ともだち活動

非行に関係ある機関・団体に協力し非行歴のある少年やおそれのある少年と一対一で友達になり、立ち直りを手助けする。

(2) グループ・ワーク

会員と少年がグループになりスポーツ等団体活動を通して楽しみながら理解を得る。

(3) 非行防止の啓発活動

(4) 研さん活動

第7章　勤労青少年のボランティア活動の意義

1.　「共に生きる愛の市民活動」と呼ぼう

若者のボランティア活動について、こんな話を聞いた。

独り暮らしのおばあさんの慰問を思いたった若者が、関係者にそれなりの心得を聞いて近所の独り暮らしのおばあさんを訪ねた。ところが、そのおばあさんから「戸締調べみたいなことをしなくてもよい」と断わられてしまった。せっかく、ボランティア活動をしようとしたのに、それきり、やめてしまったという。

勤労青少年に限らず、多くの日本人がボランティア活動に無関心なのに、この若者のボランティア活動をしようという気持は、賞められてよいことだが、その善意が誤解され、活動もやめてしまったのは、残念なことである。

若者の善意が誤解されたのは、おばあさんの気むづかしさ、あるいはひと嫌いなどに理由があったのかもしれないが、ボランティア活動を、自分より気の毒な人のために無料で奉仕活動することだと理解した若者の態度が、言葉のはしばしに出たのではないだろうか。

おばあさんならずとも、人に気の毒な人と思われたり、みられたりすることに、反ぱつを感ずるであろう。たとえ、独り暮らしといえ、立派に生活している老人であれば、なおさらその気持が強いものがあろう。

ボランティア活動には、いろいろな定義がなされているが、「自発的に自分の余暇をさいて、自分の能力、得意なことを提供して社会的な活動をすること」と定義したい。

それは、日常的に行われることであり、しかも、人のためでなく、自分のために行うものである。日本には昔から「情は人のためならず」という諺があるが、これは、情を人にかけておけば、やがて自分によいむくいがあるという期待する気持がある。ボランティア活動の本来の趣旨からいえば、そのような気持はないはずである。〝期待する気持〟の裏返えしが、「自分より気の毒な人のための奉仕活動」ということになるのではないか。

「日常的に行なわれる」というのは、自分のできることをあたりまえに行なうということである。たとえば、道に迷っている人をみればそばえいって教えればよい。また、悩んでいる人がくれば、相談にのってあげればよい。それがボランティア活動であると、私は思っている。

ボランティア活動を何もむつかしく考える必要はない。いままでよりは、ちょっぴり自発的に、積極的に行動すればよい。歌のうまい若者は、その歌を、料理の上手な娘さんは、その料理の腕前を、社会へ提供すればよいのだ。

たしかに、社会福祉の分野でのボランティア活動がさかんだが、それだけがボランティア活動ではないはずである。私たちが住んでいる地域でも、ボランティアの仕事がたくさんある。

ロンドンの図書館の入口の掲示板などには「あなたの余暇を、助けを必要としている人たちのために」といったことが書かれてあるそうだ。

その掲示をみて、２５才の日本女性がある若者の施設で、週一度そこに暮らす人たちの夕食を作り、彼らと共に食事することになった。食事をすることも仕事のひとつだという。

何人かのボランティアが自分に一番都合の良い日を選び、それをうまく調整し、人手のない日は、その施設が補うというシステムで活動が行われているという（52.7.19 毎日新聞朝刊「編集者への手紙」から）。

この女性は、日本で料理を教える仕事をしていたということで、その能力を買われたのだが、言葉が不自由でも、立派にその能力が役立っているわけである。

ボランティア活動をするのは、勤労青少年自身だが、その若者たちの能力や意思を生かせるような社会的な配慮も必要である。

もちろん、日本にも各地に社会福祉協議会、善意銀行があるが、まだ、若者たちの特技、意思を十分汲みとるまでに機能しておらず、今後さらに充実することが望まれる。

ボランティア活動で特に強調したいのは、他人のためでなく、自分のために行なうという意味についてである。

この活動が助けを必要とする人のために働くことはいうまでもないが、人のために働くといえばすぐ自分を犠牲にするように思い勝ちである。

私たちがそう思い込むのは、無理のないことなのかもしれない。滅私奉公という言葉が示すように、日本人は、自分をむなしくして国や会社のためにつくすという体質がある。また、家のために自分はどうなってもよいという考え方も根強い。つまり、日本人には犠牲心が旺盛なのである。戦後になって、このような体質や考え方が多分にうすくなったような気がするが、まだまだ尾をひいているように思えてならない。

このことは、個の確立が十分でないといえるかもしれないが、すべてを日本人の国民性や精神的風土のせいにするつもりはない。

よく考えてみれば、人のために働くのは自分を生かすことであり、自分の心を豊かにすることを意味する。

自分の能力や意思をこの社会で生かすことは、人間にとって喜びであり、生きがいである。この活動をすることは、自分の心の世界を広め、充実させることに通ずる。この意味から、ボランティア活動は、若者たちの社会参加といえよう。

それにしても、日本人は何故、ボランティア活動に無関心なのであろうか。昨今、「ボランティア活動をしたいと思う」という声をきかないではないが、外国にくらべて、低調であることは間違いあるまい。

これにはいろいろな原因があげられるが、なんといっても、他人に対する思いやりがないからである。他人の痛みが自分の痛みと感ずることができないのである。

他人の痛みは、相手の身になって、ものを考え、行動することによって、はじめてわかるのではないだろうか。このような訓練が私たちに少なかったのであろう。どうも、他人の痛みには鈍感のようである。

もちろん、同情心やあわれみの心は誰しもが持っている。それがその感情のままにとどまってはじめて他人とかかわりあい、同一化できる。そこに連帯感がはぐくまれ、正義実現の力がうまれる。「人間の人間に対する思いやりが常に正義の裏付けとなる」ということが実感をもって理

解できるのである。

こうみてくると、他人の痛みに鈍感ということは、正義実現の力が弱いということでもある。「正義というものはたえず慈愛とともにある」といわれるのは、理由のないことではない。

ボランティア活動には正義という概念も内包するように思う。だとすれば、ボランティア活動は、人間として、当然なすべきことであり、なさねばならないことだということになる。

何も良いことをするのに、理由づけも、意義づけもいらない。自分がそれは良いことだと思えば、実行すればよいと思う。

実行するとは、行動することであり、体を動かすことである。あえて、ボランティア活動の意義づけを行なったのは、その一般的特性を明確にするためである。

ここで、ボランティア活動の一般的特性をまとめてみると、ー

(1) 自発性、他人から強制されるものではないことはいうまでもあるまい。本人の自由な意思にもとづく。

(2) 余暇の活動　職業のほかに、自分のひまのときに行なうものである。

(3) 自分の特技の提供　ありふれた自分の得意なことを日常的に役立せるものである。

(4) 無償　儲けを目的とするものではない。
　またむくわれることを期待するものでもない。

(5) 正義への志向、人間の人間に対する思いやりから、連帯感がはぐくまれ、正義実現の力がうまれる。イギリスの社会保障の父、ビイバリッジが「わが国の社会改革の歴史の中で、偉大な政党が改革の口火をきったことは一度もない。イニシアチブをとるのはいつも国民である。ボランタリーな人びとの力である」とのべている（52.1.6朝日新聞朝刊「論壇」から）のは、もっともなことである。

このようなボランティア活動の一般的特性はともかくとして、この言葉はどうも日本の風土になかなかとけこめそうにない。この言葉がキリスト教とのかかわりの中で発達してきたヨーロッパ社会の考察を抜きにして、論ずることはできないであろうが、ボランティア活動を日本の風土の中でたくましく育てていくためには、言葉を新らしく造る必要があるように思う。

新しい言葉によって、若者たちに訴え、その参加を求めようとするものである。

前記の一般的特性をふまえて、考えてみると、「共に生きる愛の市民活動」というのはいかがなものであろうか。

「共に生きる」というのは、他人のためではなく、自分のための活動であり、同時に助けを必要とする人のために働く。このことは、ともに、社会のために生きようとする意味を持つ。「愛の市民活動」とは、無償性のほか、自覚した自発的、積極的な市民として、余暇の利用、特技の提供、正義への志向などいっさいの意味をこめたものである。

2. 共に生きる連帯感

(1) 青少年がボランティア活動で得るもの

最近「ボランティア活動」は篤志家と呼ばれる特別な人々の特別な分野での奉仕活動というイメージから変わって、誰でもみんなが、自分たちの生活している社会を住みよい、気持ちよいものにしていくために、自ら進んで（自発的な意志をもって）、報酬を目的としないで、生活の一部として行なう活動であるという広い意味で考えられるようになってきている。いろいろな種類のボランティア活動に多くの青少年が参加している。彼らはこうした活動に参加することによって、何を得ようと期待しているのだろうか。現在ある自分を何かすることによって変えたいと願っているものがある。無報酬で何かすることに快感をもってのことである。または世の中に何が貢献しているという充実感を感じたいという願いもある。様々な期待があり、得るものも多様であろうがその1つは「連帯意識」による喜びではないだろうか。

人間は社会的な動物であると言われるように、ただ1人では生きることがむずかしい。誰かと一緒に行動したいと願う。何かを共にする仲間と一緒にいることに喜びを感じるのである。また、グループに入って共に活動をするうち、そのグループを「自分のものだと意識する」ようになる喜びがある。更にそのグループでの活動を企画し、他のメンバーと協力して実施していくようになったときの「共にする」ことの喜びもある。やがて、そのグループの中でメンバー同志が活動するだけでなく、グループ自体が1つの単位となって地域社会に位置づけられるようになる。これは人が社会参加をするようになる過程である。現在、各方面で「青少年の社会参加」が叫ばれているが、個々の青少年にとっては、自らの意志でグループ活動に参加して連帯意識をもつようになり、そのグループの中での自分の役割を自覚して責任をもって果たすようになることが重要なものである。このことは、自分が置かれた立場に応じて、できる範囲で役割を分担していくボランティア活動につながっている。

(2) 勤労青少年とボランティア活動

１５才～２４才の青少年のうち４６％ぐらいが労働力人口であり、その中の約４人に１人が親元を離れて、単身で、寮、下宿などで生活をしながら働いている。特に親元を離れて、新しい土地で働く青少年が新しく自分をとりまく社会に溶け込んでいく場合を考えてみると、はじめは事業所という１種のグループに入って、その中の一員としての意識をもつようになるまでの段階がある。次に働く場所内には慣れて、友人ができ、自分の会社だ、工場だという所属感をもつようになり職場での生活が充実するようになるのではないだろうか。ＮＨＫ「青年の意識調査」５１年）によると、半数近い人々が友人と気心が通じた時に満ち足りた気持になると答えている。この友人を得て、気心が通じて、連帯感を持つようになることが職場への所属感を高めることで、そのために事業所はクラブ活動を導入したりしてきっかけを与えようとしているのである。

やがて職場の中だけでの活動から外へ関心をもつようになることが社会人としての成長の方向であろう。そこで職場をとりまく地域社会とのかかわりがでてくる。地域社会とは、次の３つの感情をその中にいる人に感じさせるものだといわれる。

① われわれ感情 ― これは私たちの場所なのだという気持

② 役割意識 ― 地域の中で自分が位置づいている、持ち場があるという気持

③ 依存意識 ― その地域が自分の生活に必要な条件をもって自分をそこに暮させていると思う気持

新しい土地で生活をしている勤労青少年が自分の居住地または事業所のある地域に溶けこんで、そこに受着を感じるようになるためには、余暇を利用してまわりの社会につながりをもつボランティア活動に参加することはよい刺激になるだろうと思われる。

勤労者たちは余暇の時間をテレビを見たりラジオを聴いたり、新聞・雑誌を読んだり、あるいはくつろいで休息をするというどちらかというと受身的、消極的な過し方をしているとはよくいわれることである。職場に慣れて、何か自分の教養を高めるための時間や気持の余裕ができて稽古事をするようになって、知人・友人が増えてもそれは自分だけの世界に留まっている段階である。その段階を過ぎて、自分の現在の生活をとりまく地域社会をよく知り、その中で何かできる役割を果たしていくことによって「人と共に生きる連帯感」を与えることになる。

地域社会を知るということは、それがもつ特色を知り、そこで問題となっていることを理解することが第一歩である。次に分かった問題点にどのようにして取り組むかという段になって「ボランティア活動への参加」に結びついてくる。地域社会の現状や問題を知り、そのことを改善したり、向上させたりするためには、自分はどのようなことに役立つだろうかを考える。何か自分も貢献することができる面を見出すことができれば、その面で自分がもっていた知識や技能に更にみがきをかけて役に立てようということになる。このような過程に自己開発の機会がある。それは余暇を自主的な活動で過すことであり、創造的に活用することである。これらを経て、やがてその社会で責任ある役割を与えられることによって、運営に参加しているという意識をもつようになり、それは自信と誇りを伴なう「生きがい」に通じるようになるのである。

(3) どのようなボランティア活動があるか

ボランティア活動として何をすればよいのかは自分の生活している地域の実情に合わせて、また自分の興味をもとに考えればよいことである。これまでのところ社会福祉的な分野での活動が多かったように思われるが、しかし今後は広い範囲でとらえられ、理解されなければならない。福祉関係、教育関係、地域の整備、募金その他様々であろう。

盲人が、希望する時間に通ってきていろいろな技術の訓練をする教育施設を見学したことがある。そこで盲人のために基本的生活訓練、調理その他の家事、刺繍、タイルならべの工作、体操などの指導をしたり、録音テープや点字本をそなえた図書館の世話をしている人々の殆んどがボランティアであった。それぞれ1日の自分のスケジュールの中で他の人のために使える時間をきめ、3，4時間奉仕をしている。1つの仕事を何人かのボランティアで連携している場合もひきつぎが円滑に行なわれているように見うけられた。ここでは本当にボランティア活動が、生活の中に組みこまれて当り前のこととなっているのを見せられたように思った。福祉・教育活動の1つである。

自分たちの町をできるだけ美しくして郷土への愛着心を育てようと考えた青年団がある。勤務を終えた青年たちが集まって町の道の両側に桜の木を植えてまわろうという相談をし、まず苗木を育てるところからはじめて木の世話をしている。この桜の木を植える活動を通して、知識や技術を交換する機会を得ることができ、仲間も増えて連帯感も深まったという。地域整備活動の例である。

固定された概念に支配されずに、いろいろなボランティア活動のサークルが増えていくとよいと思われる。それらの活動が報酬に左右されずに、社会は我々が作っているのだという役割意識と責任感を育て、相手の立場を理解して、その立場になって考え、行動することができる連帯感をもった若者が多くなることを期待したい。

第８章　問題点と今後の方向

以上、わが国の勤労青少年のボランティア活動について、本研究会で実施した質問紙による調査結果を中心に述べ、さらに、具体的な事例、諸外国における動向などにもふれ、そして、今日、勤労青少年のボランティア活動のもつ意義についても若干の考察を加えてきたのであるが、以下、問題点と今後の方向について述べることにする。従って、問題点については、実態調査の結果ばかりでなく、今日、広く問題点として指摘されている点などをも含めて以下主な問題点を列挙してみよう。

1. 問　題　点

(1) ボランティア活動の活動内容の多様さと定義の不明確なこと

ボランティア活動がわが国ではまだ未成熟であること、また、活動内容が多岐にわたることなどのために、ボランティア活動ということについての理解、定義は、必ずしも確立しているわけではない。

はじめにも述べたように、「社会奉仕活動」に限定して考える狭義の考え方と、より広義に解して、それらの活動をも含めつつ、「このような表面的な活動をする以前の『相手の立場にたってものを考え行動する心のはたらき、』であり、それを『人間として素直に、態度や行動にあらわすこと』」とする考え方、すなわち、ひろく、いわば正義への志向を基調としながら「自発性」により重点をおく考え方もある。

しかし、今日、まず大切にされねばならぬことは、単なる形の上の活動形式ではなくて、青少年自身の自発的意志である。すすんで参加することによって、やがては、自己の集団、また他者にたいしての役割をも理解してくれるようになるのである。ボランティア活動は、わが国では、発達途上にあることを考えれば、あまり狭く限定して、その芽をつんでしまうより、今日の段階では、活動の形式により、その自発性をひき出し、伸ばすことに重点をおくべきであり、したがって、広義に解することが適切であり、やがては、方向も定まってくるものと考えられる。

また、ボランティア活動は多面的なものであり、したがって、単に活動を形式的にとらえるのではなく、段階的、立体的にとらえることも必要ではないかと考えられる。要は、あまり狭く限定してしまわないで、青少年たちの間にある自発性をひき出し、はぐくみ、どう高めてゆくのかについての諸配慮こそ必要ではないかと考えるのである。

(2) 青少年の間における理解の不十分さ

以上のように、ボランティア活動についての理解の不十分さは、本調査によっても明らかにされた。例えば、余暇にどんな活動をしているかとの質問では、男女わずかに、それぞれ１％、1.5％の者がボランティア活動をあげておるに過ぎないのにたいして、ボランティア活動に参加しているかという別の質問にたいしては、男子では、グループで参加していると答えた者6.6％、個人で参加していると答えた者4.1％、女子では、グループで参加していると答えた者

2.7%、個人で参加していると答えた者2.2%と何れも、前記の設問に答えた者の数を上まわっている。

このことは、勤労青少年のレヂャーやボランティア活動についての理解のし方をそのまゝ反映しているともいえるのであり、ボランティア活動とは、レヂャー活動とは何か異質の特別のものと考えていることを反映しているということができる。

さらに、ボランティア活動についての認知の度合についての調査結果では、ボランティア活動を知っていたと答えた者は、たしかに男女とも半数はこえているのであるが、それでも、男子で51.1%、女子で54.6%と、わずかに半数を越える程度であり、今日、ボランティア活動ということが盛にとりあげられてはいても、半数の青少年が知っておるに過ぎないということが明らかにされた。

この理由については、なお、多くの検討を必要とするところではあるが、やはり、今日、なお、勤労青少年の間には、ボランティア活動についての理解は十分ゆきわたっていることを示すものであり、このように、必ずしも、十分理解されていない段階から、ボランティア活動をどうのばしてゆくかを考えることこそ重要であり、そのためには、性急な施策ではなくして、前述のように、手はじめとして、奉仕を強調する前に、自発性をどうひき出し、のばし、高めてゆくかについての基本的問題への配慮がまず重要であり、ついで、次のステップが考えられるべきであろう。あまりに、功を急ぎすぎると、結局、自発的活動ではなくなって、強制的な活動、あるいは、流行にはしった活動で終ってしまうことにもなってしまうのである。

(3) ボランティア活動の未成熟

以上のように、勤労青少年の間には、ボランティア活動そのものにもついての理解が不十分であるために、実際に、活動している人々の間にも、必ずしもすべてが問題なく行なわれているわけではない。勤労青少年の側に、たしかに意欲、熱意はあるのではあるが、相手の立場を十分に理解し得ないままに活動にうちこむため、かえって、からまわりをしてまい、慈善をほどこしているとか、押しつけになったり、また、活動は継続しないで線香花火的に一時的に燃えあがって消え去ってしまうなど、意欲はありながらも、その熱意、好意は宙に浮いてしまっている場合も少なくない。

このような例のおきるのも、わが国においては、ボランティア活動がまだ社会に十分定着しているわけではなく、また、青少年の側においても、それが十分に理解し得ないまゝ、たゞ、若さにまかせて、活動の形式を追いかけ、結局は、中途で挫折してしまうことになってしまうのである。このような意味では、この意欲、善意、自発性をどう伸ばしていくのかの諸配慮こそ重要であるということができよう。

(4) ボランティア活動をすることについての周囲の理解の不足

この点についても、しばしば述べるようにわが国では、このボランティア活動が最近特に注目されるようになったために、勤労青少年の間ばかりでなく、家庭、地域社会、職場などで、ボランティア活動をすることについての理解が十分にゆきわたっているというわけではない。

本調査においても、数の少ないボランティア活動の実施者の中でも、活動する上で問題点あ

りとする者、男子５２.３％、女子５１.７％と半数以上の者が問題ありとしており、その中で、最大の理由は、時間がとれないが男子５１.５％、女子４６.７％となっているが、その次の理由には、周囲の理解が足りないという点をあげており、男子では３９.１％、女子では５３.３％となっており、特に、女子において、この理由が第１位となっている点が注目される。女子が男子に比して、ボランティア活動を実施している者の割合がやゝ低いのも、この周囲の理解が足りないということが影響しているとも考えられるのである。

しばしば、述べるように、ボランティア活動とは、何か特別なことをすることではなく、日常卑近な活動であり、共に社会を構成している一員とすれば、当然の営みとして、自然の形で展開されるべきものであり、社会がまた、そのような雰囲気になっていることこそ重要な点であろう。せっかく、勤労青少年の間に、自発的な意志がありながら、それを周囲から理解されないまゝで、行わざるを得ないような現状は、一日も早く解決されるべきであり、そのためには、大人の側の理解、社会の側での条件づくり、雰囲気づくりという点は、今後大いに改善されてゆくべきであり、ボランティア活動についての正しい情報の提供ということも、あわせ考えられるべきことであろう。

(5) ボランティア活動についての指導者の不足

ここでいう指導者というのは、むしろ、よき相談相手、助言者、協力者、援助者という意味である。本調査においても、よいリーダーや相談相手がいないと答えている者が、実施者の中で、男子３９.１％、女子２０.０％もおり、これも、ボランティア活動をしにくゝしている理由の第３位（男女とも）となっている。

このような点も、ボランティア活動が新しい分野であり、まだ、わが国の社会に定着していないためにおこっている現象であろう。したがって、せっかく、ボランティア活動をはじめても、線香花火的になったり、相手に押しつけるといった形になったりして、継続しないまゝに中途で挫折してしまうのである。

勤労青少年の自発性、善意、正義感、社会への参加意欲をのばしてゆく上でも、この分野での良き指導者の出現は、勤労青少年のボランティア活動を促進し、継続させていく上で大いに寄与することであろう。

たゞ、ボランティア活動の指導者と一口にはいっても、どんな資質をもち、どのような役割をもつ人であるかについては、なお、今後大いに検討を必要とすることではあるが、青少年の自発性、善意、意欲を、ひき出し、はげまし、よき相談相手となり、適切な助言のできる人材の必要性は、今後に大いにますことであろう。

(6) ボランティア活動をすゝめる上でのよき仲間、後継者の不足

ボランティア活動の必要性は理解し、それをはめたといっても、それが力を発揮し、また、継続的にすゝめられるためには、前述の良い指導者とともに、良き仲間を必要とする。互いに、協力しあい、はげましあうことによって、活動への意欲はさらに高まり、また、中途で挫折することなく活動を続けていくことができ、また、その中からよき後継者を育てていくこともできるようになるのである。

本調査でも、ボランティア活動をしている者の中では、個人で参加している者男子4.1％、女子2.2％にたいして、グループで参加している者男子6.6％、女子2.7％と、やゝ高くなっており、また、活動をはじめたきっかけとして、よき仲間を得たいと答えている者が、男子9.1％、女子17.2％と、ボランティア活動を通じて、よき友を得たいと考えている者もある。

善意あり、勇気ある勤労青少年のこの分野で活動しようとする熱意に答えるためにも、よきグループづくりについての指導、助言ということもまた、より積極的に考えられてよいことではあるまいか。そして、そのような中から、自発的なボランティア活動が生れ、相互協力という形で定着していくことにもなり、そこから連帯の芽もめばえてくるのであろう。

(7) ボランティア活動に必要な技能、技術を修得し、あるいはグループの打合せ、会合などを行なう場所の不足

ボランティア活動をすすめていく上で、やはり、自らの力をみがき、また、互に協力しあって活動の計画をたてたり、準備をしたりする会合の場所の不足をうったえる声は以外に多い。

本調査では、打合せや相談の場がないと答えた者は、男子8.7％、女子で13.3％であり、時間がとれないと答えた者の割合（男子56.5％、女子46.7％）に比較すれば、それ程高いとはいえないが、ボランティア活動をすゝめていく上での一つの障害となっていることは否定できない。

このような点からすれば、勤労青少年ホームは、ボランティア活動を推進していく上での一つの拠点になる得る素地ををもっているということもできるのであり、教室、講座、講習などともに、自発的グループ活動の促進についても配慮し、やがては、社会的な奉仕的活動へと発し得る配慮も（もちろん、どこまでも自発性を尊重しつつの上ではあるが）考えてよいのではあるまいか。

(8) 推進関係機関相互の連繋の欠如

ボランティア活動の重要性の認識が高るにつれて、これらを推進していく団体も既にいくつか組織されている。社会福祉協議会、青年奉仕協会その他の青少年団体など、数多くの組織が結成され、これらは、また、それぞれの行政機関と結びついている。このことは、一面では、ボランティア活動の多様性を示すことにもなるのであり、また、発展途上にあるための過渡的現象であるということもできるのであるが、勤労青少年にとっては、かえって、選択にまようということにもなるのであり、やはり、ボランティア活動に関係する団体、行政機関、そして公共施設は、より密接な連関をとりつつ、勤労青少年のボランティア活動を今後どのように展開させていくべきかについて、検討を加えてよい時期にきているのではあるまいか。

(9) その他の問題

以上のほか、ボランティア活動をすゝめていく上での問題点として、本調査の勤労青少年たちがあげている点は、時間がとれないという点であり、男子56.5％、女子46.7％の者がこの理由をあげている。やはり、真剣にとり組みつゝも時間の不足を最大の困難点としてあげているのであり、週休2日制の完全実施をあわせ考えるべきことが痛感される。

その他の問題としては、活動を続けていく上での資金の不足、ボランティアの登録制の欠如、

また、ボランティア活動の促進をはかる上で、行政はどこまで関与すべきかの問題などは、大きな問題として、検討を要する課題である。

以上、勤労青少年のボランティア活動をすゝめていく上でのいくつかの問題点を思いつくまゝに羅列してきた。ある問題では、ボランティア活動にともなう固有の問題でなく、他の問題とともに解決を必要とされる問題、あるいは、もっと深く、日本の社会がもっている問題と関係しているものもあり、一朝一夕には解決できないような問題であるかもしれない。しかし、まだ逆に、ボランティア活動の推進をはかることによって、この根本的問題の解決に寄与し得ることもあり得るのである。何故ならば、ボランティア活動は、何か特別のことをすることではなく、日常の余暇生活の中でも実行することのできることであり、それを通じて、社会への参加と、社会そのものゝ改善へと歩をすゝめていくことも可能となり得るからである。以下、今後、ボランティア活動をより定着させていくためにどうすべきかについての若干の提案について述べよう。

2 今後の方向

前述のように、わが国では、ボランティア活動についての歴史が浅く、かならずしも、社会の中に十分定着しているわけではなく、また、勤労青少年の間でも十分理解されていない現状のなかで、今後、これをどう発展させていくべきかについての道筋を考えることは、容易なことではない。しかし、本研究会で実施した勤労青少年の余暇とボランティア活動についての実態調査の結果や研究会での討議の結果をふまえつつ、以下、若干の事項についてふれておこう。

(1) ボランティア活動についての理解と意欲を高めること

調査の結果のところでもふれているように、勤労青少年の間で、ボランティア活動をしている者の数は少なく（実際にしていても、それを自らは意識していない者をも含めて）、また、ボランティア活動についての理解についても十分ではない。したがって、まず、第一の急務は、勤労青少年の間にボランティア活動についての理解、意欲をどう高めていくのかについての施策が考えられるべきことであろう。

しかし、いうまでもなく、ボランティア活動は、どこまでも、その自発性にまつところが大きく、押しつけにならないようにして、どう自発性を高めていくことが可能なのか、ということではなく、行動を通じて体得していくことこそ重要であり、したがって、時間はかゝってもまず、自発的、自主的に参加でき得るような条件をつくっていくことこそ重要なことではあるまいか。

青少年問題審議会でも、青少年の社会参加を育成するために、

「第一に、地域が青少年の各種団体やグループ、サークルへの参加を促進すること、第二に、活動目標については、青少年の意見を十分に吸い上げ、あくまでその合意を前提とすることである。

第三は、青少年にとって地域社会の各種運動への参加は、あくまで自主的、主体的に行われるべきものである」。と指摘されている。

このような点からしても、勤労青少年が、自発的に奇をてらわず、意欲的にとりくんでいくことができるような条件をとゝのえていくことこそ大切であり、勤労青少年ホームは、このような勤労青少年の自主的、自発的なグループ活動の拠点としての役割を今後いっそう高めていくことが期待される。

(2) 身近なことから社会参加へ

前述のように、ボランティア活動については、広狭さまざまな定義がなされている。もちろん、究極的には、「奉仕活動」へと高められていくものであろう。しかし、はじめからそれを期待するのではなく、身近なことで、自らできることから出発することこそ大切ではあるまいか。

すなわち、他者のためではなく、自らのため、自らの仲間たちのため、自らを生かしていくことから出発するならば、やがては、他者のため、他の集団のため、あるいは恵まれない人々のためにと、その輪は次第に広まっていくのであり、自ら活動することの方向や意義についても、体得していくことが期待できるのではあるまいか、もちろん、このような活動の過程にあっての、よき指導、助言のあることは望ましいことではあるが、まず、はじめに、身近なことからはじめてみること、自発的な参加を促進することを第一段階として強調したい。

ボランティア活動とは、他者のために何か特別のことをするのではなくて、「自発的に、自分の余暇をさいて、自分の能力、得意なことを提供して社会的活動をすること」からはじめるならば、多くの勤労青少にとって、それは困難なことではなく、あたりまえ、日常的なこととなるであろう。

自らのために、自らの仲間同志のために、そしてやがては社会参加へと展開されていくのであり、そのためにも、よき仲間の存在も忘れぬことのできぬ条件であろう。

(3) ボランティア活動に参加しやすくするための条件整備

ボランティア活動がまだ十分に定着していないわが国にあっては、勤労青少年を含めて、より多くの人々が、すゝんでボランティア活動に参加し得るような諸条件を整備していくことが大切である。

例えば、前述の勤労青少年の約半数の青少年が参加の意志をもちながら、半面ボランティア活動についての調査の結果でも、参加していない主な理由として、時間がたりない、指導者や相談相手がいない、周囲の理解の不足、打合せや相談の場がない。資金の不足等をあげている。

時間の不足ということの反面には、仕事の多忙さのあることも否定できないであろう。週休2日制の推進とともに、勤労青少年がすゝんでボランティア活動に参加し得る諸条件を整えていくことこそ急務ではあるまいか。

また、勤労青少年にのみ限定しないで、勤労青少年と大学生とが、勤労青少年と家庭婦人とが、また、勤労青少年と高令者とが協力して、ボランティア活動を推進していくことも考えられ、このような活動を通じて、社会の中に真の連帯も芽ばえてくるのであろう。

このような点からするならば、今日、施設中心のボランティア活動から、あらゆる組織、団体、企業など利用し得る場所、機会をとらえてすゝめられていくべきであり、そのための情報

の提供ということも欠かせぬ一つの条件ということができる。

(4) 行政の関与

勤労青少年のボランティア活動の推進をはかっていくために、行政は何処まで関与すべきかということについては大いに論議のあるところであろう。ボランティア活動についての「歴史が浅い上に、その民間的背景が貧弱なわが国の場合には、その自然発生的組織化を期待するわけにはいかない」とする指摘もあれば、「ボランティア活動は、本来民間の自発的な行為であり、行政の関与を受けるときには、官製化、硬直化をもたらし、創造性を失うとする考え方もあり、したがって、「ボランティア活動の主体性の尊重と、その育成強化への介入という一見矛盾した課題でもある」とも述べられている。

たしかに、ボランティア活動は、自発性、自主性の尊重されるべきことはいうまでもないが、また一方では、それをひき出し、のばし、はげます行政的援助も必要である、直接介入ということではなくて、諸条件を整備し、相談助言することは介入ということは別の次元の行為であろう。

ボランティア活動の重要性の認識とともに、既に述べたように、いくつかの省も具体的施策を展開しはじめている。このような各省の動向を見きわめ、連繋をとりつゝ、勤労青少年の自発性をさまたげない範囲での行政施策の展開は、今日の重要な一つの課題となってきているということができよう。

(5) 「共に生きる愛の市民活動」の展開を

以上、若干の事項について述べてきたが、結局、ボランティア活動とはいっても、何か、きわだった行為をすることではなく、「ボランティア活動をすることはあたりまえであり、市民生活にとっても意義があり」、欠かすことのできない日常的行為であることについての理解を深めていく以外に道はないのである。

そして、そのためには、新しい言葉をつくって、若者たちに訴え、若者たちの参加を求めることも必要と考え、本委員会は、「共に生きる愛の市民活動」の展開を訴えることとした。"愛の市民運動"とは、無償性のほか、自覚した自発的、積極的な市民として、余暇の利用、特技の提供、正義への志向などいっさいの意味をこめたものであるという一委員の言葉でもって、本報告書の結びとする。

参考（調査票・集計票）

働く青少年のボランティア活動に関するアンケート調査

昭　和　52　年　10　月
勤労青少年余暇活動研究会

当研究会は、労働省婦人少年局と雇用促進事業団の協力により設置されたもので、労働省に協力しながら、働く若人の余暇活動を豊かなものにするための具体的な方策などについて、種々研究をしております。このたびは、働く若人の皆さんの余暇（自由時間）におけるボランティア活動の実態等を知り、今後の施策に役立せるために、アンケート調査を行うことになりました。どめんどうですが、なにとぞ御協力下さい。

回答内容は個人のひみつとし、結果は統計的に処理されるだけですから、御迷惑をかけることは絶対にありません。ありのままを御記入下さるようお願いいたします。

（ボランティア活動とは市民として、自分達の生活条件をより快適なものにするため、自分達で出来ることは、力を寄せ合って行こうという考えのもとに、収入を得ることを目的としないで、自発的に行われる活動をいいます。）

とくに、ことわりのないときは、番号および、イ、ロ、ハ、……のどれか1つに○をつけて下さい。（　　）のところは、具体的に記入して下さい。

はじめに、次の点をおたずねします。

性	年令	学歴	住んでいる家	事業所の規模	事業所の産業
1. 男 2. 女	（　）才	1. 中学卒 2. 高校卒 3. 高専・短大卒 4. 大学卒	1. 親元（兄弟、親せき宅を含む） 2. 事業所の寄宿舎 3. 住込 4. アパート・間借・下宿 5. その他	1. 1,000人以上 2. 300～999 3. 50～299 4. 10～49 5. 9人以下	1. 建設業 2. 製造業 3. 卸売業・小売業（飲食店を含む） 4. 金融・保険・不動産業 5. 運輸・通信業 6. 電気・ガス・水道・熱供給業 7. サービス業（クリーニング・理・美容・放送・広告・医療・保険衛生・教育・旅館・ホテル業・協同組合など） 8. 公務 9. その他

現在の仕事		自由時間	在学中のクラブ活動参加の有無
1. 専門的技術的な仕事（看護婦、栄養士、保母、技術者など） 2. 事務的な仕事（一般事務、会計事務、経理事務、集金、タイピスト、キーパンチャーなどの機械事務） 3. 販売的な仕事（商店、デパートなどの店員、外交員など）	4. 運輸通信関係の仕事（自動車運転者を含む） 5. 技能的、生産的な仕事 6. サービスの仕事（理・美容・クリーニング・料理人、ウェイトレス・娯楽場などの接客員など） 7. その他（　　）	（生活時間のうち趣味や勉強、遊びなどにあてる時間） 仕事のある日 1日平均約（　）時間 休日 月に　日 1日平均約（　）時間	1. 有 2. 無

1　あなたの勤務は、次のうちのどれですか。

1. 日勤
2. 交替制勤務 ｛イ　二交替　ロ　三交替｝
3. その他

2 あなたは、自由時間を主にどのように過していますか。平日と休日について、もっともよくする活動を下欄から番号で3つまであげて下さい。

平　日			
休　日			

1. ラジオ、テレビ
2. 休　養
3. 新聞、雑誌、週刊誌など
4. 学習的活動

   定時制高校、夜間短大、大学、職業訓練校
   各種学校（タイプライター、簿記など）などへの通学、
   読書、各種講座、けいこごとなど

5. 映画、演劇、音楽の観賞、スポーツの観戦など
6. パチンコ、マージャン、競輪、競艇、競馬など
7. 囲碁、将棋、トランプなど
8. 外出、訪問（友人との雑談、ショッピング、ぶらつきなどを含む）など
9. スポーツ
10. 旅行、ハイキング、ドライブ、つりなど
11. ボランティア活動
12. その他（　　）

3 あなたは、ボランティア活動とはどんなことか知っていましたか。

1. 知っていた
2. 知らなかった

4 あなたは、ボランティア活動に参加していますか。

1. 参加している
   - イ　グループで
   - ロ　個　人　で
2. 参加していない

   ↓

   問 9 ～ 11

4で1と答えた人は以下すべて（9を除く）についておたずねします。

5 あなたの活動は次のうちどれに該当しますか。あてはまるものすべてに○をつけて下さい。

1. 福祉施設などでの活動

   （母子福祉、精神薄弱者（児）、盲、ろう児、虚弱児、　体不自由児、養護、身障者福祉、老人などの施設）

   イ、遊び相手、話し相手
   ロ、演　芸
   ハ、学　習（英語、そろばんなど）習いごと（花、茶、書、手芸など）などの指導
   ニ、技術奉仕（マッサージ、ドライブ、手話、リーディング、サービスなど）
   ホ、労働奉仕（大工、清掃、造園、修理など）
   ヘ、衣料品の修理
   ト、提　供（おもちゃ、教材、おむつなど）
   チ、その他（　　）

2. 個人、グループに対して行う活動

   イ、遊び相手、話し相手
   ロ、身の廻りの世話
   ハ、グループのリーダー（地域の子供会、BBS活動、ボーイスカウト、ガールスカウト、勤労青少年ホームのグループなどでの青少年の育成
   ニ、買物の手伝い、通園の介助
   ホ、点訳、リーディングサービス、代筆
   ヘ、ドライブ
   ト、その他（　　）

3. 環境改善や社会制度に対する活動

   イ、募金活動
   ロ、清　掃
   ハ、緑化運動
   ニ、公害防止活動
   ホ、調査特別活動
   ヘ、保健衛生活動
   ト、施設づくり（保育所、図書館など）
   チ、環境づくり（広場づくり、遊び場づくり）
   リ、制度の改正
   ヌ、その他（　　）

6 あなたがその活動をはじめてからどのくらいになりますか。

約（　　）年（　　）月

また活動日数はどれくらいですか。

活動は｛イ 年 / ロ 月｝に（　　）日程

7 あなたが活動をはじめたきっかけについて、次のうち該当するものすべてに○をつけて下さい。

1. 社会の一員として当然なことだから
2. 余暇を有効に過すために
3. 気の毒な人をみすごせない
4. 友達等に誘われた
5. 本や新聞を読んだり、人の話などを聞いて
6. 身近にボランティアグループがあったため
7. 特技を身につけ、またはいかしたいため
8. よい仲間を得たいため
9. ただ何となく
10. その他（　　）

8 あなたが活動をする上で、なにか問題がありますか。

1. ある →
2. ない

その理由は
- イ 周囲の理解が足りない
- ロ よいリーダーや相談相手がいない
- ハ 活動のための資金が足りない
- ニ グループ員の打合せや相談する場が足りない
- ホ 仕事の都合で時間がとりにくい
- ヘ グループ員との人間関係がうまくいかない
- ト 心身が疲れる
- チ 自己負担が多く困る
- リ その他（　　）

4で2と答えた人に以下についておたずねします。

9 あなたは、ボランティア活動について参加したことがありますか。

1. ある →
2. ない

現在参加していない理由は
- イ 仕事が忙がしかった。
- ロ グループ活動についていけなかった。
- ハ 受け入れ側とうまくいかなかった。
- ニ つきあい程度に参加したため
- ホ 家族が反対したため
- ヘ 自分の楽しみを持った方がよいと思ったため
- ト その他（　　）

- イ 今後は参加したいと思っている。
- ロ 参加したいが方法がわからない。
- ハ 参加したいが、テレくさい気持が先にたつため。
- ニ 参加する気持はない。

10 老人や、体の不自由な人や、子供などが困っているとか、きけんな場面にあったとき、あなたはどのようにしますか。

1. すすんで手をかしたり助ける。
2. 時と場合によっては、手をかしたり助ける。
3. 近くの人に呼びかけて共同で助ける。
4. 気になるが人前では、はずかしいのでそのまま通りすぎる。
5. 誰かがやれば、手伝う。
6. そのまま通りすぎる。
7. わからない。

11 あなたは、ボランティア活動について、どのように考えていますか。

1. 住みよい社会をつくるため、みんなが積極的に参加すべきだ。
2. 福祉は国や市町村でやるべきだ。
3. 国や市町村の行う福祉対策には限りがあるので、一般も協力すべきだ。
4. 「めぐむ」とか「あわれむ」というような感じを相手にいだかせるようで、ていこうを感じる。
5. 自分のことは、自分でやるべきだ。
6. その他（

勤労青少年ホームにおけるボランティア活動に関するアンケート調査

昭　和　52年　10月

勤労青少年余暇活動研究会

当研究会は、労働省婦人少年局と雇用促進事業団の協力により設置されたもので、労働省に協力しながら、働く若人の余暇活動を豊かなものにするため、具体的な方策などについて種々研究をしております。

このたびは、働く若人の余暇（自由時間）におけるボランティア活動の実態等をはあし今後の施策に役立せるために、アンケート調査を行うととになりました。

御多忙のところ恐縮ですが、なにとぞ御協力下さい。

（ボランティア活動とは、市民として、自分達の生活をより快適なものにするために、自分達で出来ることは、力を寄せ合って行こうという考えのもとに、収入を得ることを目的としないで、自発的に行われる活動をいいます。）

本調査では、ボランティア活動を目的としていないグループであっても、活動内容に下記3の事項にあるようなものがあれば、ボランティアグループとします。

とくに、ことわりのないときは番号およびイ、ロ、ハ、……のどれか1つに○をつけ所要事項および（　　）のところは具体的に記入して下さい。

はじめに、次のことをおたずねします。

ホーム名		グループまたはクラブ数	

1　あなたのホームには、ボランティア活動をしているグループ（またはクラブ）がありますか。

1　ある→

グループの名称	グループの人数		
	男	女	計

2　ない

↓

問5、6へ

以下1で1と答えた場合は以下すべてにおたずねします。

2　活動をはじめたのは、いつ頃からですか。

活動歴の最も長いグループについて御記入下さい。

昭　和　　年　頃

3　そのグループはどんな活動をしていますか。

次のうち、あてはまるものに○をつけて下さい。同じ内容について2つ以上のグループがある場合は、グループ数を付記して下さい。

1.　福祉施設などでの活動

（母子福祉・精神薄弱者（児）・盲・ろう児・虚弱児・肢体不自由児・養護・身障者福祉・老人などの施設）

イ.　遊び相手、話し相手。

ロ.　演　芸

ハ.　学習（英語、そろばんなど）習いごと（花、茶、書、手芸など）などの指導

ニ.　技術奉仕（マッサージ、ドライブ、手話、リーデングサービスなど）

ホ.　労働奉仕（大工、洗濯、造園、修理など）

ヘ.　衣料品の修理

ト.　提供（おもちゃ、教材、ハガキなど）

チ.　そ　の　他（　　）

2.　個人、グループに対して行う活動

イ.　遊び相手、話し相手

ロ.　身の廻りの世話

ハ.　グループのリーダー（地域の子供会、BBS活動、ボーイスカウト、ガールスカウト、勤労青少年ホームのグループなどでの青少年の育成）

ニ.　買物の手伝い、通園の介助

ホ.　点訳、リーデングサービス、代筆

ヘ.　ドライブ

ト.　そ　の　他（　　）

3. 環境改善や社会制度に関する活動

イ. 募金活動

ロ. 清　掃

ハ. 緑化活動

ニ. 公害防止活動

ホ. 調査特別活動

ヘ. 保健衛生活動

ト. 施設づくり（保育所、図書館など）

チ. 環境づくり（広場づくり、遊び場づくり）

リ. 制度の改正

ヌ. その他（　　）

4 活動がはじめられたのは、どんなきっかけからでしたでしょうか。

次のうち、あてはまるものに○をつけて下さい。

1. グループが自発的に
2. ホームで推奨したため
3. 講座等で、ボランティアに関することを取上げたため
4. グループ活動で、社会福祉施設の見学をしたため
5. ホーム以外のグループ等からの呼びかけがあったため
6. 市町村等公的機関から呼びかけがあったため
7. その他（　　）

5 地域の学校、自治体等で、ボランティア活動について積極的な働きがありますか。

1. ある→
   イ. 小、中、高校で指導している。
   ロ. 自治体、その他の団体が広報誌（紙）などでPRしている。
   ハ. 都道府県や市町村がボランティアの養成をしたり、参加の呼びかけをしている。
   ニ. 社会福祉団体などの団体が、ボランティアの養成をしたり、参加の呼びかけをしている。
   ホ. 商工団体等で呼びかけをしている。
   ヘ. 労働組合などで活発な活動をしているところがある。
   ト. その他（　　）
2. ない

6 ホームの立場としては、利用者のボランティア活動について、どのように考えていますか。

1. 積極的に指導していく方針（指導している）
2. グループの主体性にまかせ、もとめがあれば、指導助言をする。
3. ホーム内での活動の推進に重点を置くべきである。
4. 行政は関与すべきでない。
5. 何ともいえない。
6. そ　の　他（

働く青少年のボランティア活動に関するアンケート調査

集　　計　　表

＜働く青少年のボランティア活動に関するアンケート調査・単純集計表＞

項目	カテゴリー	男性 N=420	(%)	女性 N=592	(%)
年齢	～18歳	人 31	(7.4)	51	(8.6)
	19	52	(12.4)	93	(15.7)
	20	45	(10.7)	96	(16.2)
	21	58	(13.8)	125	(21.1)
	22	74	(17.6)	92	(15.5)
	23	81	(19.3)	87	(14.7)
	24	79	(18.8)	48	(8.1)
	N・A	0	(0)	0	(0)
学歴	中学校卒	66	(15.7)	53	(9.0)
	高校卒	267	(63.6)	452	(76.4)
	高専・短大卒	17	(4.0)	64	(10.8)
	大学卒	66	(15.7)	16	(2.7)
	N・A	4	(1.0)	7	(1.2)
居住形態	親元	164	(39.0)	305	(51.5)
	寄宿舎	182	(43.3)	205	(34.6)
	住込	8	(1.9)	7	(1.2)
	アパート・間借・下宿	47	(11.2)	55	(9.3)
	その他	15	(3.6)	14	(2.4)
	N・A	4	(1.0)	6	(1.0)
事業所規模	1000人以上	145	(34.5)	298	(50.3)
	300～999	86	(20.5)	125	(21.1)
	50～299	142	(33.8)	107	(18.1)
	10～49	37	(8.8)	47	(7.9)
	9人以下	8	(1.9)	13	(2.2)
	N・A	2	(0.5)	2	(0.3)

項目	カテゴリー	男性 N=420	(%)	女性 N=592	(%)
事業所産業	建設業	31	(7.3)	28	(4.8)
	製造業	222	(52.8)	190	(32.1)
	卸売業・小売業	79	(18.7)	146	(24.6)
	金融・保険・不動産業	9	(2.2)	73	(12.4)
	運輸・通信業	4	(1.0)	13	(2.2)
	電気・ガス・水道・熱供給業	14	(3.4)	4	(0.7)
	サービス業	47	(11.2)	111	(18.7)
	公務	0	(0)	6	(1.0)
	その他	14	(3.4)	20	(3.3)
	N・A	0	(0)	1	(0.2)
現在の仕事	専門技術的仕事	52	(12.4)	55	(9.3)
	事務的仕事	82	(19.5)	323	(54.6)
	販売的仕事	55	(13.1)	67	(11.3)
	運輸・通信関係の仕事	3	(0.7)	6	(1.0)
	技能的，生産的な仕事	184	(43.8)	77	(13.0)
	サービスの仕事	21	(5.1)	54	(9.1)
	その他	14	(3.3)	4	(0.7)
	N・A	9	(2.2)	6	(1.0)
平日自由時間量	3時間未満（不明・含）	113	(26.9)	200	(33.8)
	3時間～5時間未満	174	(41.4)	249	(42.1)
	5時間以上	133	(31.7)	143	(24.2)
1カ月休日数	1日	0	(0)	2	(0.3)
	2日	5	(1.2)	10	(1.7)
	3日	7	(1.7)	7	(1.2)
	4日	46	(10.9)	95	(16.0)
	5日	56	(13.4)	69	(11.7)

項目	カテゴリー	男性 N=420	(%)	女性 N=592	(%)
	6日	108	(25.8)	134	(22.7)
	7日	32	(7.5)	29	(4.8)
	8日	111	(26.3)	137	(23.2)
	9日以上	18	(4.4)	26	(4.3)
	N・A	37	(8.8)	83	(14.1)
休日自由時間量	1時間未満	2	(0.5)	5	(0.9)
	1時間～	3	(0.7)	13	(2.2)
	2時間～	4	(1.0)	13	(2.2)
	3時間～	15	(3.6)	27	(4.5)
	4時間～	20	(4.6)	24	(4.1)
	5時間～	41	(9.7)	64	(10.8)
	6時間～	35	(8.3)	48	(8.1)
	7時間～	16	(3.9)	33	(5.5)
	8時間以上	233	(55.5)	241	(40.7)
	N・A	51	(12.2)	124	(21.0)
学生時代クラブ活動	有	308	(73.3)	392	(66.2)
	無	90	(21.4)	170	(28.7)
	N・A	22	(5.2)	30	(5.1)
勤務形態	日勤	351	(83.5)	511	(86.3)
	二交替	24	(5.8)	43	(7.2)
	三交替	27	(6.3)	17	(2.9)
	その他	7	(1.7)	4	(0.7)
	N・A	11	(2.7)	17	(2.9)

		平日	休日	平日	休日
	ラジオ・テレビ	359 (85.4)	186 (44.3)	521 (88.0)	323 (54.6)
	休養	163 (38.8)	163 (38.8)	288 (48.6)	284 (47.9)

項目	カテゴリー	男性 N=420	(%)	女性 N=592	(%)
自由時間の活動	新聞・雑誌・週刊誌	290 (69.1)	60 (14.4)	370 (62.5)	99 (16.8)
	学習的活動	68 (16.2)	47 (11.2)	204 (34.4)	71 (12.0)
	観賞的活動	68 (16.2)	158 (37.7)	73 (12.4)	223 (37.6)
	勝負ごと	74 (17.5)	115 (27.3)	10 (1.7)	14 (2.4)
	囲碁・将棋・トランプなど	21 (4.9)	9 (2.2)	6 (1.0)	0 (0)
	外出・訪問	80 (19.0)	214 (50.9)	146 (24.6)	446 (75.1)
	スポーツ	64 (15.3)	133 (31.6)	38 (6.4)	64 (10.8)
	旅行・ハイキング・ドライブ・つり	16 (3.7)	120 (28.5)	7 (1.2)	178 (30.1)
	ボランティア活動	3 (0.7)	4 (1.0)	2 (0.3)	9 (1.5)
	その他	11 (2.7)	7 (1.7)	24 (4.1)	16 (2.7)
ボランティア活動認知	知っていた	215	(51.1)	323	(54.6)
	知らなかった	190	(45.3)	251	(42.3)
	N・A	15	(3.6)	18	(3.1)
参加の有無	グループで参加	27	(6.4)	16	(2.7)
	個人で参加	17	(4.0)	13	(2.2)
	参加していない	369	(87.9)	557	(94.1)
	N・A	7	(1.7)	6	(1.0)
福祉施設などでの活動	遊び相手・話し相手	2	(4.5)	6	(20.7)
	演芸	0	(0)	2	(6.9)
	学習	2	(4.5)	2	(6.9)
	技術奉仕	0	(0)	4	(13.8)
	労働奉仕	4	(9.1)	5	(17.2)
	衣料品の修理	0	(0)	0	(0)
	提供	19	(43.2)	3	(10.3)
	その他	0	(0)	0	(0)
	小計	27	(61.3)	22	(75.8)

※ 比率は，ボランティア活動に参加しているものを100とした%で示してある。
男性 44人
女性 29人

項目	カテゴリー	男性 N＝44	(%)	女性 N＝29	(%)
個人・グループに対して行う活動	遊び相手・話し相手	4	(9.1)	6	(20.7)
	身の廻りの世話	4	(9.1)	1	(3.4)
	グループのリーダー	2	(4.5)	5	(17.2)
	買物の手伝い，通園の介助	0	(0)	0	(0)
	点訳，リーディングサービス，代筆	0	(0)	1	(3.4)
	ドライブ	2	(4.5)	0	(0)
	その他	2	(4.5)	1	(3.4)
	小計	14	(31.7)	14	(48.2)
環境改善や社会制度に対する活動	募金活動	7	(15.9)	5	(17.2)
	清掃	6	(13.6)	7	(24.1)
	緑化運動	2	(4.5)	0	(0)
	公害防止活動	2	(4.5)	0	(0)
	調査特別活動	1	(2.3)	0	(0)
	保健衛生活動	0	(0)	0	(0)
	施設づくり	0	(0)	0	(0)
	環境づくり	4	(9.1)	0	(0)
	制度の改正	1	(2.3)	0	(0)
	その他	1	(2.3)	2	(6.9)
	小計	24	(54.5)	14	(48.2)
活動年数	～半年	2	(4.5)	5	(17.2)
	～1年未満	3	(6.8)	0	(0)
	～1年半	5	(11.4)	1	(3.4)
	～2年未満	2	(4.5)	0	(0)
	2年～	6	(13.6)	6	(20.7)
	3年～	4	(9.1)	3	(10.3)
	4年～	5	(11.4)	2	(6.9)

項目	カテゴリー	男性 N＝44	(%)	女性 N＝29	(%)
	5年以上	0	(0)	1	(3.4)
	N・A	17	(38.6)	11	(37.9)
活動日数	月に0.5日未満	8	(18.2)	6	(20.7)
	～0.9日	4	(9.1)	0	(0)
	1日～	8	(18.2)	1	(3.4)
	2日～	1	(2.3)	3	(10.3)
	3日～	1	(2.3)	1	(3.4)
	4日～	1	(2.3)	3	(10.3)
	5日～	0	(0)	1	(3.4)
	6日～	1	(2.3)	0	(0)
	7日以上	1	(2.3)	2	(6.9)
	N・A	19	(43.0)	12	(41.4)
活動をはじめたきっかけ	社会の一員として当然	11	(25.0)	1	(3.4)
	余暇を有効に	2	(4.5)	4	(13.8)
	気の毒な人をみすごせない	1	(2.3)	1	(3.4)
	友人等に誘われた	5	(11.4)	0	(0)
	本や新聞，人の話を聞いて	0	(0)	1	(3.4)
	身近にボランティアグループがあった	1	(2.3)	5	(17.2)
	特技を身につけ，または生かしたい	1	(2.3)	4	(13.8)
	よい仲間を得たい	4	(9.1)	5	(17.2)
	ただなんとなく	4	(9.1)	1	(3.4)
	その他	2	(4.5)	3	(10.3)
	小計	31	(70.5)	25	(85.9)
	ある	23	(52.3)	15	(51.7)
	ない	5	(11.4)	3	(10.3)
	N・A	16	(36.4)	11	(37.9)

項目	カテゴリー		男性 N＝44	(%)	女性 N＝29	(%)
活動をする上の問題	あるの理由（M・A）男性 23 女性 15	周囲の理解が足りない	9	(39.1)	8	(53.3)
		よいリーダーや相談相手なし	9	(39.1)	3	(20.0)
		資金不足	1	(4.3)	2	(13.3)
		打合せや相談の場がない	2	(8.7)	2	(13.3)
		時間がとれない	13	(56.5)	7	(46.7)
		人間関係がうまくいかない	1	(4.3)	2	(13.3)
		心身が疲れる	0	(0)	0	(0)
		自己負担が多く困る	0	(0)	1	(6.7)
		その他	1	(4.3)	0	(0)
		小計	36	(156.3)	25	(166.6)

項目	カテゴリー		男性 N=420	(%)	女性 N=592	(%)
ボランティア活動に対する過去の参加経験	ある		32	(7.6)	57	(9.6)
	ない		344	(81.9)	493	(83.3)
	不明および非該当		44	(10.5)	42	(7.1)
	現在参加していない理由 男性 32 女性 57	仕事が忙がしかった	10	(31.3)	21	(36.8)
		グループ活動についていけない	3	(9.4)	3	(5.3)
		受入側とうまくいかなかった	2	(6.3)	2	(3.5)
		つきあい程度に参加したため	11	(34.4)	13	(22.8)
		家族が反対したため	0	(0)	1	(1.8)
		自分の楽しみを持つことが必要	4	(12.5)	3	(5.3)
		その他，不明	2	(6.3)	14	(24.6)
	今後の参加希望 男性 344 女性 493	今後は参加したい	45	(13.1)	77	(15.6)
		参加したいが方法がわからない	52	(15.1)	89	(18.1)
		参加したいがてれくさい	40	(11.6)	71	(14.4)

項目	カテゴリー		男性 N=420	(%)	女性 N=592	(%)
		参加する気持はない	200	(58.1)	222	(45.0)
		N・A	7	(2.0)	34	(6.9)
老人や体の不自由な人，子どもなどが困っている時	すすんで手をかしたり助ける		141	(33.6)	181	(30.6)
	時と場合によっては助ける		200	(47.6)	313	(52.9)
	近くの人に呼びかけて共同で助ける		14	(3.3)	27	(4.6)
	気になるが恥しいので通りすぎる		6	(1.4)	9	(1.5)
	誰かがやれば手伝う		4	(1.0)	4	(0.7)
	そのまま通りすぎる		6	(1.5)	1	(0.2)
	わからない		19	(4.5)	22	(3.7)
	N・A		30	(7.1)	35	(5.9)
ボランティア活動について	積極に参加すべき		111	(26.4)	189	(31.9)
	福祉は国や市町村でやるべき		57	(13.6)	45	(7.6)
	一般も協力すべき		129	(30.7)	226	(38.2)
	「ていこう」を感じる		40	(9.5)	34	(5.7)
	自分のことは自分でやるべき		20	(4.8)	20	(3.4)
	その他		16	(3.8)	30	(5.1)
	N・A		47	(11.2)	48	(8.1)

働く青少年のボランティア活動に関するアンケート調査クロス集計表

		福祉施設などでの活動								
		遊び相手・話し相手	演芸	学習	技術奉仕	労働奉仕	衣料品の修理	提供	その他	計
年齢	～19才	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		1	1	0	0	1	0	0	0	3
	20～21才	1	0	1	0	1	0	5	0	8
		1	1	1	1	2	0	2	0	8
	22～24才	1	0	1	0	3	0	14	0	19
		4	0	1	3	2	0	1	0	11
学歴	中学卒	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		0	0	0	0	0	0	0	0	0
	高校卒	1	0	1	0	3	0	19	0	24
		6	2	2	4	4	0	3	0	21
	短大卒 大学卒	1	0	1	0	1	0	0	0	3
		0	0	0	0	1	0	0	0	1
平日の自由時間	3時間未満	1	0	0	0	1	0	3	0	5
		3	0	1	1	2	0	1	0	8
	3時間～5時間未満	0	0	2	0	1	0	10	0	13
		2	2	1	3	3	0	2	0	13
	5時間以上	1	0	0	0	2	0	6	0	9
		1	0	0	0	0	0	0	0	1
在学中のボランティア活動経験	有	2	0	1	0	4	0	17	0	24
		5	2	1	4	5	0	3	0	20
	無	0	0	0	0	0	0	1	0	1
		1	0	1	0	0	0	0	0	2
事業所の規模	1000人以上	0	0	0	0	3	0	17	0	20
		4	1	0	2	3	0	1	0	11
	300～999人	1	0	1	0	1	0	1	0	4
		1	1	0	1	2	0	2	0	7
	50～299人	1	0	0	0	0	0	1	0	2
		0	0	0	0	0	0	0	0	0
	49人以下	0	0	1	0	0	0	0	0	1
		1	0	2	1	0	0	0	0	4

注　上段：男　下段：女

		個人やグループに対して行う活動							
		遊び相手・話し相手	身のまわりの世話	グループのリーダー	買物の手伝い・通園の介助	点訳リーディングサービス	ドライブ	その他	計
年齢	～19才	0	0	0	0	0	0	0	0
		0	0	2	0	0	0	0	2
	20～21才	2	0	2	0	0	2	0	6
		3	0	1	0	0	0	0	4
	22～24才	2	4	0	0	0	0	2	8
		3	1	2	0	1	0	1	8
学歴	中学卒	2	0	0	0	0	0	0	2
		0	0	0	0	0	0	1	1
	高校卒	2	3	2	0	0	2	1	10
		6	1	3	0	1	0	0	11
	短大卒 大学卒	0	1	0	0	0	0	1	2
		0	0	2	0	0	0	0	2
平日の自由時間	3時間未満	2	0	0	0	0	0	1	3
		1	0	1	0	0	0	1	3
	3時間～5時間未満	1	2	0	0	0	0	1	4
		4	1	4	0	1	0	0	10
	5時間以上	1	2	2	0	0	2	0	7
		1	0	0	0	0	0	0	1
在学中のクラブ活動経験	有	3	4	2	0	0	2	2	13
		4	0	5	0	1	0	1	11
	無及不明	1	0	0	0	0	0	0	1
		2	1	0	0	0	0	0	3
事業所の規模	1000人以上	3	2	1	0	0	1	1	8
		1	1	2	0	1	0	0	5
	300～999人	1	1	1	0	0	1	1	5
		2	0	2	0	0	0	0	4
	50～299人	0	0	0	0	0	0	0	0
		1	0	1	0	0	0	0	2
	49人以下	0	1	0	0	0	0	0	1
		2	0	0	0	0	0	1	3

		環境改善，社会制度に対する活動										
		募金活動	清掃	緑化運動	公害防止活動	保健衛生活動	施設づくり	環境づくり	制度の改正	調査特別活動	その他	計
年齢	～19才	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2
	20～21才	3	2	2	2	1	0	0	0	1	0	11
		1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	3
	22～24才	4	4	0	0	0	0	0	4	0	1	13
		3	5	0	0	0	0	0	0	0	1	9
学歴	中学卒	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	高校卒	7	5	2	2	1	0	0	2	1	1	21
		3	5	0	0	0	0	0	0	0	2	10
	短大卒 大学卒	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	2
		2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	4
平日の自由時間	3時間未満	2	1	0	0	0	0	0	2	0	0	5
		2	3	0	0	0	0	0	0	0	0	5
	3時間～5時間未満	2	2	1	2	0	0	0	1	0	0	8
		3	4	0	0	0	0	0	0	0	2	9
	5時間以上	3	3	1	0	1	0	0	1	1	1	11
		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
在学中のボランティア活動経験	有	7	6	2	2	1	0	0	4	1	1	24
		5	6	0	0	0	0	0	0	0	2	13
	無	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
事業所の規模	1000人以上	6	6	2	2	1	0	0	2	1	1	21
		3	4	0	0	0	0	0	0	0	1	8
	300～999人	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	2
		1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	3
	50～299人	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	49人以上	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
		0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1

		活動をはじめたきっかけ										
		社会の一員として当然	余暇を有効に	せない気の毒な人をみすご	友達等に誘われた	本や新聞、人の話など	ブが身近にボランティアグルー	生かしたいため特技を身につけたり	よい仲間を得たいため	ただ何となく	その他	計
年齢	～19才	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		0	0	1	0	0	1	0	1	0	1	4
	20～21才	2	1	0	1	0	0	0	2	3	0	9
		0	2	0	0	0	1	1	2	1	1	8
	22～24才	9	1	1	4	0	1	1	2	1	2	22
		1	2	0	0	1	3	3	2	0	1	13
学歴	中学卒	1	0	0	1	0	0	0	1	0	0	3
		0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
	高校卒	9	1	1	4	0	0	0	2	4	2	23
		1	4	1	0	1	5	3	5	1	2	23
	短大卒 大学卒	1	1	0	0	0	1	1	1	0	0	5
		0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
平日の自由時間	3時間未満	4	0	0	1	0	0	0	1	0	1	7
		0	1	0	0	0	1	1	0	0	1	4
	3時間～5時間未満	4	1	1	3	0	1	1	1	1	0	13
		1	3	1	0	1	4	3	5	1	2	21
	5時間以上	3	1	0	1	0	0	0	2	3	1	11
		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
在学中のクラブ活動経験	有	11	2	1	4	0	1	1	3	4	2	29
		1	3	1	0	1	4	4	5	1	3	23
	無	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	2
		0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	2
事業所の規模	1000人以上	8	1	1	4	0	0	1	2	4	1	22
		0	1	0	0	1	3	0	2	0	2	9
	300～999人	1	1	0	1	0	0	0	2	0	1	6
		0	2	1	0	0	1	2	3	1	0	10
	50～999人	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
		0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
	49人以下	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
		1	1	0	0	0	1	2	0	0	0	5

		活動上の問題は？				活動上問題あり，その理由								
		ある	ない	N・A	計	周囲の理解が不足	リーダーや相談相手がいない	資金が足りない	場所が不足グループ員の打合せ	時間がとりにくい	人間関係がうまくいかない	心身が疲れる	自己負担が多く困る	その他
年齢	～19才	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		2	1	2	5	2	1	0	0	1	0	0	0	0
	20～21才	8	0	7	15	3	2	0	1	3	1	0	0	0
		4	1	4	9	2	0	1	2	1	1	0	1	0
	22～24才	15	5	8	28	6	6	1	1	10	0	0	0	1
		9	1	5	15	4	2	1	0	5	1	0	0	0
学歴	中学卒	2	0	1	3	1	2	0	1	1	0	0	0	0
		0	1	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	高校卒	19	4	15	38	7	6	1	1	11	1	0	0	0
		14	1	10	25	8	2	2	2	6	2	0	1	0
	短大卒 大学卒	2	1	0	3	1	1	0	0	1	0	0	0	1
		1	1	0	2	0	1	0	0	1	0	0	0	0
平日の自由時間	3時間未満	6	1	0	7	4	1	1	1	4	0	0	0	0
		4	2	4	10	1	1	1	0	1	0	0	1	0
	3時間～～5時間未満	10	2	9	21	3	4	0	0	6	0	0	0	1
		10	1	4	15	7	1	1	2	5	2	0	0	0
	5時間以上	7	2	7	16	2	4	0	1	3	1	0	0	0
		1	0	3	4	0	1	0	0	1	0	0	0	0
在学中のクラブ活動経験	有	20	5	10	35	9	6	1	1	11	1	0	0	1
		12	3	8	23	7	2	1	2	6	2	0	0	0
	無	1	0	4	5	0	1	0	0	1	0	0	0	0
		3	0	3	6	1	0	1	0	1	0	0	1	0
事業所の規模	1000人以上	16	5	2	23	6	6	0	1	10	0	0	0	0
		7	2	2	11	3	1	0	0	4	1	0	0	0
	300～999人	4	0	11	15	2	2	1	1	1	1	0	0	0
		5	0	5	10	3	1	0	2	2	1	0	0	0
	50～999人	2	0	2	4	1	0	0	0	2	0	0	0	0
		1	0	2	3	0	1	0	0	1	0	0	0	0
	49人以下	1	0	1	2	0	1	0	0	0	0	0	0	1
		2	1	2	5	2	0	2	0	0	0	0	1	0

		活動への参加経験				参加経験あり，現在不参加の理由					
		ある	ない	N・A	計	仕事が忙しかった	ていけないグループ活動について	いかない受け入れ側とうまく	つきあい程度の参加	家族が反対	たほうがよい自分の楽しみをもっ
年齢	～19才	7	71	5	83	1	2	1	1	0	1
		11	127	6	144	1	2	1	2	1	0
	20～21才	5	86	12	103	1	0	0	1	0	0
		23	184	14	221	10	0	0	6	0	0
	22～24才	20	187	27	234	8	1	1	9	0	3
		23	182	22	227	10	1	1	5	0	3
学歴	中学卒	7	54	5	66	3	1	1	3	0	0
		4	43	6	53	0	0	0	1	0	0
	高校卒	19	215	33	267	3	2	0	7	0	2
		32	389	31	452	11	2	1	7	1	3
	短大卒 大学	6	73	4	83	4	0	1	1	0	2
		21	55	4	80	10	1	1	5	0	0
平日の自由時間	3時間未満	9	92	12	113	5	1	0	1	0	0
		21	166	13	200	10	1	0	6	0	0
	3時間～5時間未満	16	141	17	174	4	1	1	4	0	4
		27	203	19	249	10	1	0	6	1	3
	5時間以上	7	111	15	133	1	1	1	6	0	0
		9	124	10	143	1	1	2	1	0	0
在学中のクラブ活動群験	有	26	246	36	308	7	2	1	11	0	3
		40	326	26	392	18	1	1	9	1	2
	無	4	83	3	90	1	0	0	0	0	1
		17	140	13	170	3	1	0	4	0	1
事業所の規模	1000人以上	16	102	27	145	5	2	1	4	0	1
		27	249	22	298	11	2	1	9	1	3
	300～999人	6	72	8	86	2	0	0	3	0	2
		13	101	11	125	3	1	1	2	0	0
	50～299人	9	129	4	142	2	0	0	4	0	1
		4	97	6	107	3	0	0	0	0	0
	49人以下	1	40	4	45	1	1	1	0	0	0
		12	45	3	60	4	0	0	2	0	0

		活動への参加経験				参加経験なし，今後は？					
		ある	ない	NA	計	今後参加したいと思う	方法がわからない	さい参加したいがてれく	参加する気持はない	NA	計
年齢	～19才	7	71	5	83	6	16	4	44	1	71
		11	127	6	144	20	28	17	51	11	127
	20～21才	5	86	12	103	14	11	13	47	1	86
		23	184	14	221	30	29	28	85	12	184
	22～24才	20	187	27	234	25	25	23	109	5	187
		23	182	22	227	27	32	26	86	11	182
学歴	中学卒	7	54	5	66	8	14	3	27	2	54
		4	43	6	53	9	8	6	16	4	43
	高校卒	19	215	33	267	28	31	29	126	1	215
		32	389	31	452	59	71	55	180	24	389
	短大卒 大学卒	6	73	4	83	9	6	7	47	4	73
		21	55	4	80	8	10	7	24	6	55
平日の自由時間	3時間未満	9	92	12	113	10	13	8	60	1	92
		21	166	13	200	26	30	23	71	16	166
	3時間～5時間未満	16	141	17	174	19	27	14	76	5	141
		27	203	19	249	28	37	32	95	11	203
	5時間以上	7	111	15	133	16	12	18	64	1	111
		9	124	10	143	23	22	16	56	7	124
在学中のクラブ活動経験	有	26	246	36	308	36	35	30	142	3	246
		40	326	26	392	56	56	45	145	24	326
	無	4	83	3	90	7	14	9	49	4	83
		17	140	13	170	19	30	22	60	9	140
事業所の規模	1000人以上	16	102	27	145	23	16	10	52	1	102
		27	249	22	298	40	49	38	102	20	249
	300～999人	6	72	8	86	13	8	11	38	2	72
		13	101	11	125	18	24	16	37	6	101
	50～299人	9	129	4	142	8	24	13	81	3	129
		4	97	6	107	15	10	11	56	5	97
	49人以下	1	40	4	45	1	4	6	28	1	40
		12	45	3	60	4	6	6	26	3	45

		老人や体の不自由な人が困っているとき，あなたは？								
		すすんで手をかす	手をかす時と場合によっては	共同で助ける	恥しいので通りすぎる	だれかがやれば手伝う	そのまま通りすぎる	わからない	N・A	計
年齢	～19才	25	36	4	1	2	2	7	6	83
		45	70	11	3	2	0	3	10	144
	20～21才	27	59	2	3	1	2	2	7	103
		69	119	6	4	2	0	11	10	221
	22～24才	89	105	8	2	1	2	10	17	234
		67	124	10	2	0	1	8	15	227
学歴	中学卒	25	29	1	1	1	1	4	4	66
		22	22	4	1	1	0	0	3	53
	高校卒	87	127	10	5	3	2	12	21	267
		130	247	19	8	3	1	19	25	452
	短大卒 大学卒	28	43	3	0	0	3	3	3	83
		26	43	2	0	0	0	3	6	80
平日の自由時間	3時間未満	42	53	5	0	2	0	2	9	113
		58	107	10	2	3	1	3	16	200
	3時間～5時間未満	58	83	8	4	0	3	10	8	174
		78	138	8	3	0	0	10	12	249
	5時間以上	41	64	1	2	2	3	7	13	133
		45	68	9	4	1	0	9	7	143
在学中のクラブ活動経験	有	106	145	10	5	4	4	10	24	308
		131	196	18	5	1	0	17	24	392
	無	27	46	4	1	0	2	7	3	90
		45	98	8	4	1	0	5	9	170
事業所の規模	1000人以上	48	68	5	6	0	2	4	12	145
		85	166	14	7	1	1	7	17	298
	300～999人	27	38	3	0	1	1	6	10	86
		42	60	7	0	0	0	6	10	125
	50～299人	50	70	4	0	3	3	8	4	142
		31	56	5	2	1	0	5	7	107
	49人以下	16	23	2	0	0	0	1	3	45
		23	29	1	0	2	0	4	1	60

		ボランティア活動についてどのように考えているか							
		積極的に参加すべき	国や市町村でやるべき	一般も協力すべき	ていこうを感じる	やるべき自分のことは自分で	その他	N・A	計
年齢	～19才	23	13	21	9	3	4	10	83
		48	13	53	7	5	7	11	144
	20～21才	30	12	30	8	7	2	14	103
		68	16	91	17	7	10	12	221
	22～24才	58	32	78	23	10	10	23	234
		73	16	82	10	8	13	25	227
学歴	中学卒	23	7	19	6	3	0	8	66
		23	5	15	4	3	2	1	53
	高校卒	73	38	76	22	15	12	31	267
		149	36	163	26	17	22	39	452
	短大卒 大学卒	14	12	33	12	2	4	6	83
		14	4	46	4	0	5	7	80
平日の自由時間	3時間未満	26	15	34	17	4	1	16	113
		61	18	75	12	6	7	21	200
	3時間～5時間未満	49	26	54	15	8	8	14	174
		79	19	101	11	8	12	19	249
	5時間以上	36	16	41	8	8	7	17	133
		49	8	50	11	6	11	8	143
在学中のクラブ活動経験	有	77	41	96	33	14	12	35	308
		126	32	149	21	13	22	29	392
	無	25	15	27	7	6	4	6	90
		57	10	70	10	5	6	12	170
事業所の規模	1000人以上	44	12	47	14	6	6	16	145
		98	23	106	21	12	12	26	298
	300～999人	20	12	24	10	4	2	14	86
		50	8	45	5	2	4	11	125
	50～299人	39	26	42	11	6	7	11	142
		27	12	39	6	5	9	9	107
	49人以下	8	7	16	4	4	1	5	45
		13	2	35	2	1	5	2	60

執　筆　者

はしがき及び第8章		江橋委員
第2章		鈴木委員
第4章	1	高瀬委員
	4	松下委員
第5章		吉沢委員
第7章	1	牧内委員
	2	松下委員

GAa1／1

8B－4－50

女性と仕事の未来館

館内

0096427 7